RITSUMEIKAN

# 立命館大学 大阪いばらきキャンパスマスタープラン 2018

# OSAKA IBARAKI Campus Master Plan 2018 | Ver.1

Beyond Borders

# 立命館大学

## 大阪いばらきキャンパス
## マスタープラン 2018 Ver.1

立命館大学

# ご挨拶

学校法人立命館 理事長　森島 朋三

学校法人立命館 総長　吉田 美喜夫

立命館は、近代日本の代表的な政治家であった西園寺公望が1869年に、20歳の若さで私塾「立命館」を創設したことに始まります。西園寺の精神を引き継ぎ、1900年、中川小十郎が京都法政学校を開き、「自由と清新」、つまり「自由にして進取の気風に富んだ学び舎の創造」を目指しました。以来、教育の内容とあり方をたゆまず検証し改革を積み重ね、常に社会の課題に向き合い、その解決に貢献できる学問研究を推進してまいりました。

2006年には、「立命館憲章」を制定し、2011年には立命館憲章を踏まえ、2020年に向けた立命館のあるべき姿として学園ビジョンR2020「Creating a Future Beyond Borders 自分を超える、未来をつくる。」を掲げました。そこでは、①多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開、②人類・自然・社会に貢献する立命館らしい研究大学への挑戦、③学ぶことの喜びを実現できる学園づくりを行動指針としています。

これらのビジョンを実現するために、2016年度から2020年度までの基本目標として、①知の創造拠点の形成、②教育・研究におけるグローバル化の推進、③主体的な学びの確立、④先進的な教育・研究への挑戦、⑤グローバル社会におけるステータスの確立、⑥私立総合学園の強みを活かした新しい一貫教育モデルの構築、⑦選ばれる学園の追求、を掲げています。これらを基本に育成する人間像として、「豊かな教養と確かな専門性、総合人間力を備えた人間」「イノベーションを創出する人間」「地域社会との連携・共創・貢献に、主体的に参画できる人間」「異なる文化や価値観を超えて協働し、創造的に問題解決を図る地球市民」の４つを掲げ、その育成を目指してまいります。

立命館は、北海道・滋賀・京都・大阪・大分にキャンパスを有し、２大学、４附属中学校・高等学校、1附属小学校に、学生・生徒・児童数約５万人を擁する総合学園となりました。そのなかで立命館大学は、2015年４月に大阪いばらきキャンパスを開設、これまでの京都キャンパス（衣笠・朱雀）、びわこ・くさつキャンパスと合わせて3府県に跨るキャンパスを擁する複数拠点型総合大学として新たな歩みをはじめました。

大阪いばらきキャンパス（OIC）は、「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」の教学コンセプトのもと、１）多様でグローバルな連携の可能性と学園・立命館大学のフロントライン・リエゾン拠点としての役割、２）問題解決志向の教育・研究拠点としての役割、３）キャンパスを超えて教職員・学生・生徒・児童・校友や市民が集まり、新たな学生文化が育まれる拠点　としての役割を有するものとして、全学的な協力と支援のもとでその開設の意義を確認してきました。地域と連携した多彩な取り組みが進展するとともに、地域に開かれたキャンパスとして、日常的に市民との交流がはかられています。また、「アジアのゲートウェイ」のコンセプトを具現化する取り組みとして、毎年度「アジア・ウィーク」を開催するとともに、政策科学部における英語基準コース（CRPS専攻）の展開に加え、2019年４月には、オーストラリア国立大学（ANU）との連携・共同による新たな学士課程、グローバル教養学部を開設します。

これまで取り組んできました、魅力的で豊かな教育・研究と地域・社会連携を実現するためのキャンパスづくりを、今後さらに発展させることが重要です。そうした観点から、この度、これからのキャンパス創造を計画的に実現していくことを目指して、大阪いばらきキャンパスの「キャンパスマスタープラン 2018 Ver.1」をまとめる運びとなりました。

キャンパスマスタープランは、主に次のような方針を提示しています。

（１）キャンパス創造の新たな展開の実現

普遍的な理念と時代の要請とともに変化する教学展開に対応し、多様性のある環境や自主的な学びの場の創出に向けたキャンパスづくりを目指します。また、学生・教職員が多くの時間を過ごすキャンパスとして、アメニティや安全・安心、健康、環境保全についても配慮しながら、キャンパスが魅力的で豊かな空間になるための中長期的に目指すべき方向性を示しています。

（２）「豊かなキャンパス空間」の実現に向けた継続的取り組み

立命館ではこれまで様々な教学展開に合わせて必要な質的・量的整備を進めてまいりました。その上で、OICにおいては、都市型キャンパスとして快適に学ぶことのできるキャンパス環境の質の向上が不可欠となっています。これらは単に施設の改修や建物の新・増設など、部分的なキャンパス整備だけでは構築し得ません。高い水準を見据えた目標とファシリティマネジメントの観点を含め、継続的かつ計画的に取組む必要性を示しています。

（３）大学構成員はじめ関係者間のキャンパス計画を進める手段としての活用

キャンパスにおける法的諸条件や前提となる条件・課題の提示、専門的視点からの方針、各種ファシリティデータなど、キャンパス計画を進めるうえで有効な手段（ツール）として活用可能な情報を示しています。OICは、地域に開かれたキャンパスとして、地域の皆さまにもキャンパス創造に多くのご協力を頂いており、キャンパス創造の考え方などの情報を共有する手段（ツール）としても活用します。

今次キャンパスマスタープランは、専門的視点から配慮すべき視点や普遍的な条件を提示していますが、「2018 Ver.1」と掲げたことでもお分かりいただけるように、将来的な大学展開や教学改革などの変更に柔軟に対応して見直しながら継続されるものです。こうした「キャンパスマスタープラン2018 Ver.1」の役割を踏まえつつ、大学展開や教学改革の実現を支え、水準の高い、サステイナブルなキャンパスの実現に向けた取り組みを継続してまいります。

# はじめに

## 大阪いばらきキャンパスマスタープラン2018 Ver.1の策定背景と位置づけ

将来にわたり良好で持続可能なキャンパスを目指し、中長期的な視点からの総合整備計画としてのキャンパスマスタープランを策定するために、2013年度に京都キャンパス将来構想検討委員会の下に「2020年までの京都キャンパスプラン策定部会」、BKC 将来構想検討委員会の下に「2015 年度以降のBKC キャンパス整備計画検討部会」を設置し検討を行い、2014年度に暫定版、2015年度に「京都キャンパスマスタープラン2015 Ver.1」及び「びわこ・くさつキャンパスマスタープラン2015 Ver.1」を取りまとめたことが報告された。（2015年 9 月30日常任理事会）

大阪いばらきキャンパス（以下OIC）については、2015年度に開設以降、すでに2016年 4 月には総合心理学部が開設され、今後も2018年 4 月人間科学研究科設置、2019年 4 月グローバル教養学部設置が予定されており、新たな教学展開と関わって施設整備の検討が進められている。それらに伴い、OICにおける良好な環境の維持と的確なキャンパス整備を継続していくためにも、OICキャンパスマスタープラン策定の必要性がOIC将来構想検討委員会（2016年12月16日）にて確認された。策定作業に当たっては、OICキャンパス将来構想検討委員会の下に「OICMP策定作業グループ」が設置され、検討が進められ、そこでの議論内容やキャンパス計画室での議論内容を反映させた。また、OICの各学部・研究科教職員へのヒアリングや学友会を中心とした学生からのヒアリング等での意見の反映を行い、「大阪いばらきキャンパスマスタープラン2018 Ver.1」を取りまとめた。ついては、その内容を報告する。

キャンパスマスタープランは、その上位に位置づけられるアカデミック・プラン（R2020計画等の学園・大学の中長期計画や経営戦略）をキャンパス整備の面から支えるものであると同時に、15年～30年程度の長期的な視野に立ったキャンパス整備の指針と当面の課題等を示したものであり、R2030計画の策定をはじめとするアカデミック・プランの変更など与条件に変化があった場合には、当然、適宜更新していく性格のものである（今次文書を2018 Ver.1 としているのはこのためである）。

一方、京都キャンパスおよび、びわこ・くさつキャンパスの各マスタープラン策定時に、キャンパス将来構想検討委員会や各機関より、中長期的な指針の重要性は理解しつつも、それが当面する課題の解決にどのように結びつくのかについてのわかりやすい説明の必要性について指摘があった。キャンパスマスタープランは、それ自体が当面する課題解決の具体的な方法を示すものではなく、当面するキャンパス整備を進める際の指針として活用すべきものであり、これらは相互に連関していることを確認しており、今般の大阪いばらきキャンパスマスタープランにおいても当該の方向性を踏襲するものである。

この点を踏まえた上で、確認しておくべき当面するキャンパス整備上の重要課題について以下に整理する。

１）今後のアカデミック･プランへの対応及び教学条件の確保
２）学生・教職員が快適に過ごすためのキャンパス･アメニティの向上
３）地域に開かれたキャンパスとしてのセキュリティ
４）分林保弘記念国際交流館（仮）および保育所等の施設整備

この間の本学におけるキャンパス整備ならびにキャンパスマスタープランの策定は、私立大学の中ではきわめて先進的な事例として全国でも注目を集めており、今後、魅力あふれるキャンパスづくりに取り組んでいることを社会にも積極的に発信していくことが重要である。また、今後の当面するキャンパス整備課題（アクションプラン）の具体化にあたっては、中長期的な総合的整備計画の指針として、「大阪いばらきキャンパスマスタープラン2018 Ver.1」を活用していくことも重要である。その際、教職員や学生といった構成員からも広く意見を募る必要があることから、その公開については、教職員に向けては教職員ポータルでの資料データのダウンロード（会議資料・書式ダウンロード→総合企画部主管会議資料→各キャンパス将来構想検討委員会）を可能とし、その他、社会への情報発信や他大学等への資料提供とも関わって、HPへの掲載、冊子、概要版等の作成について検討する。また、キャンパスの現状や学生・教職員のニーズの把握を、キャンパス計画室を中心に継続し、学生・教職員が参画したキャンパス創造、キャンパス計画を推進していく。

（2018年４月４日（水）常任理事会報告）

# 目次


Chapter 1 **立命館大学キャンパスマスタープラン策定に向けて** 8
1.1 キャンパスマスタープランの理念 9
1.2 キャンパスマスタープランの策定と運用 10
1.3 キャンパスマスタープランの構成 11
1.4 キャンパスマスタープランの達成方策 12
1.4.1 フレームワークプランの設定 12
1.4.2 アクションプランの設定 13
1.4.3 リーディングプロジェクトの設定 13

Chapter 2 **立命館大学キャンパス整備の基本目標** 14
2.1 キャンパスマスタープランの位置づけと役割 15
2.2 立命館学園の概要 16
2.3 キャンパス整備の空間コンセプト 20
2.4 キャンパスマスタープランの基本方針 21

Chapter 3 **大阪いばらきキャンパスの空間コンセプト** 24
3.1 大阪いばらきキャンパスの開設の経緯 25
3.2 キャンパスの基本情報 27
3.2.1 キャンパスの概要 27
3.2.2 学部・研究科の構成 27
3.3 敷地概要 29
3.3.1 茨木の歴史・背景 29
3.3.2 キャンパス建設地の履歴 30
3.3.3 都市計画的な条件 31
3.3.4 地区計画 31
3.4 基本的な考え方 32
3.4.1 教学コンセプト 32
3.4.2 キャンパス整備の特色 33

Chapter 4 **フレームワークプラン** 36
4.1 ゾーニングと建物配置 38
4.1.1 キャンパスの骨格軸 38
4.1.2 二つの軸によるゾーニング 39
4.1.3 建物の配置と構成 40
4.2 交通 42
4.3 建物内部の機能構成 44
4.4 パブリックスペース 52
4.4.1 パブリックスペース 52
4.4.2 立命館におけるパブリックスペースの必要性 53
4.4.3 パブリックスペースの検討において考慮すべき事項 54

4.4.4　パブリックスペースの配置と計画の考え方 56
4.5　建築デザイン 63
4.6　ランドスケープ 65
4.6.1　ランドスケープゾーニング 65
4.6.2　キャンパスランドスケープで重視すべき点 66
4.7　安全・安心 69
4.8　環境配慮 72
4.8.1　エコアクション・キャンパス 72
4.8.2　外装での配慮 75
4.8.3　その他の配慮 77
4.9　リザーブスペースについて 78

Chapter 5
**大阪いばらきキャンパスの課題と方策** 79
5.1　OIC開設後の整備状況 80
5.2　現状と課題 82
5.2.1　施設整備の検討課題 82
5.2.2　アメニティ課題 84
5.2.3　セキュリティについて 86
5.3　リーディングプロジェクト（重要検討課題） 88
5.3.1　OICにおけるリーディングプロジェクトの役割と設定方針 88
5.3.2　当面のリーディングプロジェクト 88
5.4　アクションプランの今後の進め方と配慮事項 89
5.4.1　当面のアクションプラン 89

Chapter 6
**キャンパス整備におけるファシリティマネジメント** 90
6.1　ファシリティマネジメントの必要性 91
6.1.1　ファシリティマネジメントとは 91
6.1.2　運用の効率化を図る推進体制 91
6.2　既存施設の考え方 92
6.2.1　既存施設の改修・増改築の対策 92
6.2.2　施設データの管理・更新 92
6.2.3　空間の質の向上に向けたライフサイクルコストの検討 92
6.3　緑地管理 93
6.3.1　都市景観のストックとしての緑地管理 93
6.3.2　市民参加の緑地管理 93
6.4　キャンパス整備の推進体制 94
6.4.1　施設整備の推進体制 94
6.4.2　施設や環境を最大限に活かすための管理・運営体制 94

Chapter 1

# 立命館大学 キャンパスマスタープラン 策定に向けて

1.1　キャンパスマスタープランの理念

1.2　キャンパスマスタープランの策定と運用

1.3　キャンパスマスタープランの構成

1.4　キャンパスマスタープランの達成方策

1.4.1　フレームワークプランの設定

1.4.2　アクションプランの設定

1.4.3　リーディングプロジェクトの設定

Chapter1では、「立命館憲章」や「学園ビジョンR2020」などのアカデミックプランを支えるキャンパスマスタープランとしての理念や役割について確認する。

また、立命館大学におけるキャンパスマスタープランの策定までの検討の流れやキャンパス整備の目標達成までの方策などについて情報共有する。

# 1.1　キャンパスマスタープランの理念

私立総合学園である立命館が、立命館憲章に謳われているように、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献するため、その活動フィールドとして国内外に誇れるキャンパスを創造することを目指したキャンパスマスタープランを策定する。

## キャンパスマスタープランの運用指針

キャンパスマスタープランは、アカデミックプランを支え、中長期的な視点で良好なキャンパス環境を実現するために、キャンパス計画のビジョンやフレームワークを定めるものであり、具体的なアクションプラン策定の際の指針として運用する。

また、キャンパスマスタープランは、アカデミックプランや経営戦略等の時代に応じた変化に対応する為、定期的（概ね5年程度）に更新を行いながら継承されるものである。

（立命館大学びわこ・くさつキャンパスマスタープラン2015 Ver.1、立命館大学京都キャンパスマスタープラン2015 Ver.1より一部抜粋）

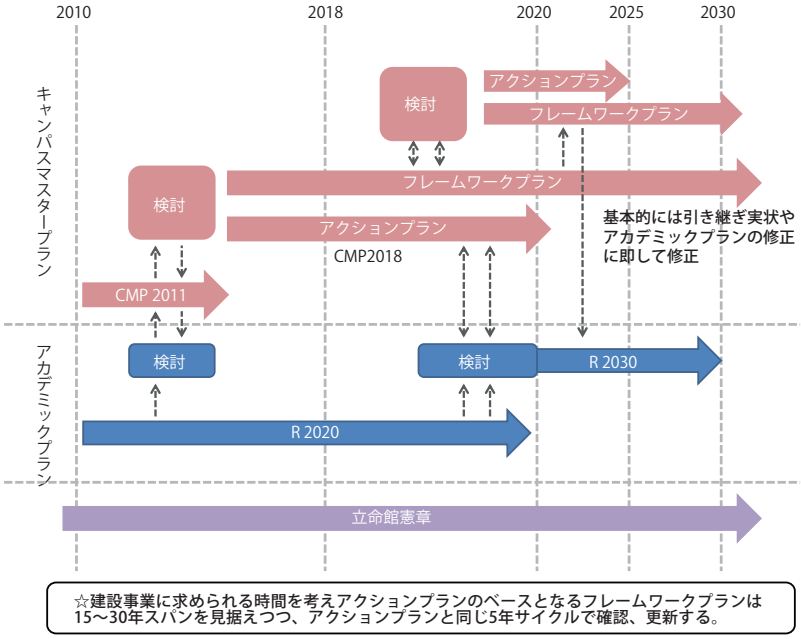



図 1-1　キャンパスマスタープラン(CMP)の時間軸の流れ

**【キャンパスマスタープランの構成】**

**フレームワークプラン：**

中長期的（15～30年後）なキャンパス像を想定したゾーニングや交通計画などに関するビジョン

**アクションプラン：**

短期（5年程度）を想定した施設整備の実行計画

# 1.2　キャンパスマスタープランの策定と運用

## キャンパスマスタープランの「策定」プロセス

良好なキャンパス環境・空間を創造するために、基本方針の策定、および部門別の整備方針の策定の各段階において合意形成を図りながら、最終的に大学として意思決定されたキャンパスマスタープランとして策定する。

キャンパスマスタープランをもとに実現に向けた取り組みを進めるためには、キャンパスの整備方針や活動方針を策定することが重要となる。

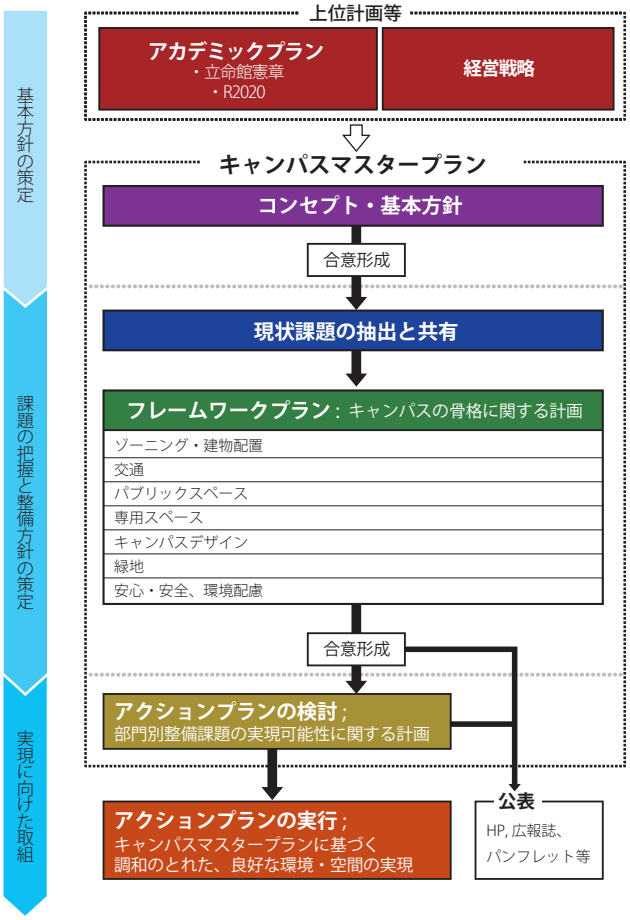



図 1-2　キャンパスマスタープランの策定プロセス

## キャンパスマスタープランの「運用」プロセス

キャンパスマスタープランの運用においては、図1-3のような運用プロセス（PDCAサイクル）を踏まえることで、将来的なアカデミックプランや経営方針の変更などにも対応しながら、更新を前提とした継続的な運用が可能となる。

また、各段階において、関係する諸機関の合意形成を図りつつ、学園として意思決定を行うことが重要となる。

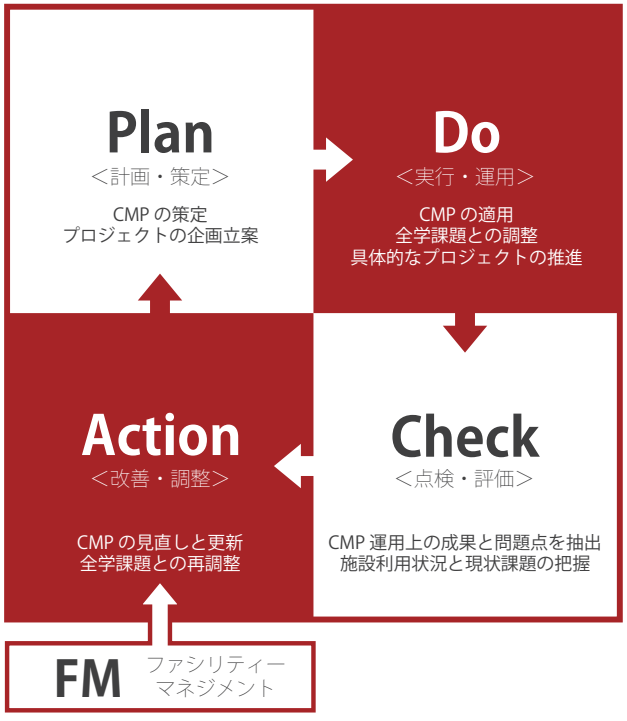



図 1-3　キャンパスマスタープラン(CMP)の運用プロセス

# 1.3　キャンパスマスタープランの構成



立命館大学のキャンパスマスタープランは「フレームワークプラン」、「アクションプラン」、「リーディングプロジェクト」の3つを骨格として検討を進める。図1-4にキャンパスマスタープランの構成を示す。

Chapter1ではキャンパスマスタープラン策定にあたり、キャンパスマスタープランの理念や役割、達成方策などを確認し、Chapter2ではキャンパス整備の基本方針を示し、立命館大学のキャンパス整備の基本目標として策定する。また、キャンパスごとの特徴に応じた方針の策定を進めるために、Chapter3では、目指すべきキャンパス像を共有するべく、大阪いばらきキャンパスの空間コンセプトを設定する。

さらに、部門別の中長期的な整備方針としてChapter4でフレームワークプランを示す。

Chapter5では、キャンパスにおける現状の把握から課題を抽出し、マスタープランでの検討を今後の具体的な整備につなげていくため、短期的な整備方針としてのアクションプランの検討課題を述べるとともに、フレームワークプランとアクションプランをつなぎ、目指すべきキャンパス整備を実現するためのリーディングプロジェクトについて確認する。また、Chapter6では、キャンパス整備におけるファシリティマネジメントの必要性について触れる。

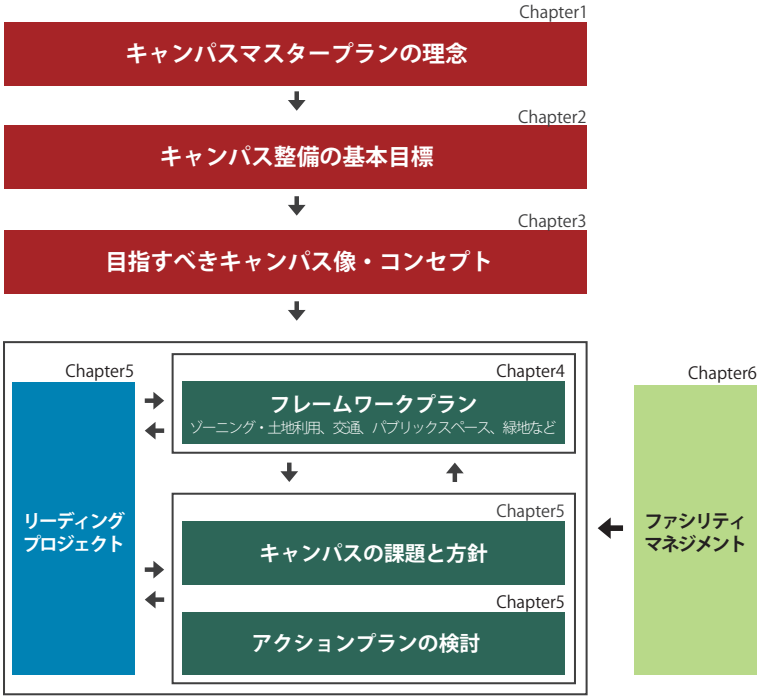



図1-4　キャンパスマスタープランの構成

# 1.4　キャンパスマスタープランの達成方策

キャンパスマスタープランは、整備期間別・課題別に方針を検討しながら、目指すべきキャンパス像をわかりやすく提示する必要がある。キャンパス整備に関する透明性の高い議論を促進し、目指すべきキャンパス像を学園の全構成員が共有することで、全学的協力体制による、学生・教職員が参画するキャンパス整備を推進する。また、必要に応じて行われる短期的な改修・更新などのキャンパス整備を長期方針と整合を持たせながら滞りなく実現できるようにし、適切な時期に長期的ビジョンの見直しを行う作業をキャンパスマスタープランの検討サイクルに含め、継承性と持続性を持ったキャンパスマスタープランの達成を目指す。

## 1.4.1　フレームワークプランの設定

フレームワークプランとは、概ね15～30年程度の中長期的なキャンパス全体の整備方針に基づく計画である。

キャンパス整備の方針を部門別に示すことで、課題や取り組むべき整備をわかりやすく伝えることが可能となる。

キャンパス空間の部門別方針は多層レイヤで構成されており、部門別方針の調整を図りながらレイヤを重ね合わせることで、良好なキャンパスの実現を目指す。

キャンパスには多くの建物が建ち、多くの学生、教職員が生活をしている。キャンパス空間は、時代に対応した教育を実現する場を提供し、社会情勢・財政状況などに柔軟に対応していかなくてはならない。その際、統一した方針のもとにキャンパス整備を進めていかなければ、キャンパスは無秩序な空間となり、建替えすらできない状態に陥る危険性がある。したがって、長期的視点でキャンパス全体を見通した計画を検討し、キャンパスマスタープランの位置づけを共有することがきわめて肝要である。

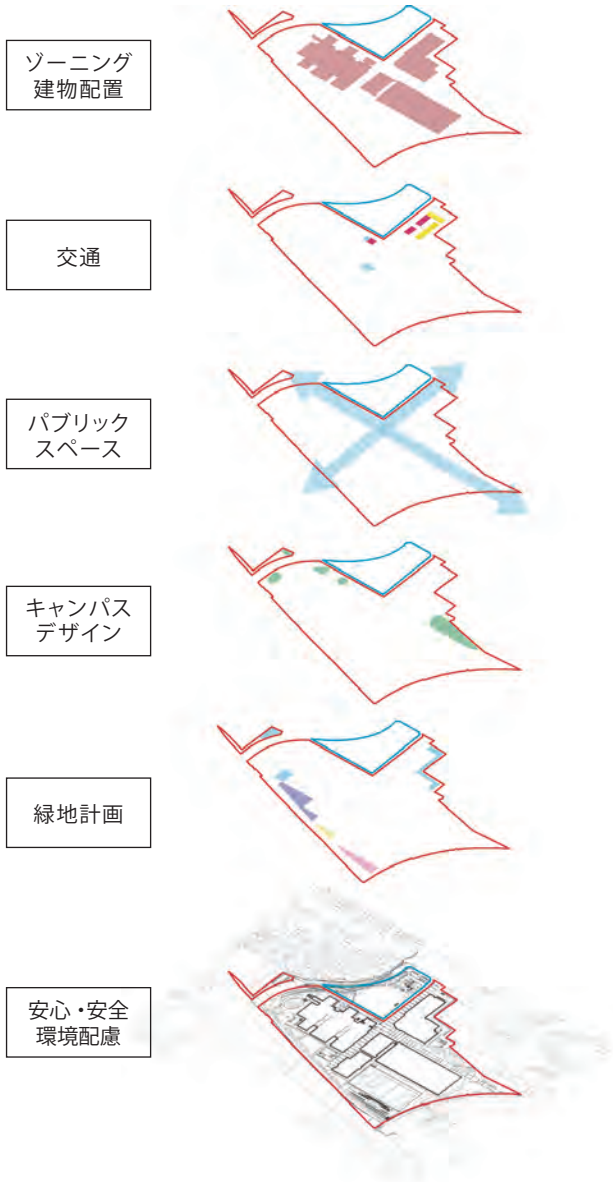



図1-5　キャンパスマスタープランの構成

## 1.4.2　アクションプランの設定

アクションプランとは、概ね5年程度の整備方針に基づく短期的な計画である。

フレームワークプランで掲げたキャンパス整備の方向性を実現化するためには、アカデミックプランだけでなく、経営戦略や財務条件とのすり合わせを行いながら実現可能性を踏まえた検討が重要である。

キャンパスマスタープランの策定においては、アクションプランとして検討すべき施設整備課題をフレームワークプランにおける俯瞰的な位置づけを行うとともに、アクションプランの具体的な検討に際しては、フレームワークプランとの整合性を保つために考慮が必要な条件の整理や、必要に応じたガイドラインの提示までを行うものとする。

## 1.4.3　リーディングプロジェクトの設定

リーディングプロジェクトとは、目指すべきキャンパスの実現に向け、キャンパス整備計画全体を主導するプロジェクトである。

アクションプランは、通常、個別単体の施設に関わるものであることが多いが、リーディングプロジェクトを設定することにより、従来個別に検討・整備していく手法では実現できなかった複合的な課題に取り組み、アカデミックプランと連動したキャンパス空間の再編・実現を目指す。またキャンパス計画における未決定の上位計画を個別の施設整備計画と連動して検討することで、上位計画との整合性を保ちつつ、個別の整備課題を迅速かつ円滑に解決することを可能とする。キャンパスマスタープランにおいて、特に必要と判断される課題をリーディングプロジェクト（重点検討課題）として設定できることとし、関係各所と中長期的に目指すべきキャンパス像や課題を共有しながら、柔軟かつ横断的に課題解決を図る（詳細は後述）。

**【リーディングプロジェクト設定のための条件】**

- 複数の施設整備課題をまたぐ複合的、横断的な整備計画であること。
- キャンパス全体のゾーニング計画や、個々のゾーンの面的な整備計画への影響が大きいこと。
- 優先順位の高いアクションプランを含みながら、フレームワークプランに関する未決定な事項に対して潜在的に決定づける可能性があること。

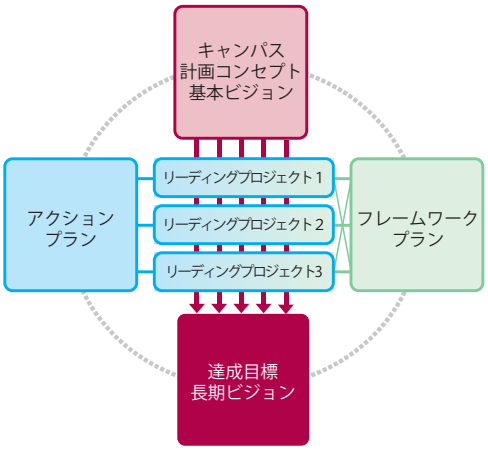



図1-6　リーディングプロジェクトの役割イメージ

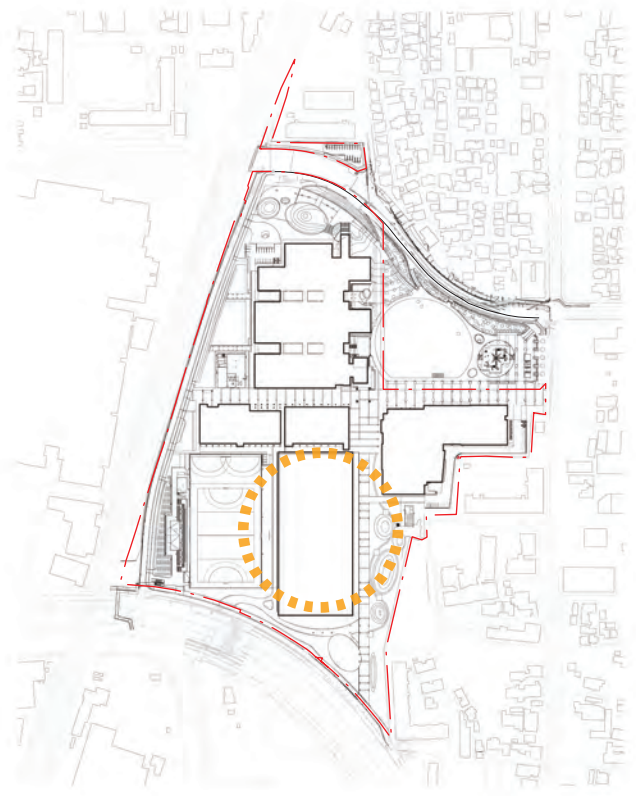


図1-7　大阪いばらきキャンパスマスタープラン2018 Ver.1
におけるリーディングプロジェクトエリア

Chapter 2

# 立命館大学
# キャンパス整備の基本目標

2.1　キャンパスマスタープランの位置づけと役割

2.2　立命館学園の概要

2.3　キャンパス整備の空間コンセプト

2.4　キャンパスマスタープランの基本方針

Chapter2では、キャンパス整備の空間コンセプトやマスタープランの基本方針を示し、立命館大学のキャンパス整備の基本目標として策定する。

# 2.1　キャンパスマスタープランの位置づけと役割

## アカデミックプランと連動した キャンパスマスタープラン

「立命館大学キャンパス創造の基本構想」（2011.10.12常任理事会）の到達点を踏まえながら、アカデミックプラン・経営戦略・建築計画の専門的検討などに基づいて、キャンパス整備方針・内容の検討を進めながら最適なフレームワークプランとしてのキャンパスマスタープランを策定する。

フレームワークプランを基本としたキャンパスマスタープランに沿って、短期的なアクションプランを検討し、立命館大学における良好なキャンパス環境整備を実現していくものとする。

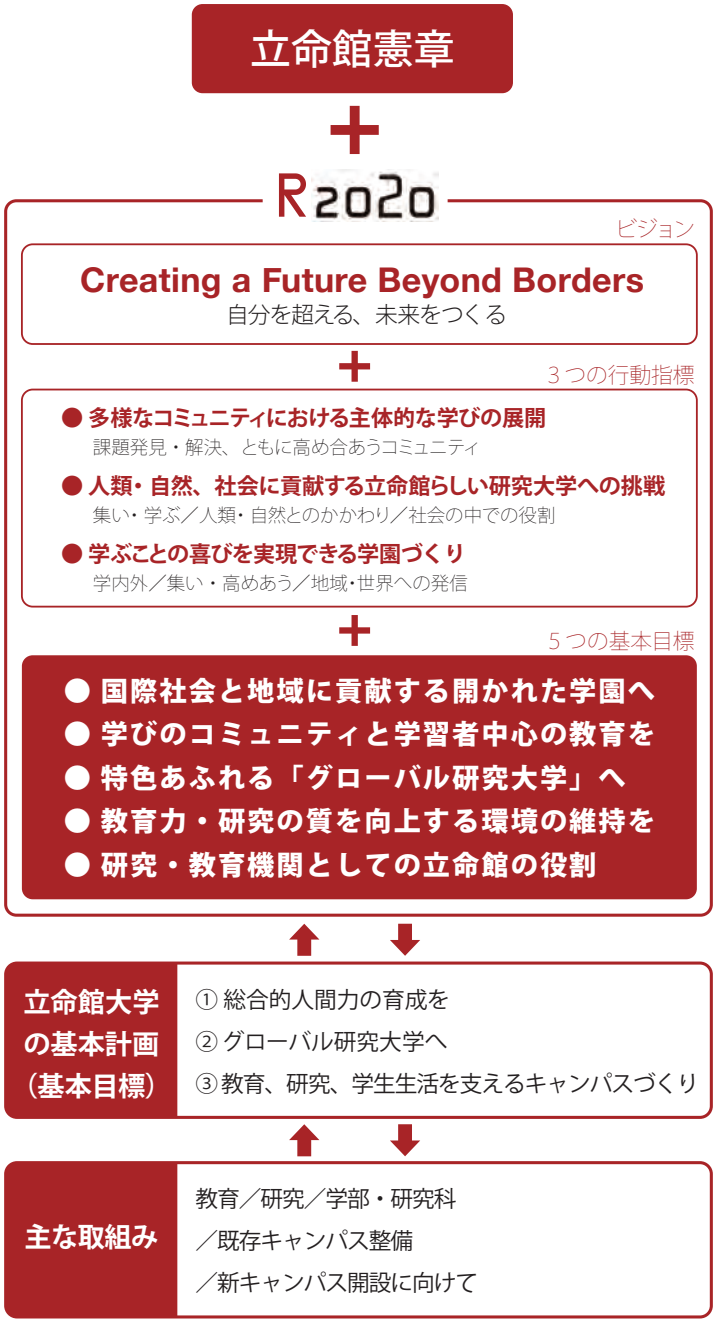



図 2-1 アカデミックプラン

# 2.2　立命館学園の概要

## 立命館学園の概要

1869（明治2）年、新しい時代を担う若者を育てるため、西園寺公望が私塾「立命館」を創始し、1900（明治33）年、文部大臣時代の西園寺の秘書であった中川小十郎が、その意志を引き継ぎ、立命館大学の前身となる「私立京都法政学校」を設立した。

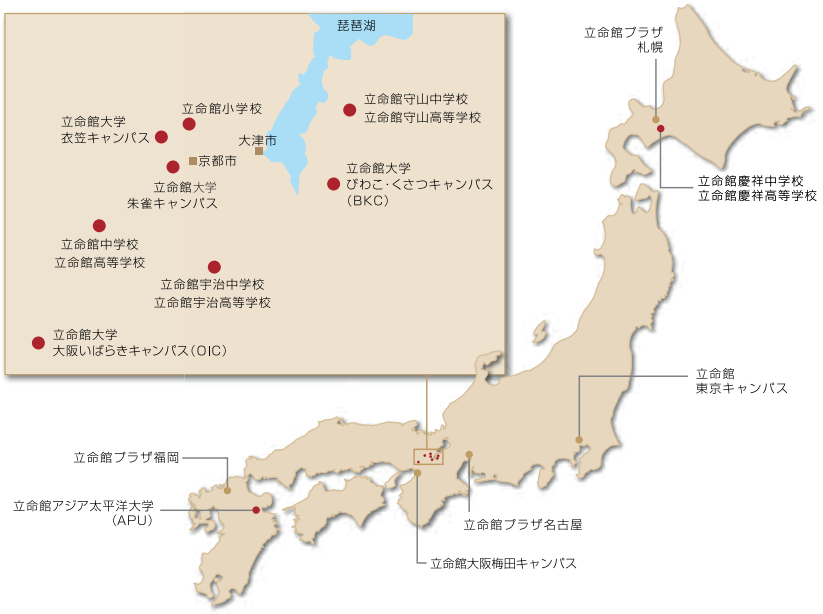
立命館学園は2010年に創立110周年を迎え、今日では、2大学、4高等学校・4中学校・1小学校を擁する総合学園となった。建学の精神「自由と清新」と教育・研究の理念「平和と民主主義」のうえに立ち、それを具体的にいかしつつ、「世界の立命館へ」というビジョンのもとで、今日の新しい時代と社会の要請に応える学園づくりを積み重ねている。（立命館HPより引用）

立命館学園全体において、
総敷地面積は2,325,997.86㎡
総延床面積は834,756.79㎡
を有している。
（2017年3月31日現在）

学祖　西園寺 公望
*Saionji kinmochi*

創立者　中川 小十郎
*Nakagawa kojuro*

1869年（明治2年）西園寺公望書「立命館」




| | |
|---|---|
| 立命館大学 朱雀キャンパス | ● 立命館中学校　立命館高等学校 |
| 立命館大学 衣笠キャンパス | ● 立命館宇治中学校　立命館宇治高等学校 |
| 立命館大学 びわこ・くさつキャンパス（BKC） | ● 立命館慶祥中学校　立命館慶祥高等学校 |
| 立命館大学 大阪いばらきキャンパス（OIC） | ● 立命館守山中学校　立命館守山高等学校 |
| 立命館アジア太平洋大学（APU） | ● 立命館小学校 |

**立命館東京キャンパス**
JR東京駅日本橋口に直結。首都圏での窓口・ネットワークの拠点としての機能を有しています。学生の就職支援を中心に、研究者交流や産学官連携の促進、セミナーや社会人向け公開講座、受験相談をはじめ校友・父母向けサービスなども行っています。
所在地 ● 東京都千代田区丸の内1-7-12　サピアタワー8階
TEL ● 03-5224-8188

**立命館大阪梅田キャンパス**
JR大阪駅をはじめ、阪急・阪神・地下鉄の関西主要交通網が広がる好立地に恵まれた大阪梅田キャンパスは、ビルの2フロアで開設されています。5階ではMBA・MOTによる社会人を対象にした講義や一般向けの公開講座を開講し、さらに14階では学生の就職活動を支援するなど、多様なニーズに応える「学び舎と社会の情報基地」となっています。
所在地 ● 大阪市北区小松原町2-4　大阪富国生命ビル5階・14階
TEL ● 06-6360-4895（14階）

**「立命館プラザ」**
大学での学びや入試・進路など、受験生や保護者の相談に応じる地域拠点。大学案内や入試に関する資料などを入手および閲覧できます。

■ **立命館プラザ札幌**
所在地 ● 札幌市中央区北4条西5丁目　アスティ45 12階（ACU内）
TEL ● 011-272-3883

■ **立命館プラザ名古屋**
所在地 ● 名古屋市中村区椿町16-16　ナゴヤ大和ビル7階
TEL ● 052-459-0750

■ **立命館プラザ福岡**
所在地 ● 福岡市博多区博多駅前1-15-20　NMF博多駅前ビル2階
TEL ● 092-432-8122

図 2-2 立命館学園の概要

## 立命館大学
## 3キャンパスの構成

立命館大学は、主たるキャンパスとして、京都キャンパス（衣笠キャンパス、朱雀キャンパス）、びわこ・くさつキャンパス（BKC）と2015年4月に開設した大阪いばらきキャンパス（OIC）によって構成される。京都・滋賀・大阪を結ぶ3キャンパスのいわばトライアングル体制となった。

立命館大学3キャンパスにおいて、
総敷地面積870,239.78㎡
総延床面積554,675.70㎡
を有し、そこで活動する学生は、
合計36,048人にのぼっている。

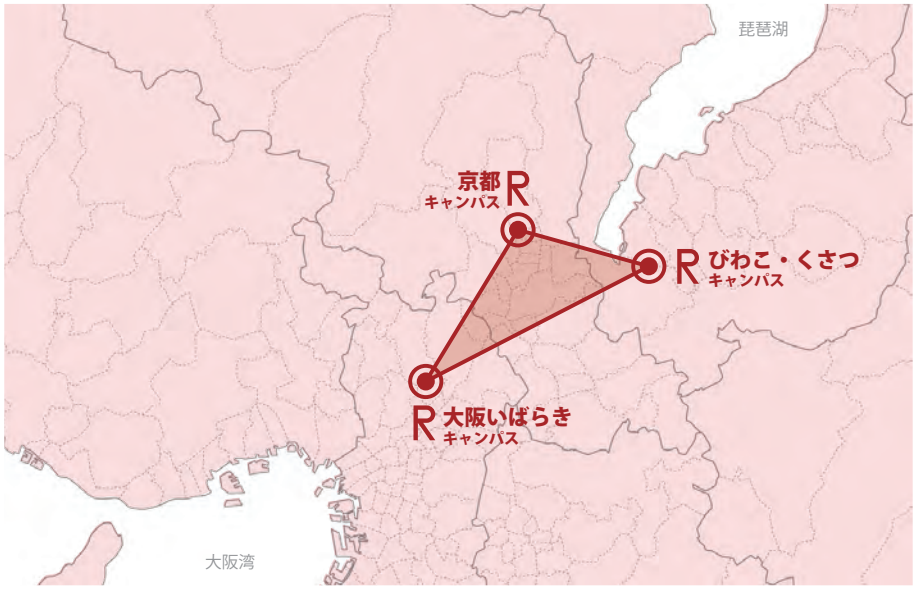



図2-3　立命館大学のトライアングル体制

表2-1　4キャンパスの主要データ

| | 衣笠キャンパス | 朱雀キャンパス | びわこ・くさつ キャンパス | 大阪いばらき キャンパス |
|---|---|---|---|---|
| 敷地面積 | 125,720.88㎡ | 8,119.02㎡ | 629,521.88㎡ | 106,878.00㎡ |
| 延床面積 | 171,158.50㎡ | 27,138.68㎡ | 250,470.41㎡ | 105,908.11㎡ |
| 学生数（2017年5月1日現在） | 15,454人 | 143人 | 14,151人 | 6,300人 |

※面積は2017年3月31日現在のデータである。
衣笠・朱雀キャンパスには氷室、原谷、双ケ丘、宇多野、柊野、その他土地、含まれていない。
びわこ・くさつキャンパスの面積にはBKCインターナショナルハウスが含まれていない。

### 衣笠キャンパス

立命館大学の現存する最も古いキャンパスである。衣笠山を背景に、鹿苑寺（金閣寺）、龍安寺、仁和寺、等持院などの歴史的名刹などに囲まれた京都市北西部に位置している。

図2-4　衣笠キャンパスの位置図

京都から世界へ発信する伝統と創生の人文系キャンパス（5学部、8研究科）
・立地特性：歴史都市型
・基本的な空間骨格：三角形

### びわこ・くさつキャンパス（BKC）

琵琶湖の南東、滋賀県「びわこ文化公園都市」の一角に位置し、敷地面積は約61haである。敷地内には希少植物が生息する自然緑地が存在し、広大な敷地を誇るキャンパスである。

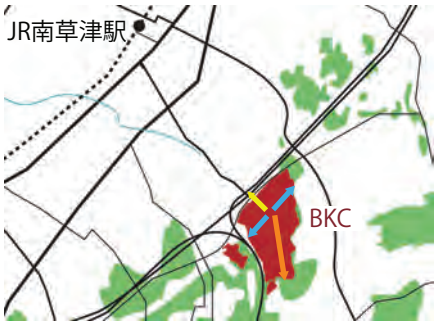



図2-5　BKCの位置図

世界水準の教育/研究/技術を創出・発信するイノベーティブ・キャンパス
（6学部、6研究科）
・立地特性：郊外型
・基本的な空間骨格：放射状

### 大阪いばらきキャンパス（OIC）

大阪万博記念公園の東約1.5kmに位置し、サッポロビール工場跡地に茨木市立の岩倉公園と一体的に計画される。JR茨木駅と阪急南茨木駅に挟まれた都市型キャンパスである。

図2-6　OICの位置図

「アジアのゲートウェイ」「都市共創」
「地域・社会連携」をコンセプトに掲げ、新たな学びのスタイルを提案するキャンパス（3学部、4研究科）
・立地特性：市街地型
・基本的な空間骨格：十字型

## 衣笠キャンパス

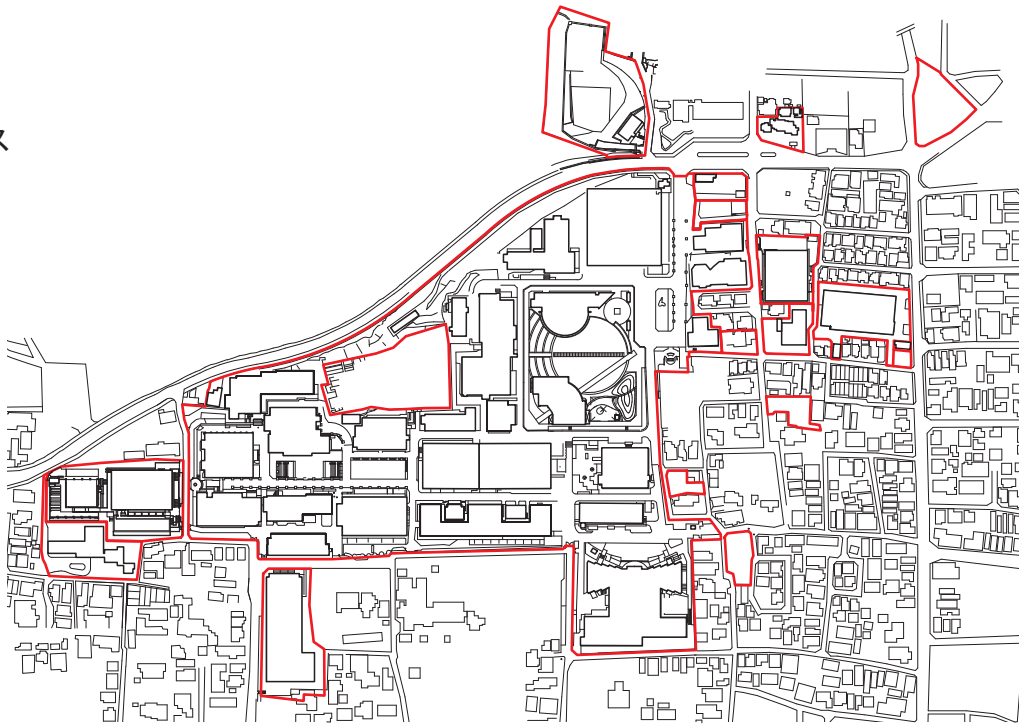
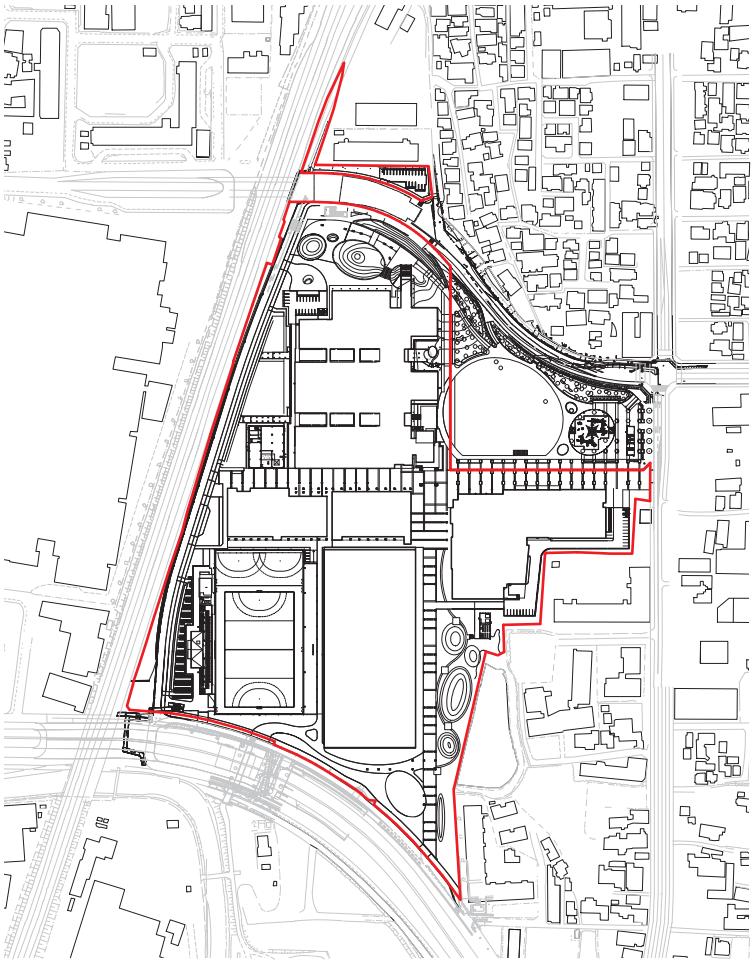


図2-7　衣笠キャンパス配置図

## 大阪いばらきキャンパス



※一部借地あり

図2-8　大阪いばらきキャンパス配置図

## 朱雀キャンパス

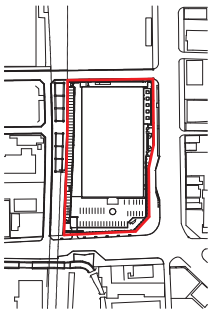
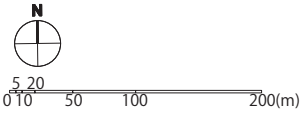


図2-9　朱雀キャンパス配置図




※方位、縮尺は全キャンパス共通

## びわこ・くさつキャンパス

※方位、縮尺は全キャンパス共通

※一部借地あり

図2-10　びわこ・くさつキャンパス配置図

# 2.3　キャンパス整備の空間コンセプト

キャンパスは教育・研究活動のフィールドであるとともに、多様なコミュニティー形成を支える空間である。優れた学生や研究者を育成する環境として、国内外・地域への発信・貢献・連携の場として、立命館大学の基本目標である総合的人間力の育成やグローバル研究大学の実現に向け、教育・研究・学生生活を支えるキャンパスづくりを目指す。

立命館大学におけるキャンパス計画・整備の役割や目的を共有しやすいよう、全キャンパス共通の空間コンセプトを次のように設定する。

**1　多様なコミュニティー形成を支える空間整備**

**2　優れた学生・研究者を育成する国際基準の教育・研究・文化・スポーツ環境整備**

**3　高いQOLが支える優れたアメニティや自然環境、エコロジー、防災への配慮**

**4　国内外・地域への発信・貢献・連携の場の整備とシステムの構築**

**5　歴史・文化的コンテクストを踏まえたキャンパス計画**

# 2.4　キャンパスマスタープランの基本方針



キャンパス計画・整備の空間コンセプトを実現するための基本方針を次のように設定する。

**①全学的協力体制による、学生・教職員が参画する一体的なキャンパス整備**

検討プロセスにおいて、学生・教職員（課題に応じて地域の方々）など、多くの関係者が参画する機会を設け、出来る限り多くの意見を聞き、共に考え、行動する。

**②キャンパス資源（敷地・施設等）の有効活用**

既存施設の有効活用が重要な前提条件となる。既存キャンパスにおける活用可能面積は限られており、新たなスペースの確保は難しいのが現状である。そのため、キャンパスの有効活用を検討する際は、以下に示すような検証が重要となる。

・現状の施設利用状況や課題の共有
・教学・研究活動等において求められる機能の把握
・前例のない整備課題についての可能性検討
・利用状況の変化に伴う床面積やゾーニングの最適化
・キャンパス計画および整備方針の共有
・管理・運営ルールの点検および見直し

**③教育・研究環境の再編/集約**

・学部エリア
・学部連携エリア
・全学共有エリア

**④緑地と連動したコミュニティスペースの再編**

**⑤立命館ステイタス**

魅力的で充実した学生生活を支える施設の質の向上と再整備

**⑥都市の一部としての社会的な役割を果たす大学キャンパスの整備**

**⑦継続・更新・発展する大学経営を支えるファシリティマネジメント**

**⑧計画・管理・評価体制の確立**

**⑨各部局が施設計画等の立案・執行の際に常に引用する手引き・指針としての位置づけ**

各学部教学や研究の将来構想や各部局の適切な役割を共有しながら、施設計画等の立案・執行の際に引用可能な手引き・指針としてキャンパスマスタープランを位置づける。

## 全キャンパス共通の方針・課題整理項目

立命館憲章や学園ビジョンR2020で示すアカデミックプランなどの実現に向けて、キャンパス空間の調和を図りながら目指そうとする立命館のあるべき姿を実現していくために全キャンパス共通の空間コンセプトに沿って、次の表に示すようなツリー構造にしたがい、より詳細な整備方針との関係性を検討しながら進める必要がある。

**【キャンパスプラン実現のための条件整理】**

| 前提/アカデミックプランとその方針 | |
|---|---|
| 立命館憲章 | |
| R2020 | ＜学園ビジョン＞<br>Creating a Future Beyond Borders<br>自分を超える、未来をつくる。<br>＜3つの行動指標＞<br>多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開<br>人類・自然・社会に貢献する立命館らしい研究大学への挑戦<br>学ぶことの喜びを実現できる学園づくり<br>＜5つの基本目標＞<br>国際社会と地域に貢献する開かれた学園へ<br>学びのコミュニティと学習者中心の教育を<br>特色あふれる「グローバル研究大学」へ<br>教育力・研究の質を向上する環境の維持を<br>教育・県境機関としての立命の役割<br>ー東日本大震災をうけてー<br>＜立命館大学の基本目標＞<br>総合的人間力の育成を<br>グローバル研究大学へ<br>教育・研究、学生生活を支えるキャンパスづくり |

**■空間整備のコンセプトからプロジェクトの詳細についてツリー構造的整理**

| 空間コンセプト | 基本方針 | 計画項目 |
|---|---|---|
| 1.多様なコミュニティ形成を支える空間整備 | 全学的協力体制による学生・教職員が参画する一体的なキャンパス整備 | 土地利用・建物配置 |
| 2.優れた学生・研究者を育成する国際基準の教育・研究・文化・スポーツ環境整備 | キャンパス資源（敷地・施設等）の有効活用 | インフラ<br>基盤整備<br>骨格構成 |
| | 教育・研究環境の再編・集約<br>・学部エリア<br>・学部連携エリア<br>・全学共有エリア | 安全・安心 |
| 3.高いQOLが支える優れたアメニティや自然環境、エコロジー、防災への配慮 | 緑地と連携したコミュニティスペースの再編 | パブリック空間整備 |
| | 立命館ステイタス魅力的で充実した学生生活を支える生活施設の質の向上と再整備 | 全学利用施設（パブリック） |
| 4.国内外・地域への発信・貢献の場の整備とシステムの構築 | 都市の一部としての社会的な役割を果たす大学キャンパスの整備 | |
| | 継続・更新・発展する大学経営を支えるファシリティマネジメント | |
| | 計画・管理・評価体制の確立 | |
| 5.歴史・文化的コンテクストを踏まえたキャンパス計画 | 各部局が施設計画等の立案・執行の際に常に引用する手引き・指針としての位置づけ | 専用スペース整備 |
| | | 学外利用者の使用施設 |
| （全キャンパス共通） | | |

| | | | | 条件整理の作業に必要なデータや情報など |
|---|---|---|---|---|
| ゾーニング計画<br>・明快・明確な<br>・わかりやすい<br>・敷地の有効活用を図る | キャンパスの骨格 | | スムーズな建替計画 | 築年数の確認 |
| | ボリュームシフト | | 南側低層化（KIC）<br>北側へボリューム確保（KIC）<br>中央部の広場化（KIC） | 法規制の整理<br>現状把握 |
| | 数学・研究空間の適正化<br>分散部局の集約 | | 将来規模（面積、高さ）の設定<br>全学利用施設の配置状況<br>既存施設の有効活用・環境保全 | 現状把握<br>全学利用施設の把握 |
| 交通計画<br>・わかりやすい<br>・アクセスしやすい<br>・見通しもよい<br>・安全な<br>・量的確保 | キャンパス内動線<br>キャンパス外アクセス | | 明確な歩車分離<br><br><br>駐車場・駐車場の整備<br>バス待合スペースの計画<br>バスロータリーの計画 | 現状把握（登録数・利用数）<br>バス待合時の歩道の占有率<br>事故件数<br>警備員の業務内容<br>事例調査<br>各門の開閉 |
| エネルギー計画 | 整備更新（老朽化への対応）<br>環境負荷低減への試み<br>サスティナブル<br>エコロジー | | 電気・給排水<br>高効率機器の導入（エネルギー政策）<br>自然エネルギーの活用<br>非常時対応 | 現状把握（寿命・効率）<br>建替計画の影響 |
| 安全・安心な施設計画 | ユニバーサルデザイン<br>交通<br>災害・防災対策<br>防犯対策<br>施設の維持管理・老朽化対策 | | 避難場所<br>非常用電力供給<br>浄化設備（非常用トイレ等）<br>セキュリティ（日常時・非常時）<br>情報管理 | 現状把握<br>事例調査<br>方針の検討<br>バリアフリー化の現状把握 |
| 緑地計画 | 自然環境への配慮<br>周辺環境との連続性 | | 適切な植栽計画<br>コミュニティー空間との関係 | 現状把握（毎木調査）<br>※保存樹木の判断（寿命・記念樹等）含む |
| デザインガイドラインの設定 | 壁面線・高さの指定<br>構造・形状・半屋外空間など<br>仕上げ・色彩・サイン計画など<br>緑地計画 | | 歴史の継承<br>キャンパスデザインの調和<br><br>既存緑地の保全・活用 | 現状把握<br>周辺地域からの大学施設の見え方への配慮<br>景観との調和 |
| コミュニティスペース（コモン、居場所）の適正配置 | 屋外 | | 緑地空間の整備<br>居場所の整備<br>（休憩・交流・活動・飲食・喫煙） | 現状把握 |
| | 屋内 | 学習 | ラーニングコモンズ<br>スチューデントコモンズ<br>図書館<br>ぴあら | 現状把握・データ分析<br>事例調査<br>ターゲット層の設定・確認<br>運営方式・クオリティに対するニーズ・評価 |
| | | 飲食 | カフェ・レストラン<br>大学生協 | |
| 正課以外の学びの拠点 | 図書館・ぴあら・コモンズなど | | 将来規模（面積、数量）の設定 | |
| 課外自主活動施設 | スポーツ、健康、レクリエーション | | 各種体育施設、サークル活動施設 | 稼働率、規模、施設配置の適正化 |
| QOL（生活施設） | アメニティの向上<br>学生支援の充実<br>福利厚生施設の充実 | | 明るく魅力的なトイレ<br>多様な居場所の整備<br>学生支援施設の計画<br>立ち寄りやすい空間づくり<br>地域開放 | 現状把握・データ分析<br>学生支援施設の視認性と対応時間のニーズ<br>ターゲット層の設定・確認<br>学生施設の現状把握<br>女子学生増加への対応 |
| 教数・研究施設の方針 | 講義教室<br>専門教室・実験室<br>学生研究室、教員研究室 | | 将来規模（面積、数量）の設定<br>情報共有<br>研究内容の公開・発信 | 占有スペースの見直し、配置の適正化<br>利用事態の把握（稼働率、利用人数対面積）<br>セキュリティエリア<br>（※具体的にはアクションプランの内容） |
| 事務組織の体制 | 事務職員施設 | | | |
| 国内外への<br>発信・貢献・連携 | 地域連携<br>地域開放<br>地域貢献 | | 地域プログラム<br>災害時対応<br>京都ステイタス | |
| | 国際化<br>国際交流、国際理解 | | 国際寮<br>学生支援（言語、生活習慣、宗教） | 国際化の動向把握<br>グローバルスタンダードに関わる情報収集 |
| | 連携の支援<br>（附属校・APU・他キャンパス<br>地域・他大学・日本・世界など） | | 情報発信・交流拠点<br>高校生等の居場所の確保 | |

Chapter 3

# 大阪いばらきキャンパスの空間コンセプト

3.1　大阪いばらきキャンパスの開設の経緯
3.2　キャンパスの基本情報
　　3.2.1　キャンパスの概要
　　3.2.2　学部・研究科の構成
3.3　敷地概要
　　3.3.1　茨木の歴史・背景
　　3.3.2　キャンパス建設地の履歴
　　3.3.3　都市計画的な条件
　　3.3.4　地区計画
3.4　基本的な考え方
　　3.4.1　教学コンセプト
　　3.4.2　キャンパス整備の特色

Chapter3では、大阪いばらきキャンパスの開設の経緯や敷地概要、教学コンセプト、整備の特色等について説明する。

# 3.1　大阪いばらきキャンパスの開設の経緯

## 開設の経緯

立命館学園では、2011年度から始まる中長期の計画期間を前に、2020年の学園像として、「学園ビジョンR2020」を策定し、キャンパス創造の議論の到達点を踏まえ、「教育・研究の質向上」を最大のテーマとして正面に掲げた。

2011年3月全学に示された文書には、「これまでの長期計画と異なる点は、個々の大きなプロジェクトや新展開を先行させるのではなく、学園の本来的役割である教育・研究を立命館憲章の精神に則って高めていくこと」としており、その質向上のために、

**①多様なコミュニティにおける主体的な学びの促進**
**②立命館らしい研究大学への挑戦**
**③学ぶことの喜びを実感できる学園づくり**

の三点が計画の柱とされた。（2011.3.16常任理事会「未来をつくるR2020－立命館学園の基本計画－」）

2010年12月22日、常任理事会の下にキャンパス創造委員会及びキャンパス計画委員会を設置して以降、両委員会の下に置かれた各種の委員会・部会・ワーキンググループをはじめとして、各学部・研究科ならびに各機関での活発な議論を通じて、計画の具体化が進められた。

2011年10月12日には常任理事会として「キャンパス創造の基本構想について」を取りまとめ、１）キャンパス創造に関する「７つの重点課題」、２）経営学部及び政策科学部の2015年大阪茨木新キャンパスへの新展開、３）衣笠キャンパス及びびわこ・くさつキャンパスの再整備計画、４）大阪茨木新キャンパス基本計画策定の基本方針等を決定した。その際、大阪茨木新キャンパスへの新展開が、立命館学園全体の充実に貢献すること、そのために「７つの重点課題」を設定し、その解決を図ることをキャンパス創造の重要な課題として位置づけることが確認された。その後、2011年11月には大阪茨木新キャンパス開設準備委員会及び同準備室が設置され、また2012年1月には経営管理研究科とテクロジー・マネジメント研究科の移転・新展開も決定された。

2010年11月に取得決定がなされた新キャンパス用地は、大阪府茨木市のサッポロビール工場跡地で、JR茨木駅から徒歩5分という交通至便な立地にあり、「都市型の立地」、「大阪」という点が最大の特色である。このような都市型の立地を活かして、産業界や地域、自治体等とのさらなる連携による教育・研究、また、地域や社会に開かれた活動の可能性を広げることがポイントとなっている。また、京都・滋賀に次ぐ大阪展開にあたり、歴史性からもアジアとの繋がりや、商都大阪という側面を新キャンパスの立地特性ととらえ、「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」という3つの教学コンセプトを掲げた。さらに、キャンパスを実験・研究・実践の場として位置づけ、進化を続けるイノベーション創発キャンパスとして、移転する学部・研究科の教学特性も踏まえて、「理論体系と実践事例の共鳴による問題解決志向の教学展開」を教学面における特色に設定した。

ソフトだけでなく、ハードの基本骨格についても、早い段階で整理された。用地購入から1年間で、行政との協議を行いながら、現在に至るゾーニングや軸線の設定をしている。キャンパスのハードの骨格については、土地利用の歴史や変遷、現在の周辺環境を踏まえて、茨木に歴史的に残る東西、南北の街路の軸にあわせたゾーニングがなされている。東西軸は「市民交流の軸」、南北軸は「学びの軸」とし、防災公園についても、周辺環境を考慮に入れ、市民もアクセスしやすい位置に配置された。2011年11月には、この軸線の設定とキャンパス内のゾーニングが全学に提示、決定され、北東に防災公園、北西に学舎、南東に市街地整備、南西にスポーツというゾーニングとなった。

これをもとに、茨木市との基本協定も同月取り交わされ、以下の方向性が確認された。

①防災公園（1.5ha）および市街地整備エリアの土地（1.5ha）を市へ売却し、市街地整備エリアの土地は市が本学に無償貸与する
②市街地整備エリアに市の支援を受けて大学が市民も利用できる大学施設を建設する
③キャンパス周辺のインフラ等を茨木市が整備する

以上の経過を踏まえ、検討・具体化が進められてきた衣笠キャンパス、びわこ・くさつキャンパス、大阪茨木新キャンパスのキャンパス創造とキャンパス整備に係る基本的な方針が、「立命館大学キャンパス創造とキャンパス整備に係る基本的確認」（2012年3月28日常任理事会）としてまとめられ、2012年度以降、大阪茨木新キャンパスの開設に向けた取り組みが本格化することとなった。

大阪茨木新キャンパス開設準備委員会は、委員会の下に、①教学部会、②学生部会、③研究部会、④図書館部会、⑤社会連携部会、⑥管理運営部会、⑦キャンパス整備部会の7つの部会と「事務局連絡会」を置き、2015年4月のキャンパス開設に向けた検討が精力的に進められた。課題がきわめて広範囲に及ぶため、全学的な体制の下、関連機関・部署や多くの教職員の協力を得て具体化が推進された。また、2012年10月には、OIC開設準備課が発足、同年11月には、キャンパス計画室が発足した。

大阪茨木新キャンパスの基本計画に関しては、まず2012年5月に「大阪茨木新キャンパスの基本設計の到達点と今後の取り組み」（2012年5月30日常任理事会）が報告され、この内容は全学討議に付され、意見集約が行われた。その後も各部会での検討が継続され、その検討の到達点については、「大阪茨木新キャンパスの基本構想（OIC開設準備委員会第1次答申）」（2012年10月3日常任理事会）として報告され、同文書についても全学討議・意見集約が行われた。

2013年7月には建設工事が着工され、2013年9月にはキャンパス名称が正式に「大阪いばらきキャンパス（略称：OIC）」に決定された（2013年9月4日常任理事会）。新キャンパス用地取得をめぐっては、その後の財政問題も含め、全学での厳しい議論があった。しかし、そうした厳しい議論を通して、OICの開設は、既存キャンパスの狭隘化解消に向けた展望を持ちつつ、教育・研究の抜本的な質向上を可能とするキャンパス環境を実現していく上で、キャンパス創造のきわめて重要な課題であることが確認された。

また、大阪府茨木市に本学の新たなキャンパスを開設することは、新たな地域との関係を構築するものであると同時に、学生の通学圏を拡大させるものとして、その意義が確認された。さらに、OIC開設に向けた取り組みの中で、キャンパス開設の前から、多様な形での地域連携が開始され、地域と大学との新たな関係構築の重要な礎となった。

このように、OIC開設は、本学の教職員だけではなく、学生の参加、茨木市や地域住民の多大なる協力のもとで推進されたものである。こうして、大阪いばらきキャンパスは上述の特徴を備えて、2015年4月に2学部4研究科、約6,000名の規模で開設された。また、2016年4月には総合心理学部が開設し、2018年4月には大学院人間科学研究科、2019年4月にはグローバル教養学部の開設を予定している。

2015年4月の開設以降、OICでは、「いばらき×立命館デー」や「アジア・ウィーク」をはじめ、地域連携の様々な取組が進められている。門も塀もない開かれたキャンパスには、多くの市民が憩いや交流を求めて集っている。OICは、多くの人々が集う地域・社会に開かれたキャンパス、新しい学びを追求するキャンパスとして、これからも展開していくことが期待されている。

# 3.2　キャンパスの基本情報

## 3.2.1　キャンパスの概要

大阪いばらきキャンパスの教学コンセプトは、「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」(3.4参照)であり、「実践事例と理論体系による問題解決志向の教学展開」を教学の特色としている。

またキャンパスビジョンとして、「エコ・イノベーション創発キャンパスの実現」を掲げている。

**【所在地】**
茨木市岩倉町2番150

**【面積】**
106,878.00㎡
(隣接して茨木市のより防災公園1.5万㎡を整備)
※衣笠：125,720.88㎡、BKC：629,521.88㎡

**【アクセス】**
JR茨木駅から徒歩約5分
阪急南茨木駅から徒歩約10分
大阪モノレール宇野辺駅から徒歩約7分

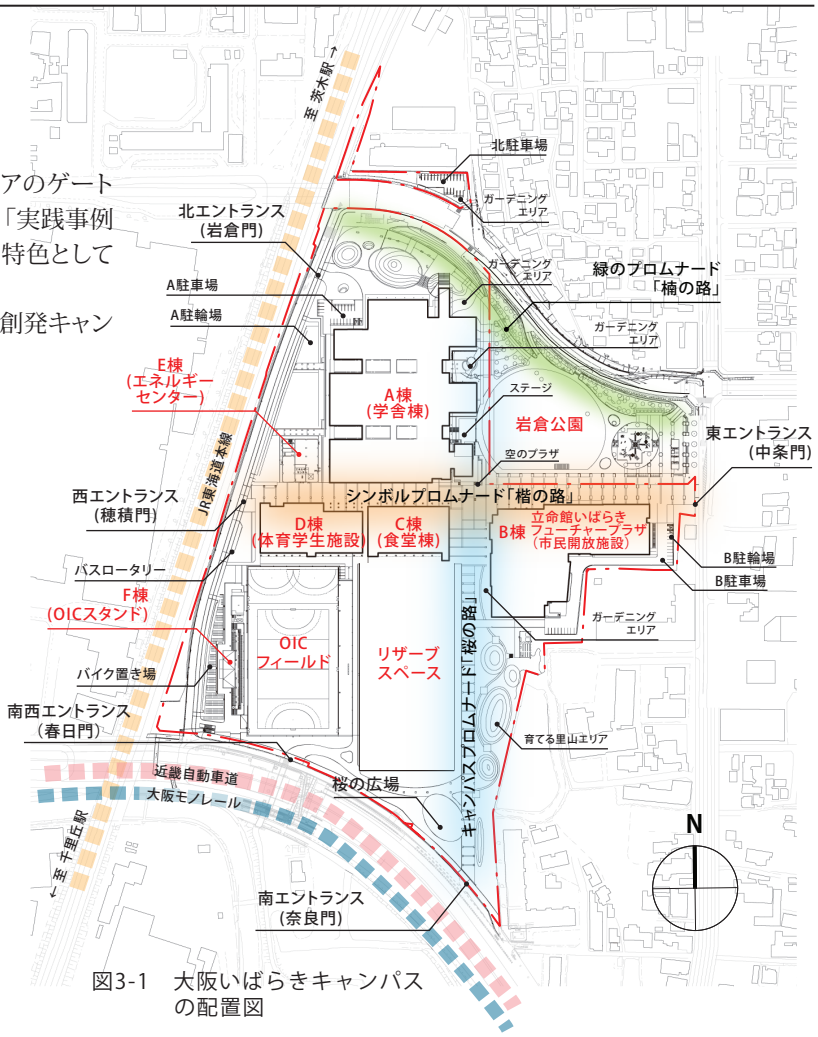



図3-1　大阪いばらきキャンパスの配置図

## 3.2.2 学部・研究科の構成

下図に2017年度時点の大阪いばらきキャンパスの学部・研究科の構成と学生数を示す。2015年4月の開設時には経営学部、経営学研究科、テクノロジーマネジメント研究科がびわこ・くさつキャンパスより、政策科学部、政策科学研究科が衣笠キャンパスより、経営管理研究科が朱雀キャンパスより移転し、2016年4月には新たに総合心理学部が開設された。また、2018年4月に人間科学研究科、2019年4月にグローバル教養学部が開設予定である。

| キャンパス | 学部・研究科 | | | 学生・院生数 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 学部/研究科 | | 学科・専攻 | ①男性 | ②女性 | ③留学生 | 合計 a(①+②) |
| OIC | 学部 | 経営学部 | 経営学科 | 1944 | 987 | 104 | 2931 |
| | | | 国際経営学科 | 410 | 314 | | 724 |
| | | 政策科学部 | 政策科学科 | 1016 | 652 | 70 | 1668 |
| | | 総合心理学部 | 総合心理学科 | 225 | 391 | 23 | 616 |
| | | | 小計 | 3595 | 2344 | 197 | 5939 |
| | 研究科 | 経営学研究科 | 企業経営専攻 | 31 | 49 | 62 | 80 |
| | | 政策科学研究科 | 政策科学専攻 | 52 | 50 | 71 | 102 |
| | | ﾃｸﾉﾛｼﾞｰ・ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ研究科 | ﾃｸﾉﾛｼﾞｰ・ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ専攻 | 62 | 25 | − | 87 |
| | | 経営管理研究科 | 経営管理専攻(企業経営コース) | 2 | 0 | 33 | 2 |
| | | | 経営管理専攻(ﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ) | 34 | 5 | | 39 |
| | | | 経営管理専攻(ｷｬﾘｱ形成ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ) | 37 | 14 | | 51 |
| | | | 小計 | 218 | 143 | 166 | 361 |
| | | | 大阪いばらきキャンパス合計 | 3813 | 2487 | 363 | 6300 |

※経営管理研究科経営管理専攻企業経営コースは、2015年度より募集停止。
※留学生とは、在留資格「留学」を取得できるもので外国籍を持つものをいう。

表3-1　大阪いばらきキャンパスの学部・研究科別キャンパス人口（2017年5月1日現在）

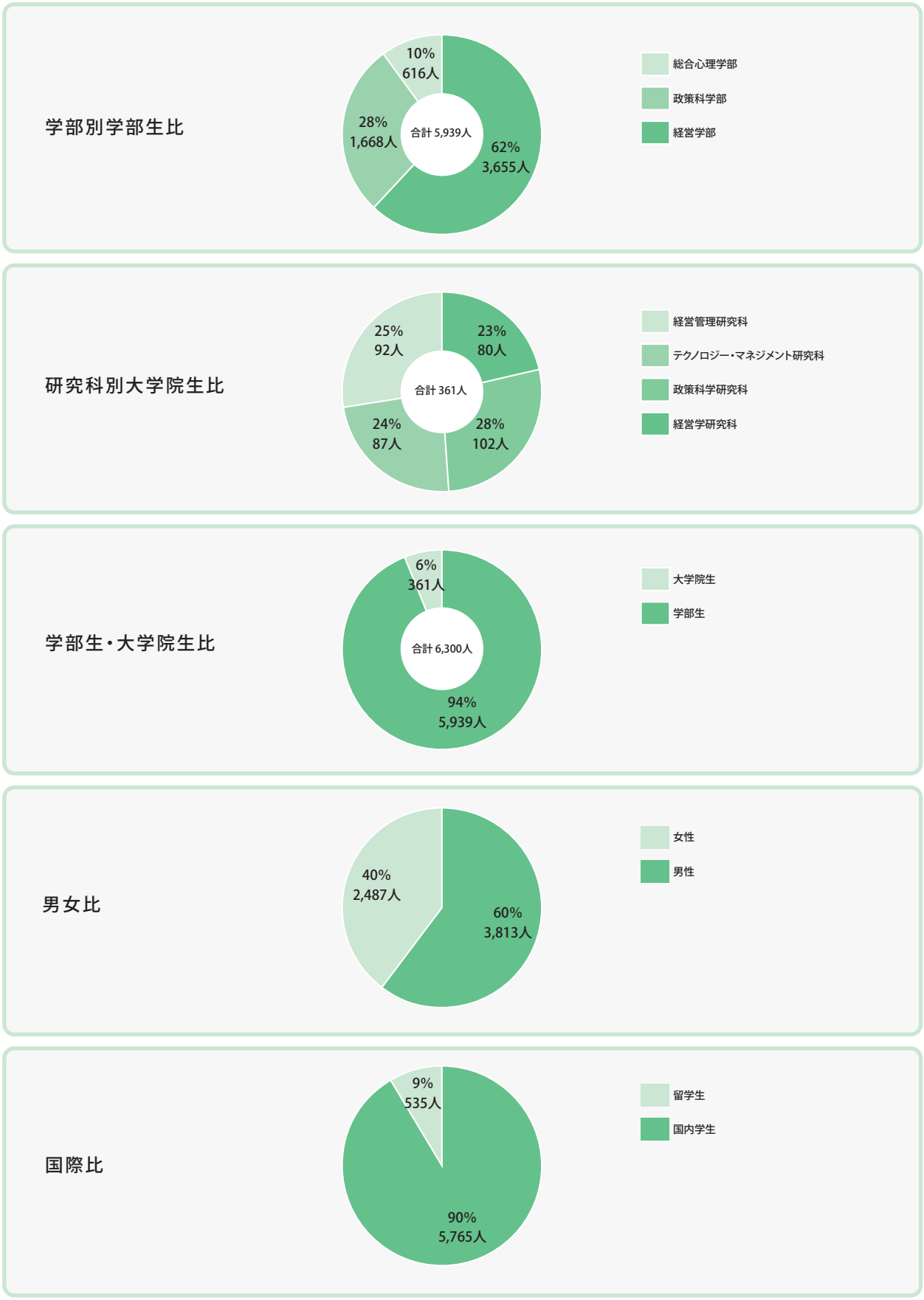
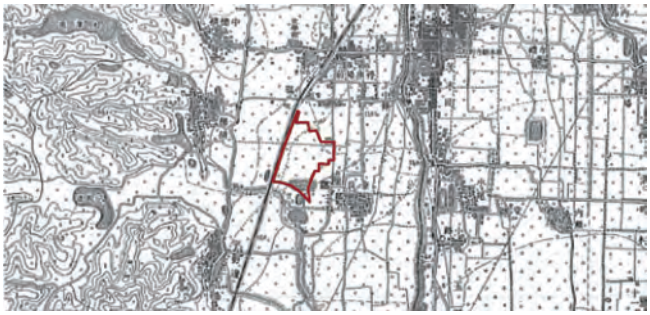



図3-2　大阪いばらきキャンパスで学ぶ学生（2017年5月1日現在）

# 3.3　敷地概要

## 3.3.1　茨木の歴史・背景



1927年　（1927年：茨木駅の整備と省線（JR京都線）の複線化）

1960年　（1928年：新京阪電鉄（現阪急電鉄）、茨木駅（現茨木市駅）が開設）

1969年　（1969年：サッポロビール工場の開設）

1986年　（1970年：大阪万博の開催）

図3-3　茨木地区の地形図（1927年～1986年（1/25000））

| 茨木地区の略史 | |
|---|---|
| 奈良時代<br>～平安時代 | 中臣氏の根拠地<br>藤原氏、総持寺等の荘園が分布 |
| 鎌倉時代<br>～室町時代 | 茨木城と城下町の成立<br>（1300年頃に築城） |
| 江戸時代 | 1600年頃に茨木城を廃城<br>周辺の農作物を加工する在郷町として発展<br>（絞油業、酒造業、寒天業） |
| 明治以降 | 大阪に近く地価が安い事から重工業が発展 |

| 地名について | |
|---|---|
| 茨木 | 茨木城の下に栄えた<br>中世に築かれた城下町<br>現在の茨木小学校に位置していた |
| 奈良 | 大和奈良からの移民による集落<br>1250年頃には、記録に地名が記載されている |
| 下中条 | 総持寺領から江戸前期に幕府領と<br>なった地域 |
| 下穂積 | 松沢池周辺の集落<br>松沢池は1828年に開拓され、周辺の集落に安<br>定的な農業用水を供給した |

表3-2　茨木地区の略史

### 周辺施設について

大阪いばらきキャンパスは、東西南北のグリッド状に道路網が走る茨木の街並みの中に、北は都市計画道路、西にJR東海道線、南に近畿自動車道に囲まれている。またJR東海道線をはさんだ西側には大型商業施設があり、2018年3月には松ヶ本線アンダーパスにて通行が可能となった。

写真3-1　上空から見た大阪いばらきキャンパスとその周辺

## 3.3.2　キャンパス建設地の履歴

### 埋蔵文化財の調査結果

三島平野が広がる茨木市域南部には、数多くの遺跡が広がっている。キャンパスの近くでは、日本で唯一のほぼ完全な形を保った銅鐸鋳型が出土した東奈良遺跡、島下郡家（郡の役所）の推定地である郡遺跡などが知られている。

中条小学校遺跡はキャンパスから東へ広がる遺跡である。2012年度におこなわれたキャンパス建設に伴う発掘調査では、全国的に例をみない、列状に並ぶ土坑群が見つかり、注目を集めた。

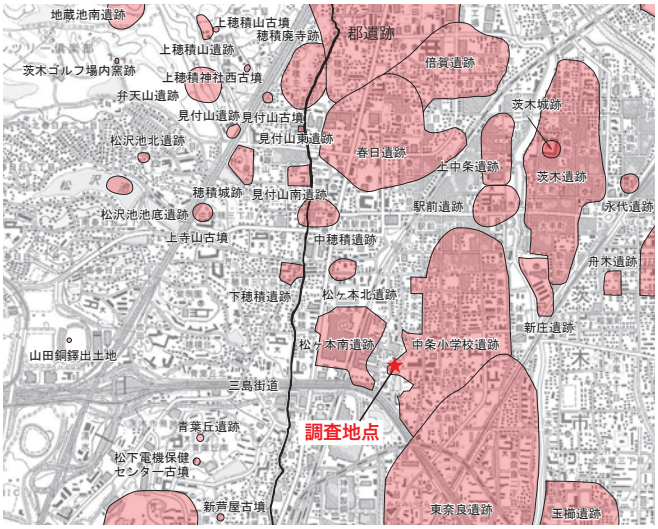


図3-4　大阪いばらきキャンパス周辺の遺跡地図

### 列状土坑群

本キャンパス建設に伴う調査で初めて認識された遺構群である。121基の土坑（当時の人が堀った穴）が横7列の列状に配置され、南北80mにわたって帯状に続いている。この列状土坑群は調査区外の南北にも続くと考えられ、見つかった以上に長いものであったことは間違いないとみられる。また、調査区の南端で若干東へ屈曲している。個々の土坑は長軸2～3m程度、短軸1m、深さ40～50cm程度の大きさが多いが、ばらつきがある。個々の形状についても若干異なるが、似た形状のものがかたまって存在しており、掘る人のくせであったと推測される。土坑の列が3列まとめてずれる箇所があり、土坑の掘削単位を知ることができる。また、整然と並んでいることから、時期を隔てずに掘られたと推測される。

図3-5　中条小学校遺跡調査区の空撮写真

### キャンパス建設前の土地利用（サッポロビール工場）

ビール工場には貨物の引込み線があり、南北軸とずれたJRの線路と平行に工場群が並んでいた。

写真3-2　旧サッポロビール大阪工場（1961年～2008年）

## 3.3.3　都市計画的な条件

**【建ぺい率】**

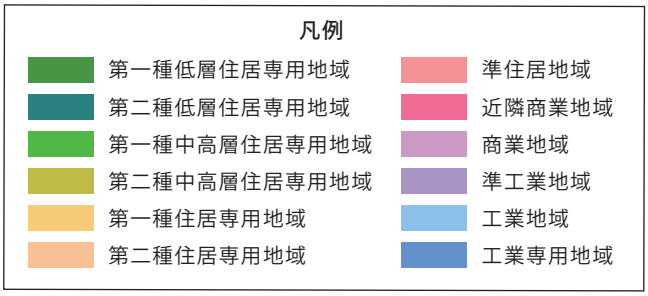
敷地面積に対する建築面積の割合。建築基準法によって、敷地内に適度な空地を確保し、防火と市街地環境への配慮を目的として都市計画区域内の用途地域に応じて上限が定められている。

**【容積率】**

敷地面積に対する延床面積の割合。建物の規模を規制する数値のひとつで、都市計画区域内の用途地域に応じて上限が定められている。

**【用途地域】**

都市計画において、将来の土地利用の方針を踏まえ、用途の混在を防ぐことを目的として定められている。



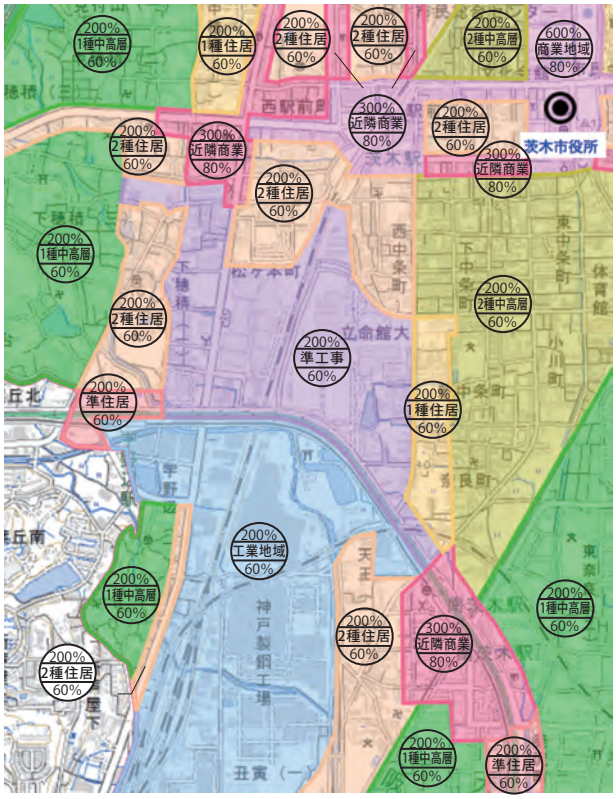
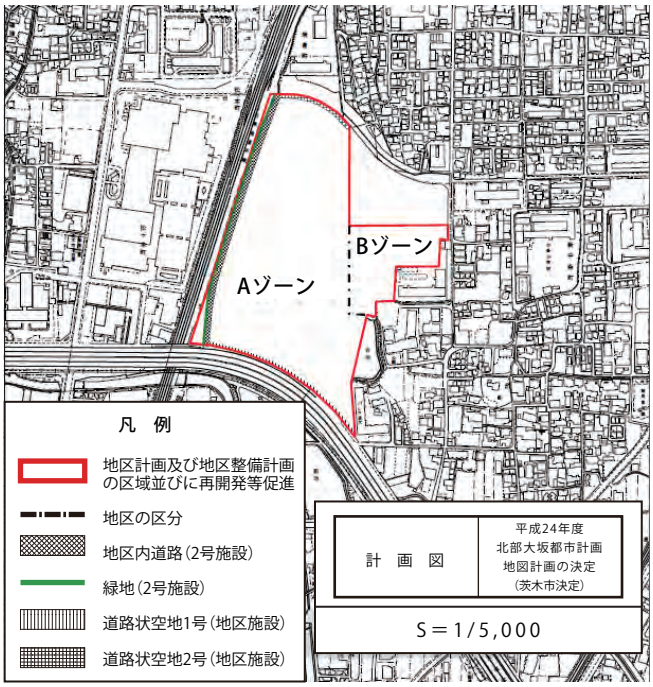




図3-6　茨木市都市計画図(用途地域)

## 3.3.4　地区計画

キャンパスの建設にあたり、岩倉町、奈良町地内の約10.0haを対象に、用途制限、容積率、建物高さ、緑化条件などを定める二つのゾーンを含み、地区計画を設定している。詳しくは下の図のとおりである。




茨木市立命館大学岩倉町地区地区計画の区域内における建築物の制限に関する条件(平成24年9月10日 茨木市条例第29号)

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 地区整備計画 | 位置 | | | 岩倉町、奈良町地内 | |
| | 面積 | | | 約10.0ha | |
| | 地区施設の配置及び規模 | | | その他の公共空地<br>歩道状空地1号(敷地南)幅員3.5m　延長約320m<br>歩道状空地2号(敷地北)幅員6.0m　延長約120m | |
| | 建築物等に関する事項 | 地区の区分 | 区分の名称 | Aゾーン | Bゾーン |
| | | | 区分の面積 | 約8.5ha | 約1.5ha |
| | | 建築物等の用途の制限 | | 次の各号に掲げる建築物以外は建築してはならない。<br>(1)大学施設<br>(2)寄宿舎<br>(3)前各号に掲げる建築物に付属する建築(店舗、飲食店その他これらに類する用途に供するものを含む。) | |
| | | 建築物の延べ面積の敷地面積に対する割合の最高限度 | | 10分の25 | 10分の30 |
| | | 建築物の建築面積の敷地面積に対する割合の最高限度 | | 10分の5 | |
| 地区整備計画 | 建築物等に関する事項 | 壁面の位置の制限 | | 建築物の外壁又はこれに代わる柱の面から敷地境界線までの距離の最低限度は10メートルとする。ただし、31メートル以下の場合は、建築物の外壁又はこれに代わる柱の面から敷地境界までの距離の最低限度は、6メートルとし、7メートル以下の場合は、建築物の外壁又はこれに代わる柱の面から敷地境界までの距離の最低限度は、2メートルとする。 | 建築物の外壁又はこれに代わる柱の面から敷地境界線までの距離の最低限度は6メートルとする。ただし建築物の高さが7メートル以下の場合は、建築物の外壁又はこれに代わる柱の面から敷地境界までの距離の最低限度は、2メートルとする。 |
| | | 建築物の高さの最高限度 | | 43メートル | 31メートル |
| | | 建築物の緑化率の最低限度 | | 10分の2 | |

「地区整備計画の区域、地区の区分及び地区施設の配置は計画図表示のとおり」

図3-7　建設地の地区整備計画

# 3.4　基本的な考え方

## 3.4.1　教学コンセプト

大阪いばらきキャンパスの3つの教学コンセプトである「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」は、いずれも都市・地域・アジアといった都市・地理用語が用いられており、キャンパス空間はこれらの教学コンセプトを形態として表現するような構成になっている。

### アジアのゲートウェイ

世界の成長センターであるアジアにおいて、日本の経験と知の蓄積を活かし、アジアから世界へ、世界からアジアへ、人と人、知と知を繋ぐゲートウェイとしての役割を目指す。

### 都市共創

都市に集積する多様な人材や組織をつなぎ、都市の中に点在するポテンシャルを引き出すことによって、新たな価値の共創を目指す。

### 地域・社会連携

地域・社会の課題解決を教育・研究テーマとして取り組むとともに、共同した多様な活動を通じて、相互の信頼関係を育み、豊かな地域・社会の創造に取組む。

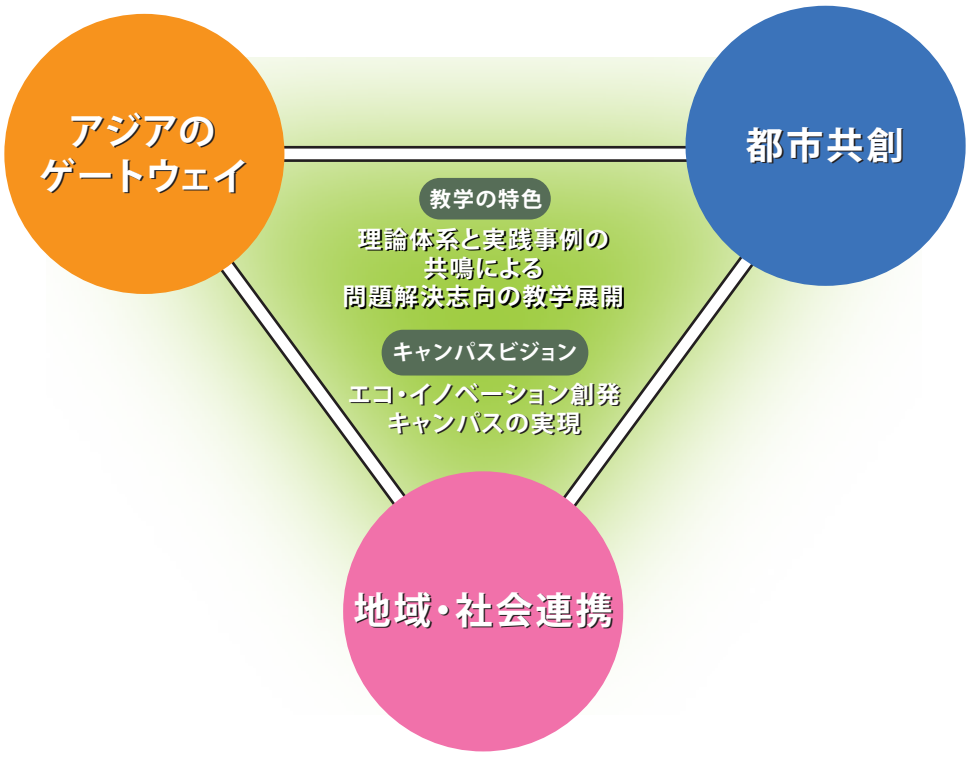



図3-8　大阪いばらきキャンパスの教学コンセプト

## 3.4.2　キャンパス整備の特色

前項で見た教学コンセプトを反映するために、大阪いばらきキャンパスの計画においては、大学スケール、都市スケール、環境スケールの３つのスケールにまたがる多様な特色を持たせるように考えられている。
（計画の詳細については、chapter4以降を参照）

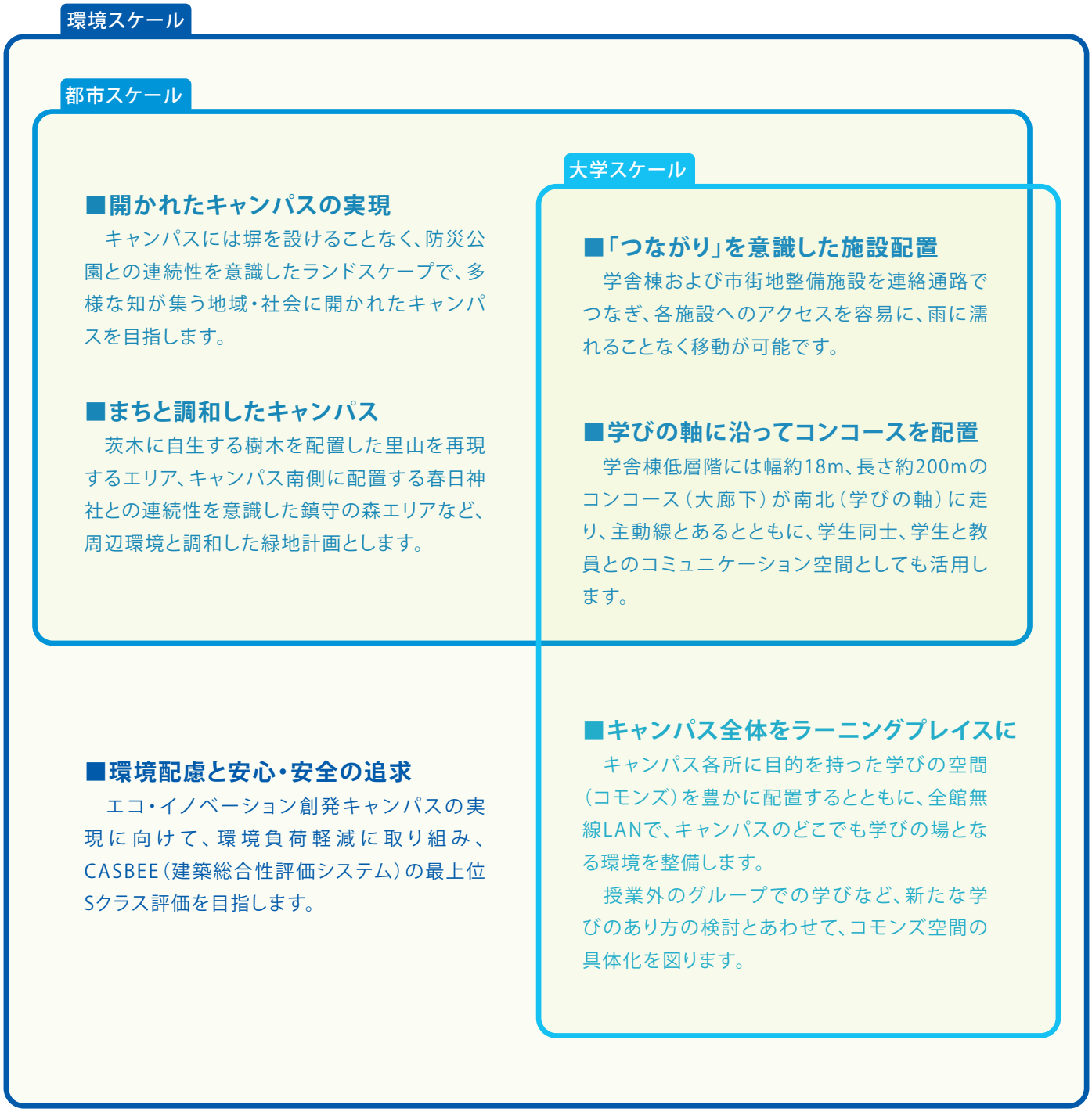



図3-9　スケール別に見た大阪いばらきキャンパスの整備の特色

## 参考：都市共創と地域社会連携に関わる経緯と、キャンパス開設前の取り組み

大阪いばらきキャンパスでは、都市共創と地域・社会連携の教学コンセプトにふさわしいキャンパスをつくるために、キャンパス開設前から、地域との協定や覚書の取り交わしや、市民や地元企業等と学生が協働するなどの取り組みが先行的に行われた。以下はその一部である。

### ①茨木市・商工会議所との連携

#### 協定・覚書等の締結

・大阪いばらきキャンパス設置に関わる基本協定書に基づく覚書の締結（2011年12月）
　開設時期、移転学部、防災公園・市街地整備エリアの整備、キャンパス周辺のインフラ整備等の確認
・茨木市、茨木商工会議所及び立命館大学の連携協定に関する協定書の締結（2012年8月）
　まちづくり、学術研究、教育、文化、国際交流等の連携
・基本協定書に関する覚書の締結（2013年3月）
　市街地整備施設の財政支援に関する確認
・覚書に基づく確認書の締結（2013年3月）
　市街地整備施設の施設構成および市民利用に関する確認

#### 茨木市

・茨木市が実施する「まちづくり寺子屋」（全5回）2013年度講師協力（政策科学部）など、講座・セミナーの連携・共同化の検討。
・防災公園の活用を含む、防災連携に関する協議を開始。イオン茨木店を含む3者での連携協定の締結。
・次期総合計画におけるワークショップ受入れを開始。
・研究センターの研究プロジェクト等での連携協力、シンポジウム等での後援など。
・社会連携スペースへ商工会議所が入居。

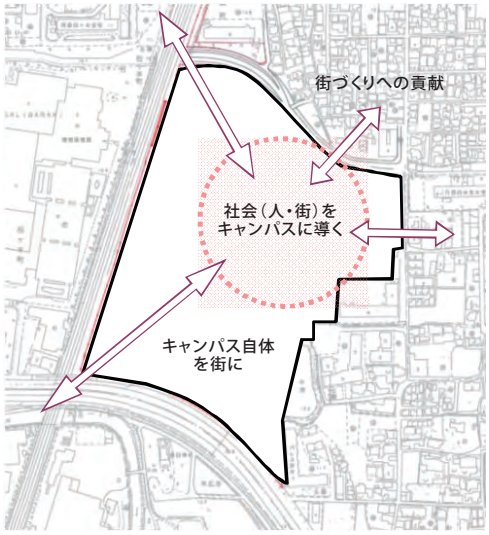



図3-10　大阪いばらきキャンパスと周辺地域との関わり

### ②企業との連携

#### イオン茨木（イオンリテール株式会社）

・JR線路を挟んで隣接するイオン茨木と連携し、地域環境負荷軽減や防災連携の取組み、流通・マーケティングに関する教育・研究連携を協議。

#### NEXCO西日本との高架下活用検討

・キャンパス南に隣接する近畿自動車道の高架下の活用可能性検討に関してNEXCO西日本と連携。まちのにぎわいづくり、安心安全な通学路を目指し協議。

#### スマートコミュニティに関する研究連携

・デザイン科学研究センターにおいて、茨木市内工場跡地でのスマートコミュニティ実証事業を進める東芝、大阪ガス等との研究プロジェクトを開始。

### ③その他の連携

・デザイン科学研究センター主催、茨木市・茨木商工会議所後援により、スマートコミュニティに関するシンポジウムを開催。
・科学技術振興機構（JST）の「問題解決型サービス科学研究開発プログラム」へ「ソリューション創発志向型のフィールドデータ・マネジメント産官学地連携による地域のコト（物語）づくり」

### ④学生の活動等

#### 学生グループによる茨木まち歩きプロジェクト

・学生有志のグループにより、茨木と学生を繋ぐ役割を担うことを目標に活動を開始。茨木市役所や茨木商工会議所をはじめ、地域の方々へのインタビュー、アンケート調査を実施。

#### クラブ・サークルの茨木市での活動

・能楽部による郡山宿本陣での仕舞・ワークショップの実施、交響楽団による演奏会の開催等。

Chapter 4

# フレームワークプラン

4.1　ゾーニングと建物配置
4.1.1　キャンパスの骨格軸
4.1.2　二つの軸によるゾーニング
4.1.3　建物の配置と構成

4.2　交通
4.3　建物内部の機能構成
4.4　パブリックスペース
4.4.1　パブリックスペース
4.4.2　立命館におけるパブリックスペースの必要性
4.4.3　パブリックスペースの検討において考慮すべき事項
4.4.4　パブリックスペースの配置と計画の考え方

4.5　建築デザイン
4.6　ランドスケープ
4.6.1　ランドスケープゾーニング
4.6.2　キャンパスランドスケープで重視すべき点

4.7　安全・安心
4.8　環境配慮
4.8.1　エコアクション・キャンパス
4.8.2　外装での配慮
4.8.3　その他の配慮

4.9　リザーブスペースについて

Chapter4では、目指すキャンパスの実現に向けて、検討・配慮すべき内容を部門別にフレームワークプランとして示す。フレームワークプランは、概ね15～30年程度の中長期的なキャンパス全体の整備方針に基づく計画である。どのようなアカデミックプランにおいても配慮すべき考え方や対応可能な考え方について述べる。

## フレームワークプランの概要

大阪いばらきキャンパスのフレームワークプランを、次の7つの分野について示す。ゾーニング・建物配置、交通、パブリックスペース(屋外のオープンスペースなど)は土地の有効活用の観点から基本方針を共有することが重要である。また、大学キャンパスが社会へ果たす役割として配慮が必要な分野として、安全・安心、環境配慮の考え方を取り入れたキャンパスの検討を行う。さらには、大学のアイデンティティを創出するキャンパスデザインや緑地計画についても検討を行うことが大切である。

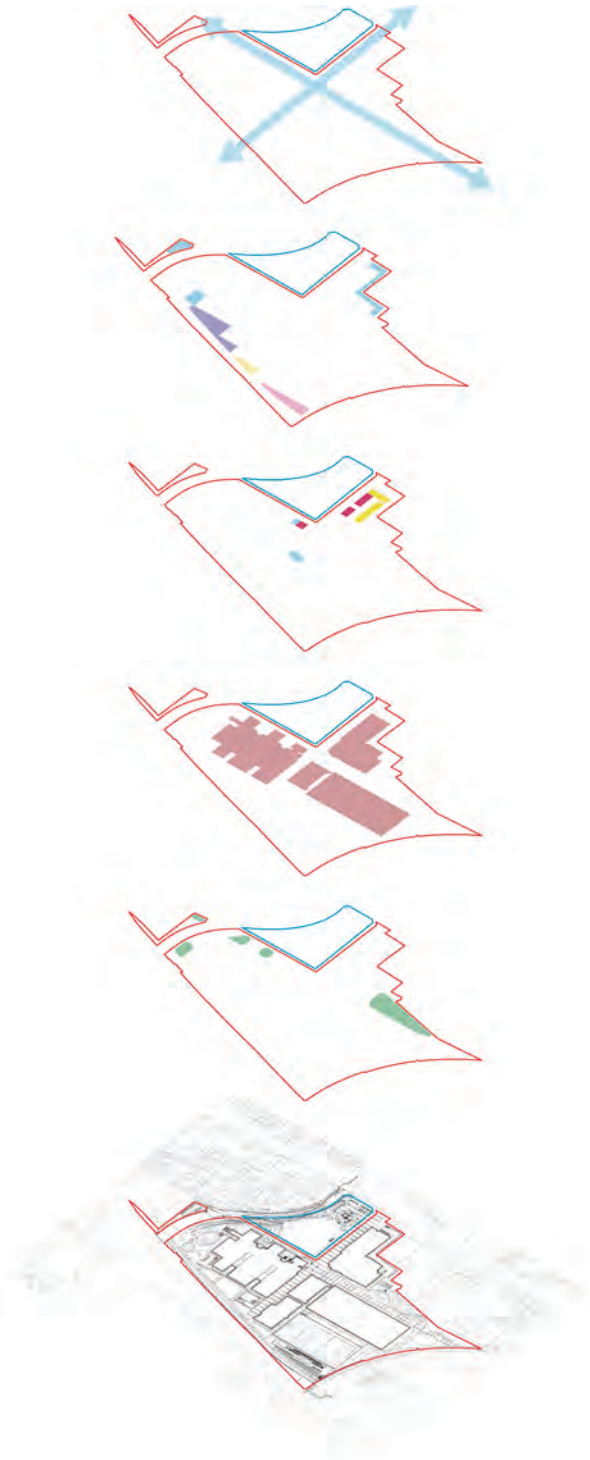


図4-0　分野別方針が多層レイヤ状に構成されるイメージ

### 1.ゾーニング・建物配置

①キャンパスの特性を活かしたゾーニング計画
②キャンパスの緑地を活用した土地利用計画
③持続可能なキャンパスの実現に向けた建物配置計画

### 2.交通

①キャンパス内の安全・安心に配慮
②生活環境の快適性向上と環境負荷低減
③全体的なキャンパスの魅力向上
（歩車分離、歩行者動線・パブリックスペースの再整備、周辺道路からのアクセス、駐輪場・駐車場の集約化など）

### 3.パブリックスペース

①キャンパス特性を活かしてパブリックスペースを形成する
②パブリックスペースの空間的な序列化を図る
③学生のいきいきとした学びや活動、交流が見える空間づくりを行う

### 4. キャンパスデザイン

①空間の質
②建物外観デザイン
③屋根・庇デザイン
④建物高さ・壁面線・建物ボリューム
⑤サイン計画
⑥ランドスケープデザイン
⑦眺望・景観・借景

### 5.緑地計画

①細かな移動と滞留に適した緑地空間づくり
②芝生広場など憩いの空間づくり
③地域・社会に向けたプロムナードの顔づくり
④木陰の広場づくり
⑤緑の散策路の整備

### 6.安全・安心

①ユニバーサルデザイン・バリアフリーへの配慮
②交通への配慮
③施設の維持管理、老朽化への対応
④防災・防犯への配慮

### 7.環境配慮

①省エネ・省資源に配慮した環境共生建築
②エコキャンパス
③周辺環境との調和

# 4.1　ゾーニングと建物配置

## 4.1.1　キャンパスの骨格軸

### 土地の歴史を参照した骨格軸

大阪いばらきキャンパスの敷地は、南を近畿自動車道、西をJR東海道線、北を都市計画道路（茨木松ヶ本線）を超えるためのアンダーパスによって規定された不整形な土地である。広域交通インフラの線形が、ローカルに存在してきた格子状の都市構造を分断し、切り取られるように不整形な敷地形状を生んだといえる。

しかし、これらの広域交通の線形は都市の近代化以降に持ち込まれたものであり、茨木のまちには、条里制を反映した南北と東西の柔らかい格子状の都市構造が存在してきた。古くからあるまちに新しい大学キャンパスを開設し「都市共創」というコンセプトを追求する上では、既存の市街地との連続性を担保することが重要である。

大阪いばらきキャンパスの基本計画においては、サッポロビール工場の立地時と同様、敷地が最も長く接するJRと平行な軸線による施設配置案も検討したが、最終的に、周辺のアーバンファブリック（条里制の名残）に同調する南北軸・東西軸を採用している。南北軸を「学びの軸」、東西軸を「市民交流の軸」と呼び、その二軸に沿った建物配置を採用し、茨木のまちにローカルに存在してきた都市構造に従った計画としている。

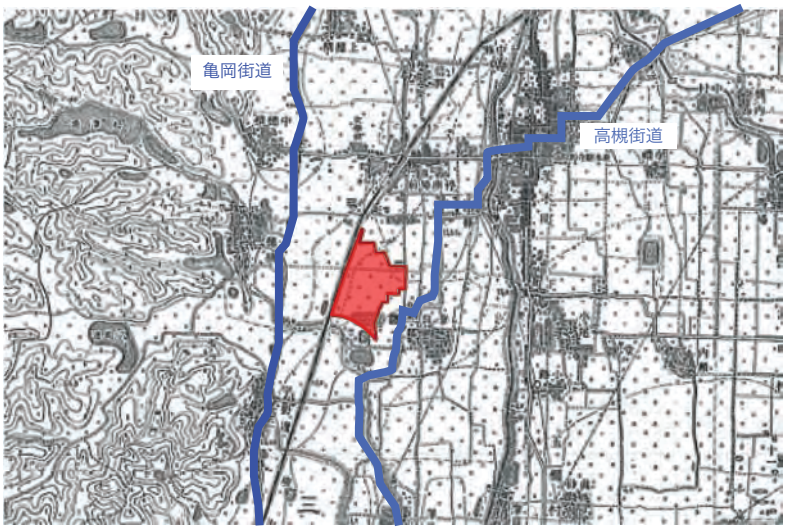


図4-1-1　1927年ごろの大阪いばらきキャンパス周辺

### 十字型の軸線による、自律性をもちながらまちに開かれた場づくり

南北軸の「学びの軸」、東西軸の「市民交流の軸」による十字型の軸線は、単に周囲の都市構造に従うだけでなく、「自律性をもちながら、まちに開かれた場」をつくる効果を持っている。

この効果は、二つの軸を交点に座標空間の原点のような強い中心性をもたせることと、同時に各軸がまちの既存の軸とつながることで空間的な延伸性を表現することによって生まれる。

そのため、この効果を弱めるような敷地境界のフェンスや塀、外部に対して閉鎖的な建物の配置は、キャンパスマスタープラン上、不適切であり、今後とも「塀のないキャンパス」としての姿が保たれることが重要である。

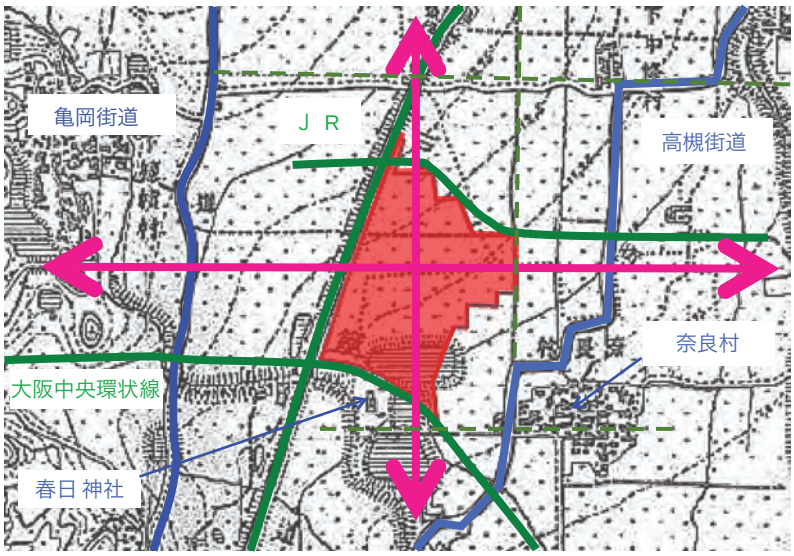


図4-1-2　大阪いばらきキャンパス周辺の都市構造と十字の軸線との関係

## 4.1.2　二つの軸によるゾーニング

### 「学びの軸」と「市民交流の軸」

長期的な敷地計画においては、JR茨木駅に近い北側から建設を進め、南側をリザーブスペース（将来の建設用地）とすることが現実的である。そのため、将来にわたって教学・研究施設が展開する方向である南北軸を「学びの軸」と設定し、教室や研究室などの機能を結ぶ軸とする。

一方、周辺市街地の歩行者にとって利用しやすい接道面は北東側に限られ、特に東側に広い市街地が広がっている。そのため、市民のアクセスは主に東側からを想定することが合理的である。そこで、東側に接道する東西の軸を「市民交流の軸」として設定し、他の施設よりも地域に開放されやすい図書館やレストラン、また食堂や体育施設などを結ぶ軸とする。

### ゾーニング計画

骨格となる「学びの軸」と「市民交流の軸」の二軸に従い、キャンパス全体のゾーニングを以下のように設定する。

| ゾーン | 機能的な特色 |
|---|---|
| 北東 | 茨木市が所有、管理運営する防災公園（岩倉公園）のゾーン |
| 南東 | 茨木市から立命館に土地を貸与し、立命館が施設を建設、管理運営する市民開放施設（図書館やホール、レストランなどを含む「フューチャープラザ」）のゾーン |
| 北西 | 立命館が所有し学舎を管理運営するゾーン |
| 南西 | 立命館が所有し、運動施設や厚生施設、リザーブスペースを管理運営するゾーン |

表4-1-1　ゾーンごとの機能的な特色

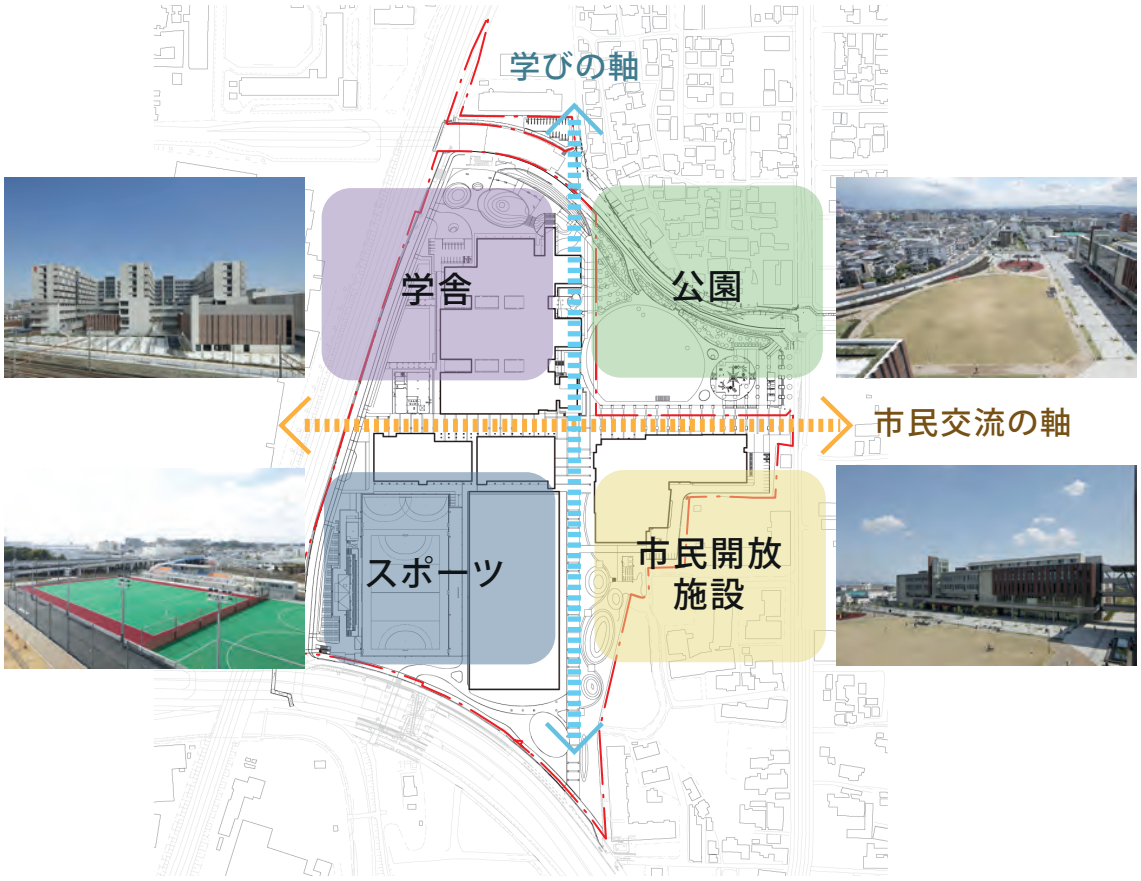



図4-1-3　大阪いばらきキャンパスを四つのカテゴリーで分けたゾーニング

## 4.1.3　建物の配置と構成

### 軸ごとの建物配置と機能割り当ての考え方

#### ＜学びの軸＞

学びの軸に沿って、教学・研究を主目的とした建物であるA棟を配置する。

A棟は、コンコースと板状ボリューム（東西と南北のスラブ）による構成とする。こうして、類似した仕様の教学・研究施設を効率的に収容し、反復的拡張が可能な構成とし、同時に将来的な拡張性を担保する。

ただし、建物内部のゾーニング規則に従い、A棟内にも教学・研究以外にも公共性の高い機能が適宜配置される。

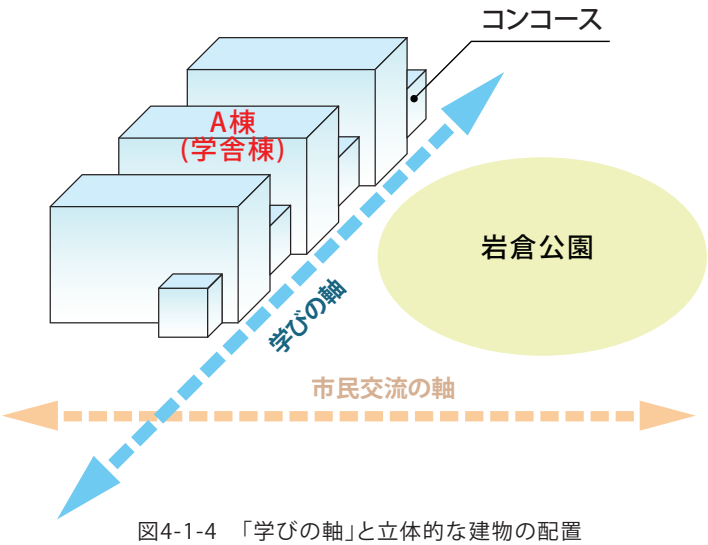



図4-1-4　「学びの軸」と立体的な建物の配置

#### ＜市民交流の軸＞

市民交流の軸に面する建物群は、機能的にも公共性が高く、集団的な利用の機会が多い施設とする。そのため、東西軸に沿って、アクセスのしやすい比較的低層の箱型ボリュームを並べ、互いにブリッジや廊下を介して接続させる。

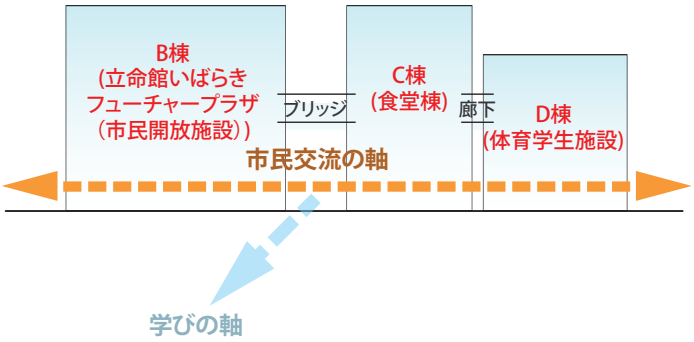



図4-1-5　「市民交流の軸」と立体的な建物の配置

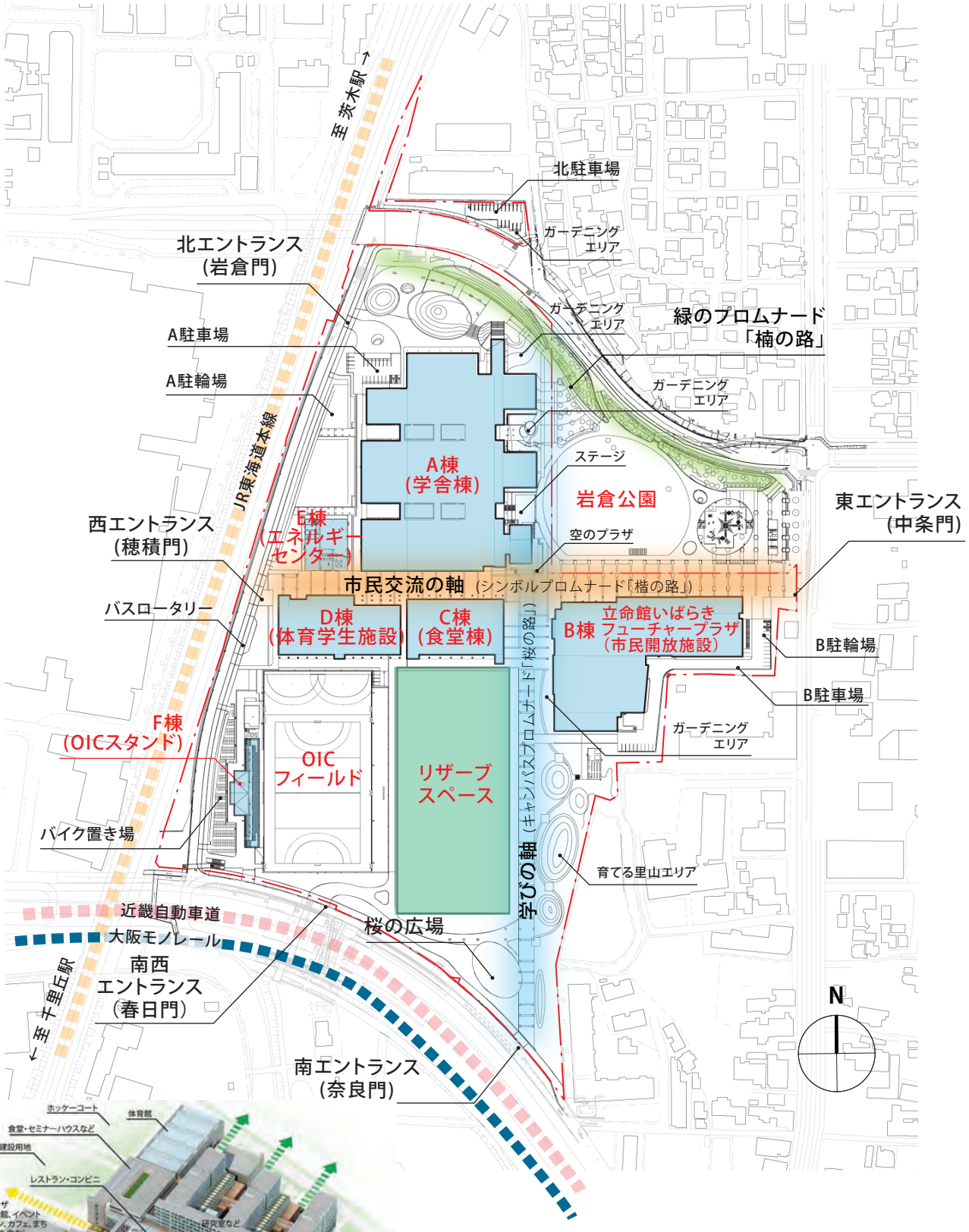
### 周辺市街地と連続した街並みの形成

骨格となる「学びの軸」と「市民交流の軸」の二軸は、周辺市街地と連続する空間であることから、軸に沿っては公共性の高い街並みとしての空間や、景観の創造を心がけた計画と管理運営を将来にわたって行う。特に、岩倉公園との一体的なデザインや管理運営については特段の意識を払うものとする。

また、学びの軸は、岩倉公園からキャンパスの南側に位置する春日神社に至る、連続したオープンスペースをつくりだす軸でもある。そのため、都市の緑地軸としての価値と役割を意識した景観形成や管理運営を行っていくものとする。

さらに、春日神社周辺の緑地は都市公園として都市計画決定されていることから、キャンパスの南端部は緑地景観を含め、これとの連続性を意識した管理運営を行っていくことが求められる。

写真4-1-1　大阪いばらきキャンパスとその周辺



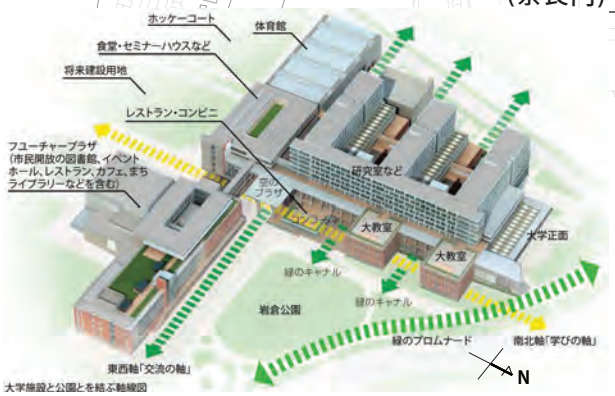




図4-1-7　大阪いばらきキャンパスの配置図

図4-1-8　立体的にみるキャンパスの配置

# 4.2　交通

## キャンパス配置と周辺交通機関の現況

キャンパス周辺の交通状況とアクセスについて、以下の図に示す。

### キャンパス周辺の交通情報

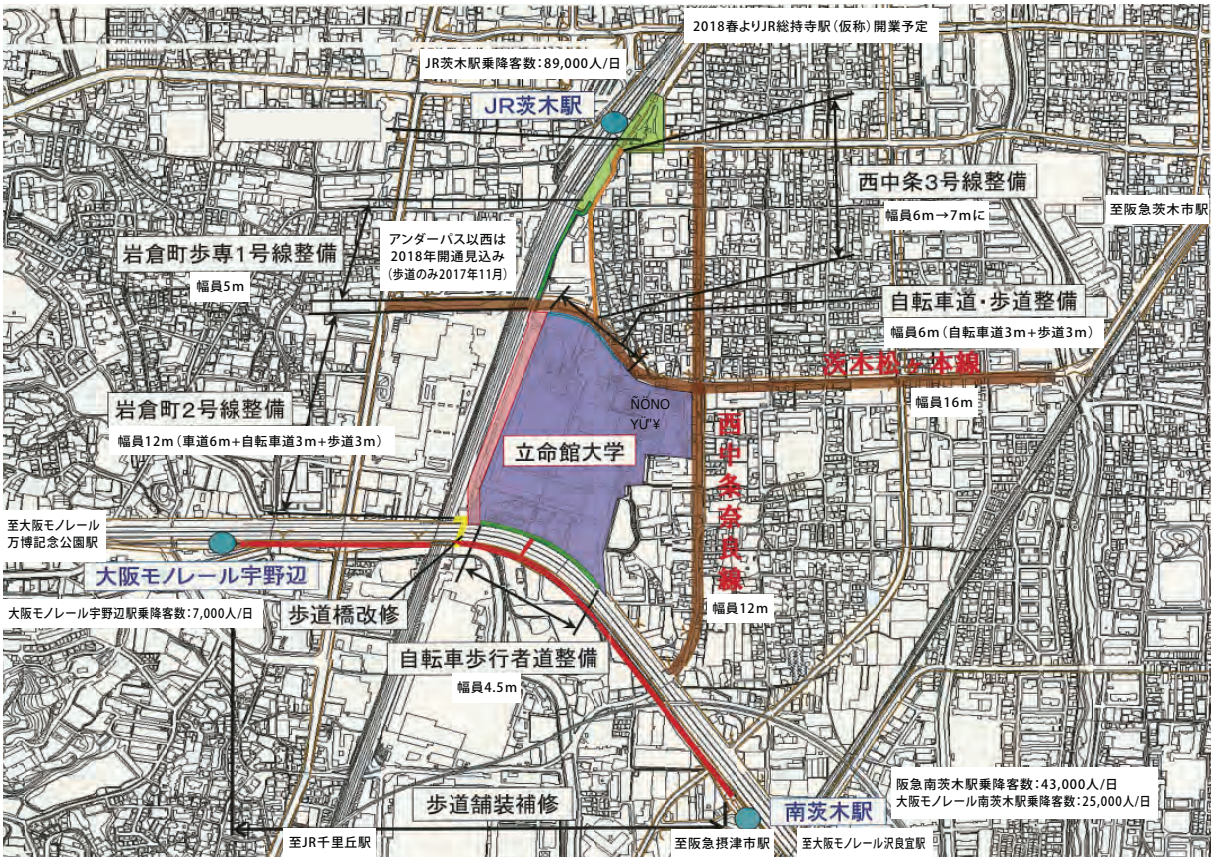



図4-2-1　大阪いばらきキャンパス周辺の交通情報

### キャンパスへのアクセス

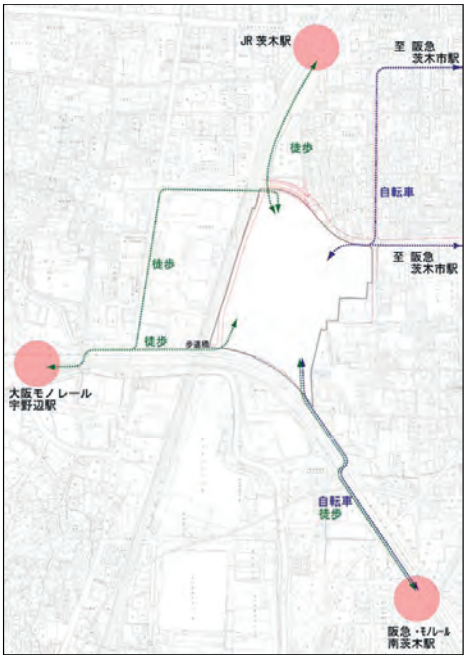



図4-2-2　最寄駅からの徒歩でのアクセス

図4-2-3　周辺地域からの車でのアクセス

## キャンパス内の交通計画

基本的に、歩行者・自転車・バイク・一般車両・サービス用車両等の動線を明確にする必要がある。可能な限り歩車分離をはかり、それが困難な場合は、ボンエルフのような適切な歩車共存の方法を講ずることが肝要である。

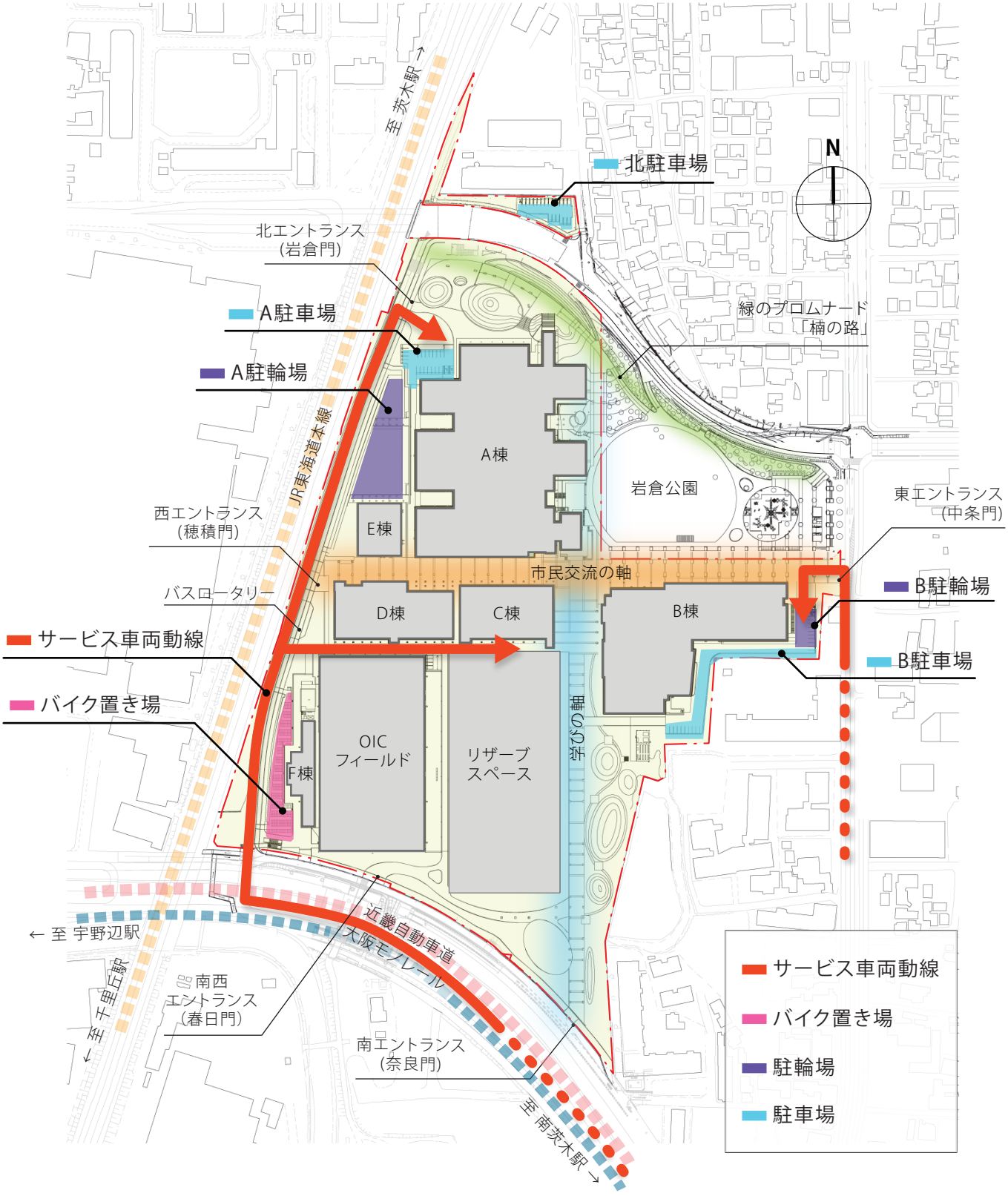



図4-2-4　大阪いばらきキャンパス内の交通

# 4.3　建物内部の機能構成

## 教室の層別構成

上層階へ行くほどに専門性が高まる教室を配置し、低層階には教養科目や基礎的科目を想定した教室、中層階にはゼミ教室や実験実習施設、高層階には研究関連施設を配置する。教室は表のとおりである。（2017年4月時点）

| | 室数 | 名称 | 規模 | 内訳 | 備考（当初の想定、教室調整の考え方） |
|---|---|---|---|---|---|
| 大教室 | 17 | LectureRoom | 700 | 1 | 不測の事態に備えた予備「教室」（調整枠） |
| | | | 500 | 4 | 教室調整段階で、3学部でゾーニングを行い、優先的に教室調整 |
| | | | 400 | 4 | |
| | | | 300 | 8 | |
| 中教室 | 3 | SeminarRoom | 100 | 3 | MOTのコースワークを優先的に配置（サテライト）<br>回線の不具合に備えて、予備「教室」の確保 |
| ゼミ教室 | 69 | SeminarRoom | 35〜40 | 69 | 規模に応じて、上層階のSeminarRoomも含めて調整教室<br>調整段階で、3学部でゾーニングを行い、優先的に配置 |
| 情報教室 | 8 | MultimediaRoom | 40〜100 | 8 | 基幹時間割で、利用学部を優先的に配置 |
| ゼミ教室（院） | 23 | SeminarRoom | 20 | 20 | 上層階に配置し、専ら研究科のコースワークを想定 |
| | | SeminarRoom | 40〜70 | 3 | 馬蹄型教室、MBAのコースワークを優先的に配置 |
| AL系教室 | 7 | LearningStudio | 40 | 5 | アクティブ・ラーニング系「教室」として、試行的に配置・運用<br>教室調整時に3学部で調整 |
| | | LearningTheater | 120 | 1 | |
| | | Colloquium | 189 | 1 | |
| 合計 | 127 | | | | ※教室調整終了後に、すべてのゾーニングを解除 |

表4-3-1　大阪いばらきキャンパス全体の種類別の教室数

## 施設概要

OIC各棟別·階別の機能構成を以下に示す。

## A棟：

| 階数 | 用途 |
|---|---|
| 7〜9階 | 教員研究室、学部、研究科共同研究室、<br>教員ラウンジ、大学院生共同研究室など |
| 6階 | 心理総合系新学部実験実習施設、<br>大学院将来展開用スペース |
| 3〜5階 | ゼミ教室、小教室、アカデミックラウンジ、<br>嘱託講師控室、エクステンションセンター自習室など |
| 2階 | 大教室、セミナールーム（アクティブラーニングルーム）<br>情報教室など |
| 1階 | 行政施設、軽食コンビニ、国際教学推進拠点、大教室など |

表4-3-2　大阪いばらきキャンパスA棟の階層別の用途

## B棟：

| 階数 | 用途 |
|---|---|
| 5階 | 研究所・研究センター、産学交流ラウンジなど |
| 4階 | 図書館、研究会室、研究プロジェクト室 |
| 3階 | 図書館、セミナールーム（劇場型） |
| 2階 | 図書館、大ホール、ギャラリー、<br>地域連携推進拠点など |
| 1階 | 平土間ホール、レストラン・カフェ、まちライブラリー、<br>音楽練習施設、社会連携スペースなど |

表4-3-3　大阪いばらきキャンパスB棟の階層別の用途

## C棟：

| 階数 | 用途 |
|---|---|
| 5階 | 宿泊機能を伴った教学・<br>研究・交流拠点 |
| 4階 | セミナールーム（馬蹄型） |
| 3階 | プリインキュベーション<br>ルーム（アイデア・ラボ）、大教室など |
| 2階 | メディアラボ（仮称）、<br>情報教室、大教室など |
| 1階 | 食堂・ショップ |

表4-3-4　大阪いばらきキャンパスC棟の階層別の用途

## D棟：

| 階数 | 用途 |
|---|---|
| 2階 | アリーナ<br>（バスケットボールコート3面分） |
| 1階 | 学生施設、更衣室、<br>トレーニングルームなど |

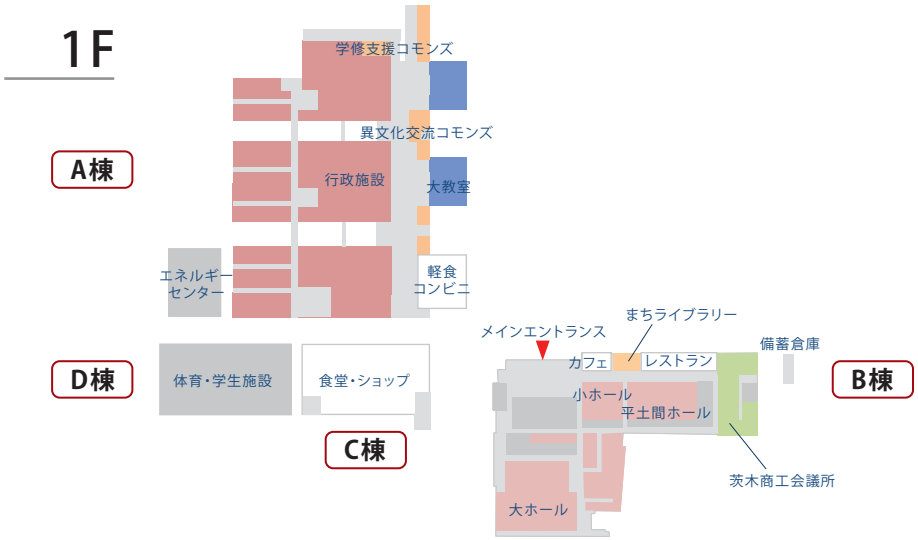
表4-3-5　大阪いばらきキャンパスD棟の階層別の用途

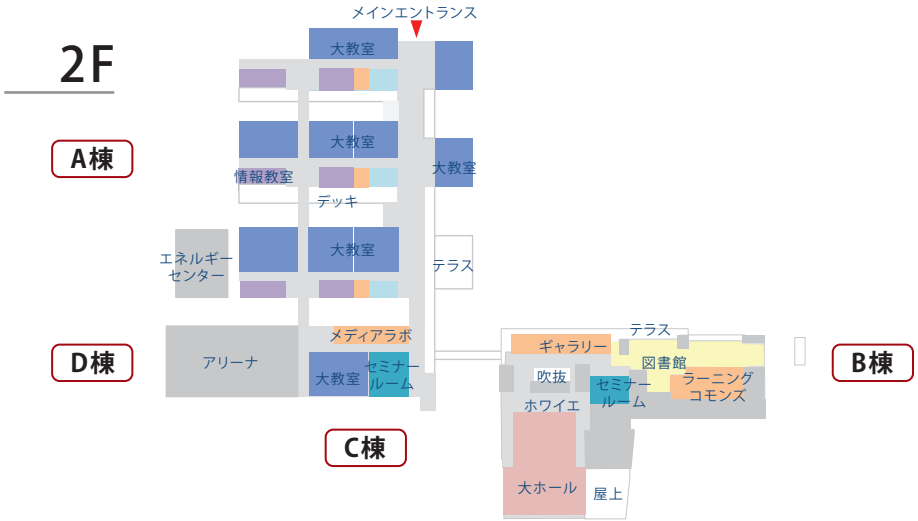
## パブリックからプライベートへの四層の構成

大阪いばらきキャンパスの建築物はキャンパス全体の平面的なゾーニングに従った機能を分担するが、個々の建築物においても、パブリックとプライベートの段階分けに主眼をおいた層構成に基づき計画される。

### ・低層部（1階、2階）

もっとも公共性の高い機能を配置する。生協、学生施設および運動施設(C・D棟)、コンコース、教室および事務室（A棟）、集会施設（B棟）など、学内でも不特定多数が利用する機能を優先的に配置する。特に公園に面してはレストランや店舗（A棟・B棟・C棟）、まちライブラリー（B棟）など、市民の利用率が高い機能を配置する。図書館（B棟）も市民のアクセス性を高めるために、一部この層に配置する。

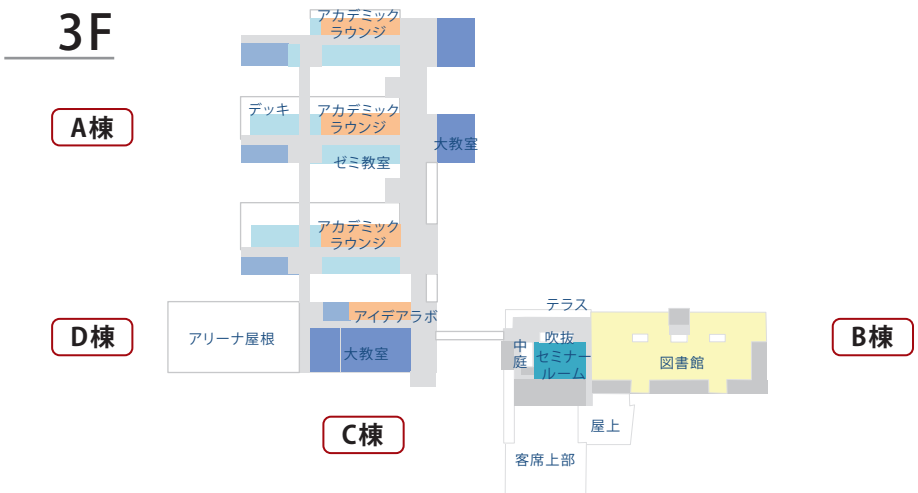



### ・中層部（3階、4階）

教学機能を中心とした機能を配置するが、公共性の高いものを優先的に配置する。

A棟、C棟ではコンコース、アカデミックラウンジ、メディアラボ、ゼミ教室を中心的に配置し、B棟では、図書館の個人学習や研究の利用を主とするゾーンや、セミナールームや研究会室などを配置する。



**・高層部 - 1（5階、6階）**

教学および研究機能を主としたプライベート性の高い機能を配置する。A棟では学部固有の教学施設を配置し、各階の動線の交差部には極力コモンズ空間を設ける。C棟、D棟ではセミナーハウスや研究所、研究センター、産学交流ラウンジなどの研究的交流活動を促進する機能を配置する。

**・高層部 - 2（7階以上）**

研究機能を配置する。教員研究室のほか、各種共同研究室や研究ラウンジ、セミナールームなどを配置する。

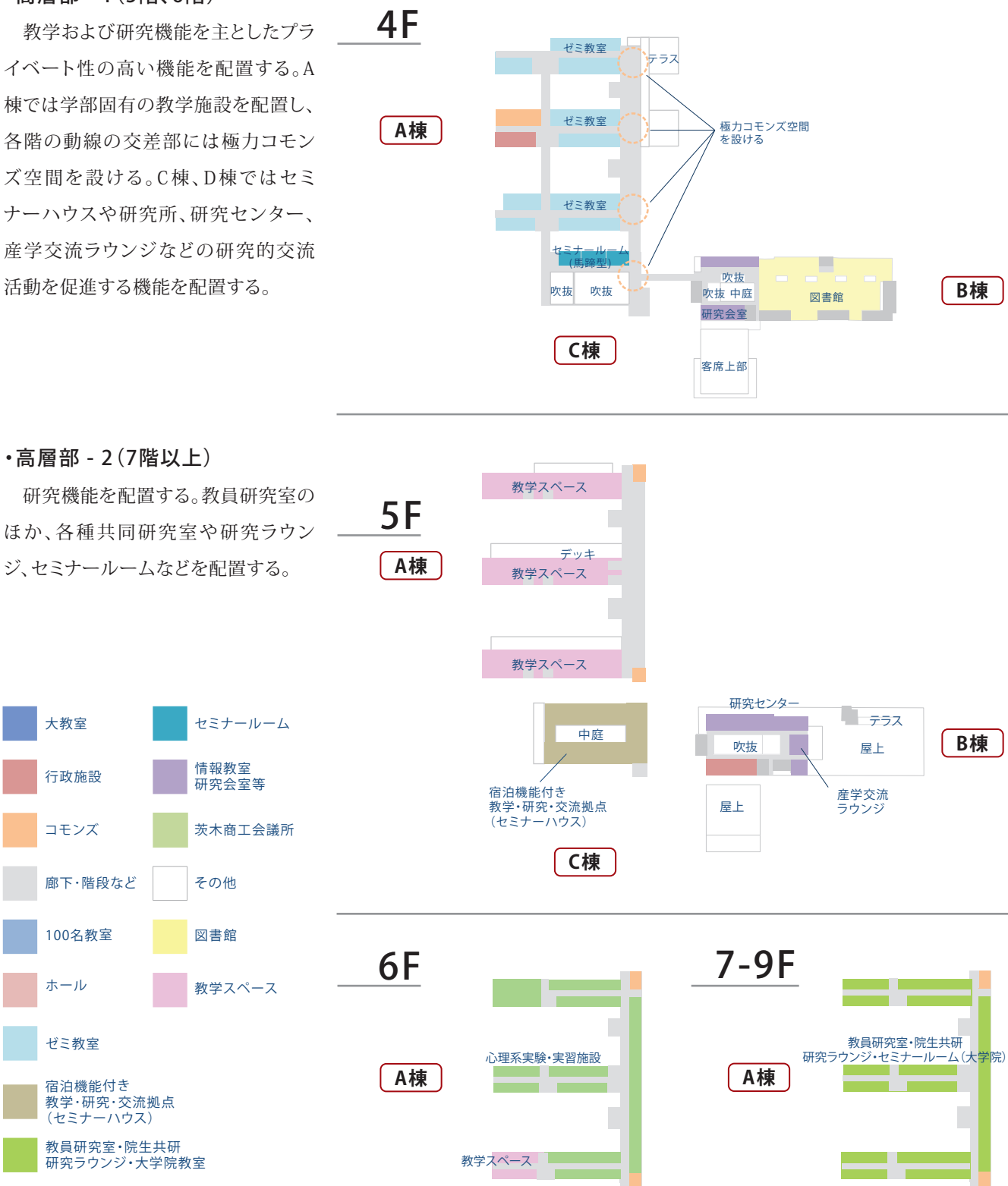



図4-3-1　各棟、各階層の平面的な配置を示した図

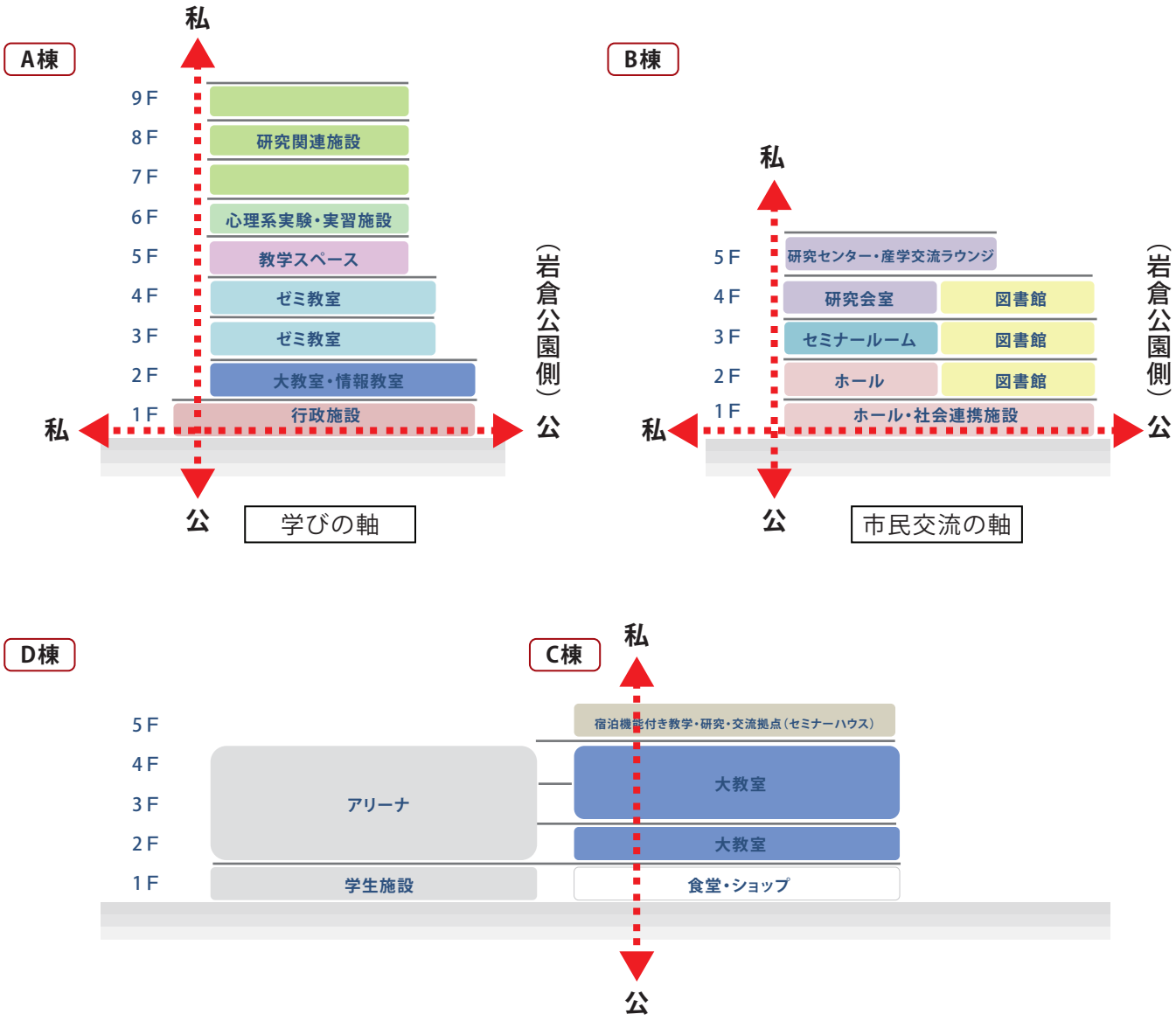



図4-3-2　棟ごとの階層別構成

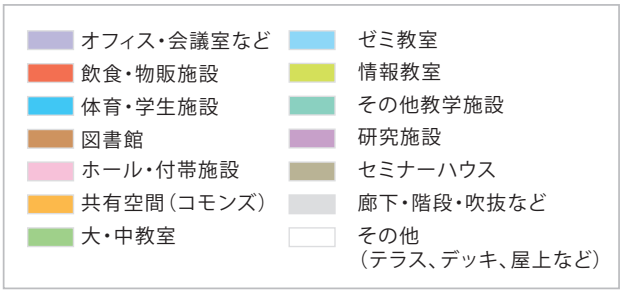
## キャンパス全体をラーニング・プレイスに

OICは「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」という3つの教学コンセプトを持って開設された。これと同調して施設計画においても、知識の伝達だけではなく能動的・自律的な学習を行なえる学習者中心の教学にふさわしい空間づくりを目指している。

OICの各施設はA棟からD棟の4つの建築物に集約されているが、中心的な教学施設であるA棟は、低層部を中心に大小127の教室を擁し、また高層部に教員や院生の研究室を収容する1棟の建築物である。「キャンパス全体をラーニング・プレイスに」という考え方のもと、低層階でこれらの教室群をつなぐ「コンコース」と呼ばれる空間を配置している。

コンコースは、ひとつながりのオープン・スペースであり、「学びの軸」としてキャンパスの骨格的な屋内動線としての役割を果たす。また、これを基軸にしてコモンズを含む自由な学習環境が配置されている。「キャンパス全体をラーニング・プレイスに」という標語は、いつでも、どこでも、誰とでも学び、学び合う空間を学習者が作り出すことができる空間を目指すことを意味している。

一方、集中して学習できる空間は、人により異なる。学生全員が図書館で集中できるわけではなく、やや騒々しい中でこそ集中できる学生もいる。背中側に壁がないと落ち着かない学生もいる。さらに、学びの場は図書館だけではなく、学外にも広がっている。学生ごとに学びのスタイルや必要とする学習環境が異なるという前提に立って計画が行われている。



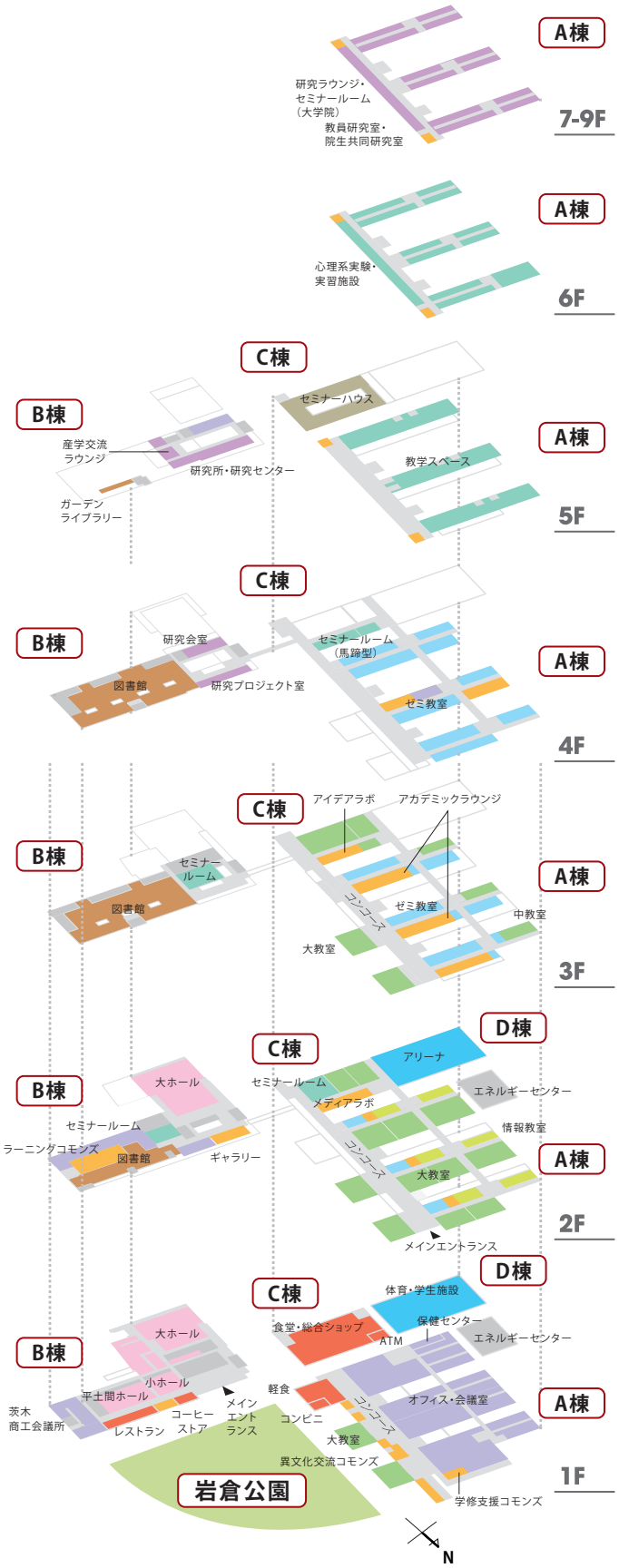




図4-3-3　棟ごとの学部別のゾーニングを示した図

## アクティブ・ラーニング

教室は、おおよそ3つのカテゴリーで構成されている。従来型の教室と、情報教室、アクティブ・ラーニングに主眼をおいた教室の３つである。いずれの教室も、単に教える空間ではなく、「学ぶ空間」として設置している。そのため室名称には、敢えて「教室」の語を用いていない。

アクティブ・ラーニングに特化した教室のコンセプトは、「柔軟性」「多様性」「曖昧さ」を兼ね備えた「型がない”ビュッフェ”形式の空間」としている。インフラとしてのICTの重要性を認識しつつ、アナログと組み合わせて展開できるようにしている。また、家具や什器のレイアウトもデフォルトの状態を設定していない。多様なアクティビティに対応し、利用者に適した学習環境をデザインできるように配慮している。

これらの教室は、「キャンパス全体をラーニング・プレイスに」の考えのもと、コモンズと共通した考え方で設計されている。

写真4-3-1　Learning Theaterを利用した授業風景
（グッドデザイン賞二次審査A3補助資料より引用）

| 「施設」名称 | 収容定員 | 室数 |
|---|---|---|
| Colloquium | 最大189名 | 1 |
| Learning Theater | 120名 | 1 |
| Learning Studio | 40名 | 5 |
| Lecture Room | 299～708名 | 17 |
| Srminar Room | 20～40名 | 95 |
| Multimedia Room | 40～100名 | 8 |

表4-3-6　施設ごとの特徴

# 4.4　パブリックスペース

## 4.4.1　パブリックスペース

大学キャンパスにおけるパブリックスペースを検討する際の視点について整理を行う。

### (1)　パブリックスペースの計画上の役割

パブリックスペースが持つ計画上の役割について、一般的に右記の7つのようなものがある。

**パブリックスペースの計画上の役割**

・キャンパスの伝統の表象となる空間の保全と形成
・空間的秩序の構築
・シンボル的な空間・景観で構築される骨格づくり
・建造物と外部空間との連携
・良好な景観とレクリエーション環境の維持、向上
・空間の魅力やアイデンティティを高める要素
・サステイナビリティ

(「いまからのキャンパスづくり-大学の将来戦略のためのキャンパス計画とマネジメント-」(日本建築学会編)より引用)

### (2)　パブリックスペースの空間デザイン

パブリックスペースの整備効果を最大限に活かすには、用途や利用対象に合わせた、扉・窓の位置や仕様、仕上げ材の色や素材、照明や家具のデザインなど、細部の空間デザインが重要となる。

新築時だけではなく、改修や家具などの備品更新においても、キャンパスイメージの向上へ繋がる重要な要素となる。その効果は右記のようなものが、考えられる。

**パブリックスペースの空間デザイン**

・キャンパスイメージを印象づける重要な要素
・大学に訪れた人がまず最初に感じたキャンパスのイメージ
・キャンパスの特性を活かす
・多くの人に利用してもらう

# 4.4.2　立命館におけるパブリックスペースの必要性

## （1）　アカデミックプランと連動するキャンパス整備の実現

総合的人間力の育成やグローバル研究大学を目指す大学として、教育、研究、学生生活を支えるキャンパスづくりを行う方針が打ち出され、立命館大学の学園ビジョン実現に向けて、キャンパス整備の中でもパブリックスペースの充実が不可欠である。

今後は、学びの立命館モデルなどの現在検討中のアカデミックプランとのすり合わせを行い、立命館大学が目指すパブリックスペースの整備方針について検討を深める必要がある。

## （2）　立命館大学のパブリックスペース整備で目指すもの

立命館大学のパブリックスペース整備で目指すものは右記のようなものが考えられる。

大阪いばらきキャンパスの主要なパブリックスペースとは、学生、教職員、外来者など誰もが利用できるスペースである屋外のオープンスペース、交流・生活の場となる食堂やラウンジ、生活にかかせないトイレや廊下などがあげられる。さらに、学部内の交流や情報発信の場となる学部コモンズ、学びや研究、課外自主活動などの成果を発表・発信するための多様な空間など、不特定多数の人が利用できる専門的な用途のスペースなども含まれる。また、ぴあらやリサーチコモンズなど、学びのためのコモンズを整備している。

### 立命館大学のパブリックスペース整備で目指すもの

・立命館らしさを創出する空間づくり
・キャンパスの特色を活かした空間づくり
・アカデミックプランを実現する空間
・学生の学部を超えた交流空間としての整備
・教職員と学生の交流の場の確保
・居心地の良さ・質の保証
・安心・安全な生活空間の確保
・キャンパス外との接点づくり
・立命館大学の生活の質の向上

↓

**「キャンパス全体をラーニング・プレイスに」**

# 4.4.3　パブリックスペースの検討において考慮すべき事項

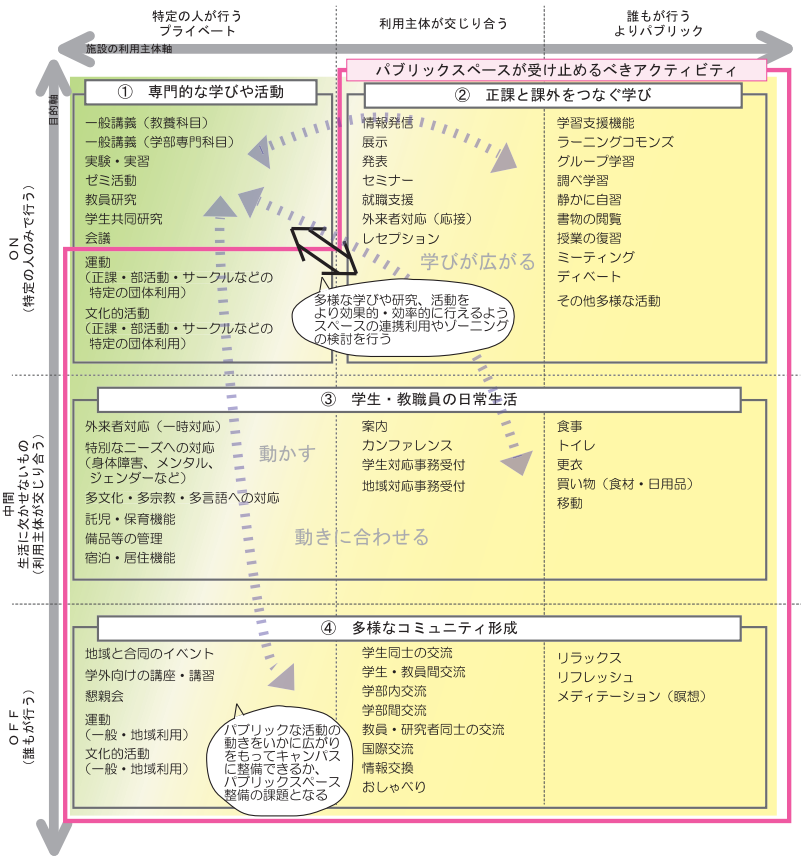
## （1）　大学の多様化するアクティビティへの対応

キャンパスでは多様なコミュニティにおける、主体的な学びや専門的な研究、活動、交流が行われている。

右図のように、大学における様々なアクティビティを整理し、より効果的で効率的なパブリックスペースの空間整備やゾーニングを行う必要がある。また、これまでパブリックスペースとして整備されてこなかったスペースもパブリックスペースとして位置づけることにより、より効果的で効率的なスペース利用が可能になる（「シェア」の発想）。

さらに、パブリックスペースの整備においては管理・運営面についても合わせて検討を行う必要があり、利用者のニーズや管理・運営主体の意見を含めながら検討を進めることが重要である。

表 4 -4-1　学生・教職員からみた大学における一般的なアクティビティの分類表




大学におけるアクティビティを、
①学生の専門的な学びや活動、教職員の業務
②正課と課外をつなぐ学び
③学生・教職員の日常生活
④多様なコミュニティ形成
の４つに分類した。

特に②、③、④は利用主体や目的が多様なため、パブリックスペースとして位置づけられた場所で行われることが望ましい。また、①のアクティビティにおいても、パブリックスペースとして位置づけられた場所で行うことでその効果をより発揮することが期待される。

※上図にはアクティビティの内容は立命館大学に既にある機能と、他大学や他の公共施設などにある機能を合わせて示している。

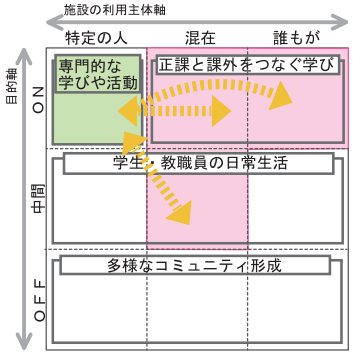
## （2）　大学の多様化するアクティビティへの対応

学びを促進する活気ある学びのコミュニティのために必要なパブリックスペースの役割と種類について、右記の通り、A～Dの４つに分類した。左図で整理した２軸のアクティビティのための空間を整備する際は、右図に示すように、主に４つのパブリックスペースの役割に応じて、複数のアクティビティを関連付けながら、より効果的な整備方針を検討することが大切である。

いずれのパブリックスペースも「専門的な学びや研究、活動の場」（※）との連携や相乗りを含めて構想する。

**※専門的な学びや研究、活動の場**
教室、実験・実習室、サークルＢＯＸ、体育館、グラウンド等

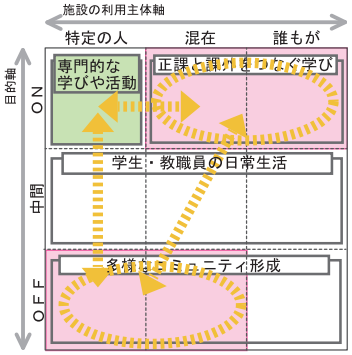
### A　学生の動きにあわせて配置する専門的な学びや研究、活動をサポートする空間




教室、自習室、グループ学習室、ミーティングスペース、作業スペース、情報発信スペース、事務窓口等

専門的な学びや研究、活動をより深め、発展させるための空間を学生の動きに合わせて整備する。授業前後や空き時間、研究の合間に気軽に立ち寄ることができ、先輩から後輩へ知識の継承や教員と学生の交流が生まれることを期待する。

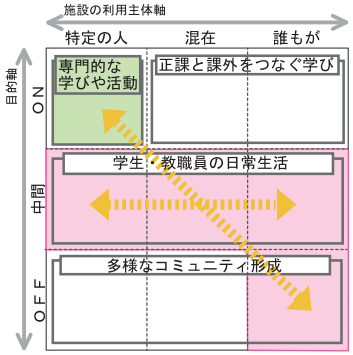
### B　学生が動くように配置する交流空間と学部横断的な学びの空間




教室、ラーニングセンター(リサーチコモンズ、ラーニングコモンズ)、学習支援機能、グループ学習室、ミーティングスペース、作業スペース、発表スペース、情報発信スペース、多目的ホール、ラウンジ等

ＯＮ、ＯＦＦの活動に対して、学生を動かし、多くの人や情報に出会える環境づくりを行う。ＯＮ空間には、学部横断的な学びへと発展させるための交流空間や情報発信の場を整備し、ＯＦＦ空間には新たな交流を促す空間を整備する。

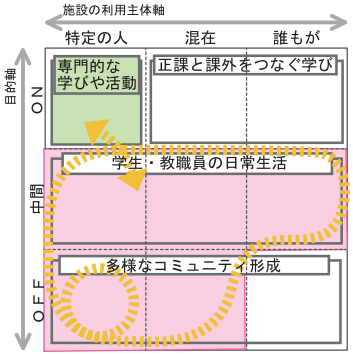
### C　キャンパス全体に配置するアメニティを高める空間




ラウンジ、食堂、カフェ、購買(コンビニ、自動販売機等)、広場、緑地、ベンチスペース、トイレ、パウダールーム、更衣室、メディテーションルーム、 託児・保育室、授乳室等

専門的な学びや研究、活動を行うためにキャンパスに長時間滞在するための、リフレッシュ空間やアメニティ機能の充実を図る。また、ゾーン毎のニーズに合わせた整備方針を検討する。

### D　地域との交流を促すスペース




教室、発表スペース、情報発信スペース、多目的ホール、ラウンジ、食堂、カフェ、購買(コンビニ、自動販売機等)、広場、緑地、ベンチスペース、屋内外の運動スペース、託児・保育室、授乳室等

学びや研究、活動の実践の場として、地域に貢献する役割を果たすキャンパスとして、地域の人が訪れやすい空間や機能を整備する。また、学生・教職員と地域・一般の方と交流するきっかけを生み出す空間について検討する。

## 4.4.4　パブリックスペースの配置と計画の考え方

### （1）　キャンパス全体のパブリックスペースの配置

大阪いばらきキャンパスでは、実践教育の拠点である「街のようなキャンパス」として、多様な出会いから豊かな交流が育まれる仕組みづくりが求められている。キャンパスと岩倉公園は「緑のプロムナード」によって一体的なパブリックスペースとなっており、キャンパス内には、学生の主動線としての「コンコース」、使い手によって更新可能なオープンエンドな機能のある各種の「コモンズ」、地域と密接したスペースとしての「ホール」、学生、地域協働での緑化事業を行う「里山」や「ガーデニング」など多種多様なパブリックスペースが整備されている。

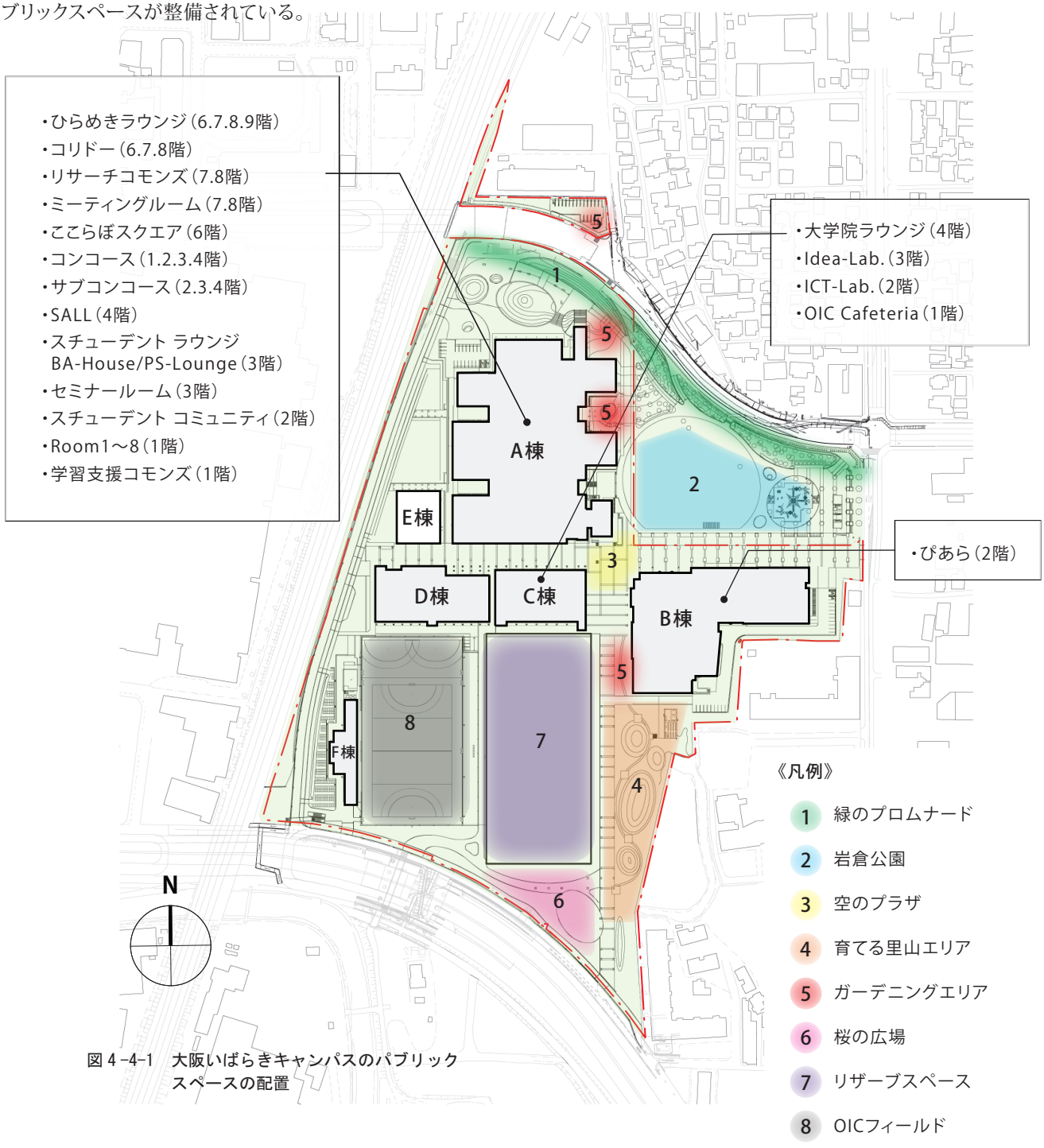



図 4 -4-1　大阪いばらきキャンパスのパブリックスペースの配置

### (2)　コモンズ

OICにおけるコモンズ空間は以下のとおりである。

| フロア | A棟 | | | | | B棟 | C棟 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 9階 | | | | ひらめき<br>ラウンジ | | | |
| 8階 | コリドー | Research<br>Commons | Meeting<br>Room | | | | |
| 7階 | | | | | | | |
| 6階 | | ここらぼスクエア | | | | | |
| 4階 | Concourse | SALL | | | Sub-Concourse | | 大学院ラウンジ |
| 3階 | | Student Lounge<br>BA-House<br>PS-Lounge | Seminar Room<br>(5限以降) | | | | Idea-Lab. |
| 2階 | | Student Community | | | | ぴあら | ICT-Lab. |
| 1階 | | Room1～8 | 学習支援コモンズ | | | | OIC Cafeteria |

表4-4-2　大阪いばらきキャンパス内のコモンズ空間

| | 衣笠 | BKC | OIC |
|---|---|---|---|
| 延床面積 | 162,191.00㎡ | 245,891.31㎡ | 105,908.11㎡ |
| 「Commons」 | 3,217.3㎡ | 2,714.0㎡ | 11,289.1㎡※ |
| 占有率 | 2.0% | 1.1% | 10.7% |
| 学生数 | 15,820名 | 13,59名 | 5,536名 |
| 一人当り面積 | 0.20㎡ | 0.19㎡ | 2.04㎡ |
| 学部構成 | 5学部 | 6学部 | 2学部 |
| ぴあら | 948.68㎡ | 508.4㎡ | 499.5㎡ |

※OICのコモンズにはコンコースを含む

表4-4-3　コモンズの学内比較（学生数は、2015年5月1日時点）

### (3)　情報環境

「情報環境」は、「キャンパス全体をラーニング·プレイスに」を目指すOICにおいて、特に重要なインフラである。情報環境整備に際しては、各種ディバイスが検索ツールではなく、LMSの利用をはじめとした学生の学習ツールになりつつあること、将来的には誰もがディバイスを所持することも想定し、"BYOD（Bring Your Own Device ）"を促進できる情報環境づくりに努め、全館無線LAN対応としている。印刷環境についてもオープン·スペースに複合機を配置し、コピーだけでなく、大学のネットワークに接続すれば学生のラップトップPCやスマートフォンからプリントアウトできるシステムの構築を図っている。デスクトップPCの配置も、従来は、特定の空間でなければPCが使えなかったが、複合機同様にオープン·スペースの随所に配置し、利用できるようにしている。

一方で、ICTを活用した成果物の精緻な「作りこみ」など高度な作業が必要になる場合もあるため、コモンズ空間の一つとしてICT-Lab.を設け、教員·学生の支援を行うスタッフを配置している。ICT-Lab.には、映像·音声の編集、グループでの作業が可能な空間や、ノートPCの貸出用無人ロッカー、大判印刷機などの設備があり、多様なアクティビティに対応できるようにしている。また、ICT教育支援の専門スタッフを配置し、Learning Studio等の特徴的な「教室」の活用支援、ICTツールの活用支援をはじめている。

このようなOICの特長としての情報環境整備については、今後とも重要な課題として認識し、更新を続けていく必要がある。

### (4)　学習環境としてのパブリックスペースの設計における考え方

OICの計画時には、キャンパス全体に広がる「学習環境」は、教室、コモンズ、情報環境の3つで構成されるものとして位置づけ、三位一体で検討をすすめてきた。施設計画の検討にあたっては『学びの空間が大学を変える』(山内祐平・他(2010)、ボイックス株式会社)で述べられた学習環境を構成する四つの要素「活動」「共同体」「空間」「人工物」に、独自に「共有」という要素を加えて整理した。以下、実際の計画の特徴をこれらの側面から概観する。

第一に「活動」はアクティブ・ラーニングを指す。アクティブ・ラーニングは、多様な考え方で構成されるが、開設にあたっては、図4-4-2の定義、特に取得した知識を他者に教えるというアプローチに着目した。本学の学びの特徴の一つである「ピア・ラーニング」とも合致する。

第二に「共同体」は、キャンパス内で生まれる学内外をまたいだ共同体として捉えた。OICが壁のない、地域に開かれたキャンパスであることからも、キャンパス内は、学内構成員に限定されず、市民や行政・企業、卒業生など多様なコミュニティが生まれる可能性が担保されている。

第三の「空間」は、具体的な建築空間と捉えた。特に美馬のゆり氏による講演(2013年4月13日)にて紹介された「寺子屋」「お茶の間」を参照した議論がなされた。あらゆるアクティビティを享受する柔軟性、機能を限定しない多様性、造り込みすぎない曖昧さが空間の計画に反映された。

第四の「人工物」は、造り付けでない可動の設備などに反映された。環境変化と多様性への対応(「型」のない学びの環境づくり)のため、什器類だけではなく、ディスプレイやAV操作卓を可動式にし、また、教室によってはスピーカーも可動式とした。また、学習には一人の時間・場所も必要となる。図書館の他に、コンコース上にも意識的に学習可能な空間を配置した。

最後の「共有」は、「活動」「共同体」「人工物」を「空間」の中で共有することとして捉えた。従来、空間に境界を設けて機能を棲み分け、各区間を特定の部門が専有・管理してきたがOICでは「コモンズ」を中心に機能ごとの棲み分けをあえて行っていない。空間の境界を曖昧にし、必要に応じて必要な利用者が使うという考え方で、タイムシェアリングとも言える方法を適用している。

- What I hear, I forget.
- What I hear and see, I remember a little.
- What I hear, see and ask questions about or discuss with someone else, I begin to understand.
- What I hear, see, discuss and do, I acquire knowledge and skill.
- What I teach to another, I master.

図4-4-2　Active Learning Credo (Mel Silberman、1996年)

## （5）　OICの特徴的なパブリックスペース　ー概要と設計意図ー

### コンコース

長さ200m、幅18mの南北を横断するコンコースは約6000名の学生の主動線であり、いつでも、どこでも、誰とでも学び、学び合えるようにしている。これは、「キャンパス全体をラーニング・プレイスに」の考え方を象徴する空間である。「木陰」のように、溜まりとなる空間を分散配置している。

写真4-4-1　コンコース（A棟1階）

### 空のプラザ

学びの軸と市民交流の軸の交差点に位置する。シンボリックな外観の大屋根がかかった広場で、多くの人々が行き交い、食堂やレストラン、コンビニエンス·ストア、図書館といったパブリックな機能に囲まれている。また、公園にも開かれているので、ダンスなどの学生の活動に加え、市民も参加するイベントに用いられる。「学び」と「交流」の共存を象徴するする屋外空間である。

写真4-4-2　空のプラザ

### まちライブラリー

一般社団法人まちライブラリーの協力のもと、「まちライブラリー@OIC」を開設した。開設当初の蔵書0冊からスタートし、その後市民が読了した本にコメントを添えて持ち寄り、本棚に“植本”し、図書館を育てていく仕組みである。本をテーマにした勉強会やワークショップなどのイベントも開催している。これらを通して、本を通しての参加者相互の学びあい、地域の魅力発見など、大学と地域を繋ぐ場として機能しはじめている。2017年現在の会員数は380名で、蔵書数は2000冊を超えている。

写真4-4-3　まちライブラリー（B棟1階）

### OICライブラリー（図書館）

大阪いばらきキャンパスの知と文化の創造・発信・交流の拠点であるB棟（立命館いばらきフューチャープラザ）の2階から4階にある。「学びが見える、学びに触れる、学び合える」図書館をコンセプトに開設した。図書資料を最大約80万冊収容できるスペースがあり、総座席数は約1,100席配している。

ピア・ラーニングルーム「ぴあら」には、グループワークエリア、フリーエリア、情報検索用PCエリア、サービスカウンター、セミナールームがあり、仲間（ぴあ：Peer）とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場として活用されている。

写真4-4-4　OICライブラリー（図書館）（B棟2～4階）

## (6)　各種コモンズの設計意図

### 気づきから環境行動を生み出す

OICの計画に際しては、実践教育の拠点「街のようなキャンパス」という基本理念のもと、出会いから豊かな交流が育まれるしくみづくりが求められた。公園に面して大屋根と屋内外テラスを持つ学生の主動線は「コンコース」と呼ぶ4層の縁側空間になっている。一方、コンコースを直交方向に貫く外部空間「緑のキャナル」は、テラスが段々にセットバックし、光と風とみどりの気配が内部空間に行きわたるようにしている。

また、講義室や研究室、コモンズなど様々な内部諸室機能に呼応したファサードは、時間や季節により表情を様々に変化させ、窓や障子の開閉や屋外テラスの活用など環境行動を促し、自然に対する気づきを生み出している。

### オープンエンドデザイン

教育環境が変化し、使い手(学生・教職員・市民)が変化する教育施設において、空間を作り込みすぎず、使い手によって更新可能なオープンエンド(半作り)のデザインを学生の居場所となるコモンズの設計に展開した。

コモンズの設計では、原始的な学びが大きな樹の木陰ではじまったという考え方をヒントに、「こかげ」を内装コンセプトとし、必要な場所に必要最小限の環境(光、家具、備品)を配置する計画とした。コンコースの天井は下地材を露出した天井とし、イベント時には吊りサインが可能である。照明も配線ダクトにより位置変更、増設が可能な計画とした。

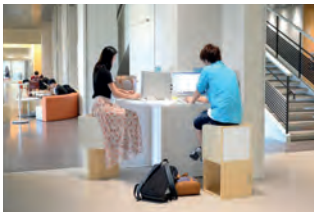
コモンズには「ピアボックス」という400角のキューブを200個配置した。これは学生の発案で生まれたものである。1面がホワイトボードの椅子、机、物置、棚、台であり、アイディアを書き留めたり、イベントの告知、掲示板として多機能な利用が可能な家具である。空間・照明・サイン・家具において学生が更新可能な作りとしている。

写真4-4-5　ピアボックス

階段の起伏が溜まり場となり、掲示板・プレゼン利用できるホワイトボードを中央に配置

「大木の木陰」をコンセプトとした政策科学部のコモンズ

ボックスを使ったミーティング



ボックスをハイチェアに利用

政策科学部のコモンズ

経営学部のコモンズ

コモンズのワークショップ

サインのワークショップ

写真4-4-6　各コモンズでの利用の様子

### （7）　その他のパブリックスペース

OICには、以上の他にもホールやカフェ、レストラン、屋内の広場的な多目的空間など多様なパブリックスペースが計画されている。

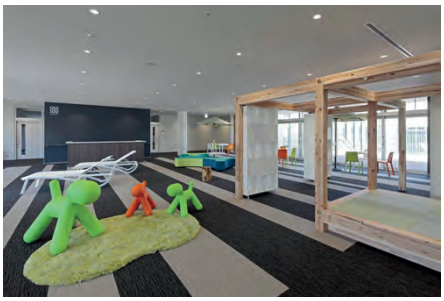
A棟1F　キャンピングキッチン

B棟1F　スターバックスコーヒー

B棟1F　ガーデンテラス　ライオン

B棟2F　グランドホール

B棟2F　R-AGORA



B棟5F　Chronotopos〈産学交流ラウンジ〉

写真4-4-7　キャンパス内のその他のパブリックスペース

## (8)　パブリックスペースの効果と課題

2015年のOIC開設後、パブリックスペース(コモンズ)に関してアンケート調査を行ったのでその集計結果の概要について、考察を含めて以下に記す。なお、アンケートの対象者はOICを利用する学部生とし、2016年4月1日～6月30日までの間に、学生自治組織を通じて配布・回収した。有効回答数は399である。

### ■活動内容と場所の対応

授業の前後、昼休み、授業終了後にどのような活動を、どこで行なっているかについて集計してみると、以下のような傾向が明らかになった。

・学習のために利用する場所では、OIC Library と「ぴあら」を含めたコモンズでの利用が多い。学生の教室間移動の主動線となる「コンコース」を基軸に多様なパブリックスペースが配置されているため、学生たちは状況に応じて学習環境を選択していると考えられる。

・パブリックスペースでは、学習だけではなく、課外活動、雑談・休憩など様々な活動が時間帯によらず展開している。OICにおけるコモンズの設計意図として、個々の場所は、特定の機能に極力限定せず、柔軟性・多様性・曖昧さをコンセプトにしており、多様な活動を享受できるよう設計・運用がなされている。

上記の結果を踏まえると、計画当初から想定したとおりの利用実態といえる。特に、OICでは飲食施設も広義のコモンズとして位置づけて運用しているが、食事が中心ではあるものの、学習を含む諸活動が行われていることがわかる。

### ■什器と活動の関連

様々なアクティビティを支え、学生の居場所選択に大きな影響を与えているのは、椅子・ソファ・机・テーブル・PCといった什器による環境の違いにあると予想されるが、具体的に以下の点が明らかになった。

・学習面においては、PCの依存率が高い。PCが学生たちの学習ツールとして機能していることが伺える。これは、「キャンパス全体をラーニング・スペースに」を実現すべく情報環境を整備した結果と考えられる。

・ICTツールを単独で活用するのではなく、本・文献　・書類・テキストなど「アナログ」と組み合わせた活用が見受けられる。

・OIC　Cafeteriaで学習する理由として、お茶が飲めるから、食べながらできるから、といった記述や、自動販売機があるからという記述がみられた。飲食ができることがパブリックスペースに利用者を誘導する大きな要因になっていると推測される。

### ■活動を通じて得た力量

パブリックスペースにおける活動を通じて得たと感じている力量は、協調性が最も高い結果となった。これは、多くの活動がグループで行なわれることに関連していると推察する。特に飲食施設において協調性を獲得できたという回答が多く、昼休みを中心に食事中のコミュニケーションが、学生たちにとって非常に有益なものと認識されている。

また、協調性や積極性など、グループ活動を通じて得られるであろう力量は、コモンズなどのオープンな環境で得られたとする回答が多い。一方、専門知識等の取得についてみると、OIC Libraryで得られたとする回答が多く、多様な学びのためには、個人で学習に取り組む場もコモンズの中に必要であることを示唆している。

学生のアンケート調査によって明らかになった点として重要なのは、活動スタイルと目的・内容、グループの人数、用意されている什器などに応じて場所を自ら選択していることである。OICにおけるコモンズの計画に際しては、機能を特定させないこと、オープンなコモンズではできるだけ境界(特に壁)を設けないこと、また、空間の使い方を明示しないことによって活動を限定させないことを心がけた。アンケート結果から実際の状況をみると、キャンパス全体に学習環境や活動スペースが広がり、学びや様々な活動に触れること、見えることが一般的な認識になっていることが伺える。今後は、成果や取り組みを学生たちが主体的に「見せる化」(成果の発信)するための仕掛けづくりを行なうことで、より能動的な学習が進むものと考えられる。

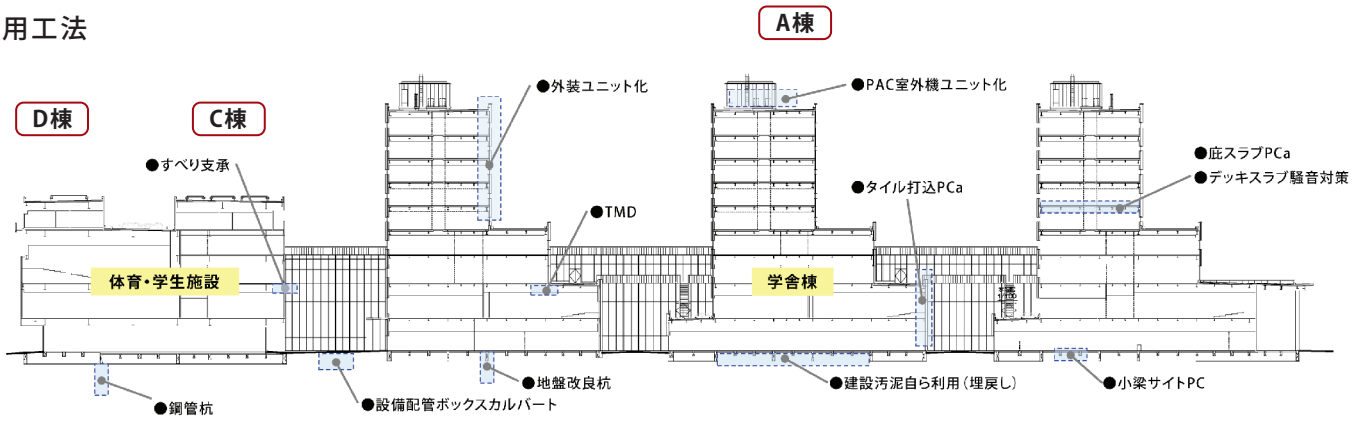
OICではパブリックスペースの充実に力点を置いているが、今後も利用者に対する調査を継続し、再整備に反映させることが望ましい。

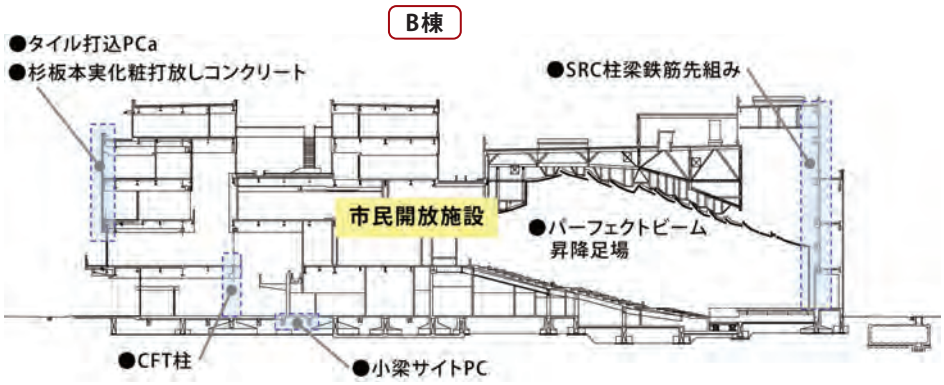
参考：立命館大学大阪いばらきキャンパスにおけるラーニング・プレイスの考え方と利用実態(その 2)、河合孝一郎・武田史朗・及川清昭、2017年度日本建築学会学術講演梗概集

Room(1～8)は利用者を限定せず多目的に利用できる
写真4-4-8　Room(1～8)の利用の様子

# 4.5　建築デザイン

## 採用工法




・波型耐震鋼鈑(WAVY)地組工法
・設備機器先行揚重
・鉄骨建方屏風建て工法

図4-5-1　各所建築仕様

### (1)　外装デザインの方針

OICの建物の外装計画は、公園との一体的な景観作りや、周辺市街地への景観的な配慮に基づき、以下のような考え方で行われている。今後の新築や改装においても、特別な必要性や意図が無い場合には以下の方向性を尊重して、統一感のある、周辺環境に配慮された景観形成を計ることが望ましい。

### (2)　外装デザインの検討で配慮するべき事項

OICの外壁については、他の2キャンパスとの連続性とOICの固有性をともに考慮し、レンガタイルを積極的に用いつつ、近代的な建設素材と組み合わせることをデザインコードとする。

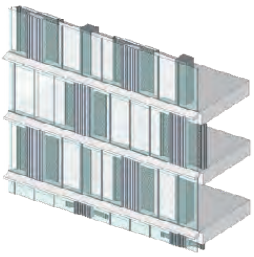
・レンガタイルの壁面は、主に、低層部の教室などに利用し、巨大な壁面の印象を与えないように、また公園と一体化した樹木の多い環境になじむように、縦方向のスリット状開口部を積極的に用いるなどして、壁面を分節する。

・高層部は、周辺市街地への圧迫感を避けるために、ガラス面を多用した軽快な外装としたり、あるいは、オフィスビルのような均質で巨大な外壁面とはならないように、開口部と壁面の組み合わせを工夫したりして、壁面を小さく分割する表現を心がける。

・低層部においても、コンコースなどのパブリック空間の場合については、公園や緑地に対して大きな開口部を設けるなど、開放的な空間づくりを重視した設計とする。

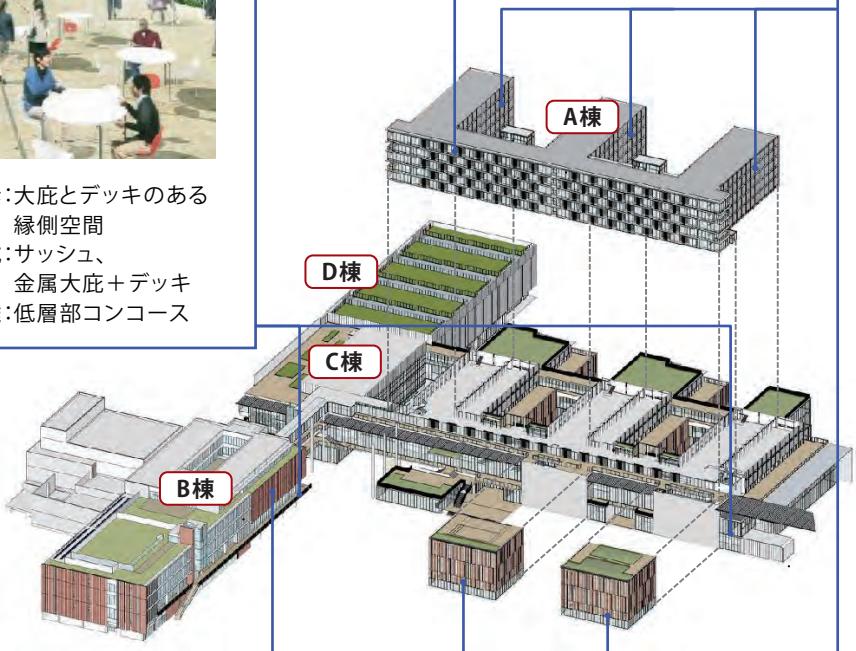
・全体として、工業的な印象となることを避けるため、ALC版やスパンドレルのような工業素材の壁面は、ベージュ味を含ませたり、凹凸のある表面仕上げとするなどの工夫で印象を和らげる。同様に、コンクリート打ち放しの場合などについては、本実型枠を用いて木目の表情をもたせるなど、温かみのある表現を用いるようにする。

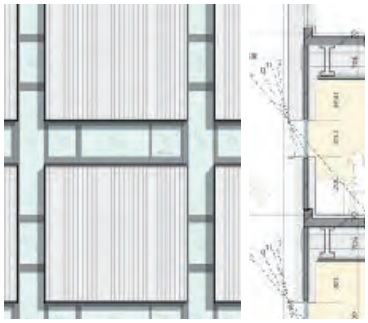
## （3）　外装構成



**要素**：断熱性能・開口を変化させる
**構成**：SHOJIシステムガラス、断熱障子＋波型穴あき鋼板耐震壁
**内部用途**：共同研究室
**効果（熱負荷）**：ガラス単板比・・・41%／削減複層ガラス比・・・12%削減
**新技術・工法**：波型穴あき鋼板耐震壁
**特徴**：利用者が環境を設定できる
**CO2削減量**：年間CO2排出量 約770t削減

**要素**：大庇とデッキのある縁側空間
**構成**：サッシュ、金属大庇＋デッキ
**内部用途**：低層部コンコース



**要素**：L型開口＋建築化ベンドキャップ
**構成**：金属スパンドレル＋ALC、
**内部用途**：サッシュ
**効果（熱負荷）**：個人研究室：大開口＋庇案比・・・約65%削減
**新技術・工法**：複合外壁工法（ALC+金属）
**特徴**：遮音性、熱環境、眺望性を確保し、個人研究室を視覚化
**CO2削減量**：年間CO2排出量約31,700t削減

**要素**：日射と視線を制御する平行四辺形の外壁
**構成**：平行四辺形断面のPca＋サッシュ
**内部用途**：大教室
**効果（熱負荷）**：平型Pca外壁比・・・15%削減：平行四辺形Pca外壁
**CO2削減量**：年間CO2排出量約1,030t削減

図4-5-2　各外壁ごとのデザインの詳細

# 4.6　ランドスケープ

## 4.6.1　ランドスケープゾーニング

大阪いばらきキャンパスでは、キャンパスが岩倉公園と一体的に計画されたことから、ランドスケープ（緑地や外部空間）のデザインに関して、公園と大学にまたがった入念な検討が行われ、図のようなランドスケープのゾーニングが行われている。今後の改修計画においても、このゾーニングを参考として、各々のゾーンの特徴を強化、促進していくように取り組むことが求められる。また、必要性がある場合には、新たな長期的計画と整合させたゾーニングの修正を行うことが望ましい。

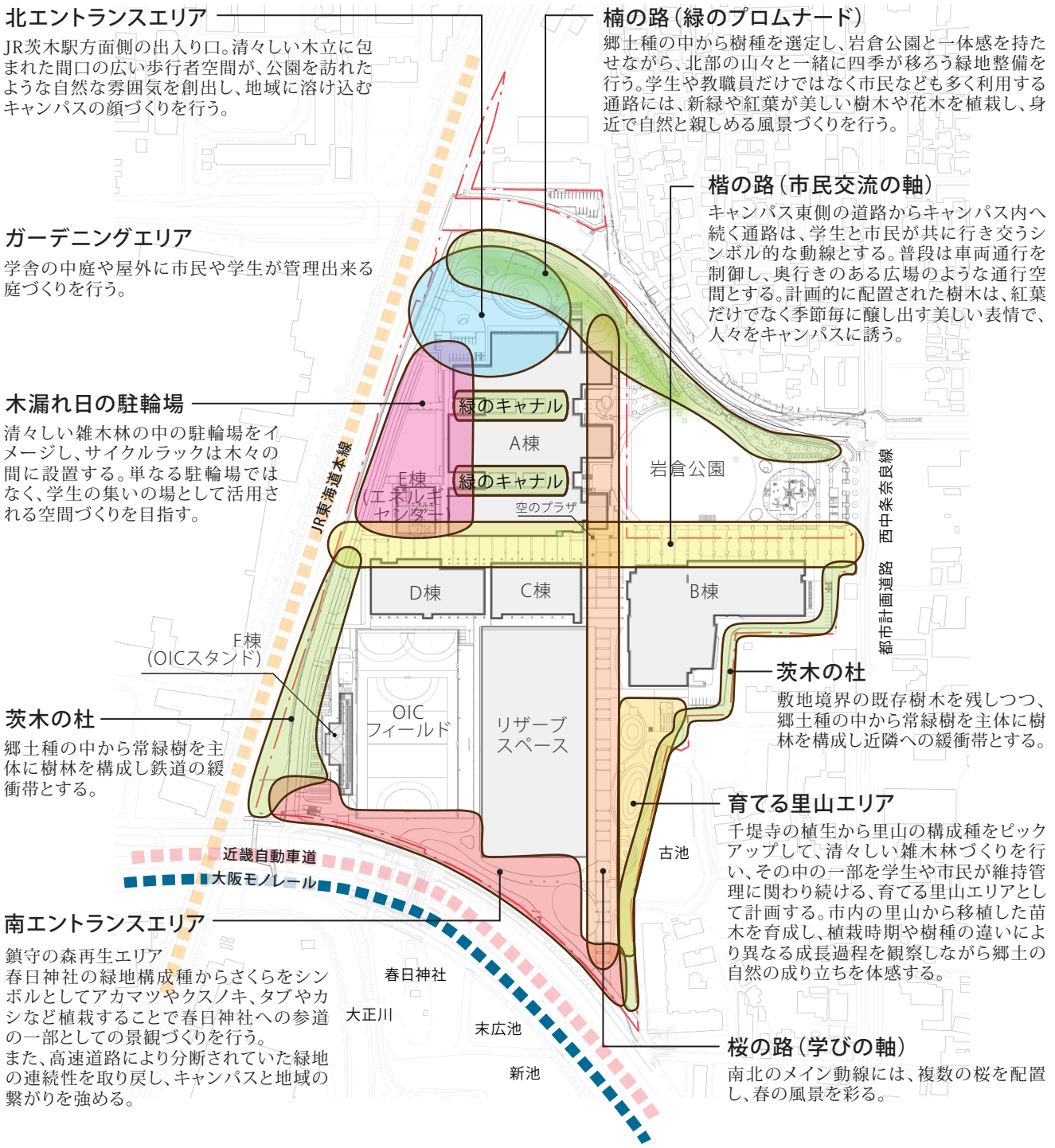



図4-6-1　大阪いばらきキャンパスのランドスケープゾーニング

## 4.6.2　キャンパスランドスケープで重視すべき点

### （1）　キャンパスのアイデンティティとしてのランドスケープ

大学では、キャンパス内の建築と景観自体が、学生の記憶にのこるアイデンティティに満ちたものであることが望ましい。大阪いばらきキャンパスにおいては、「学びの軸」と「市民交流の軸」の二つの軸と、「緑のプロムナード」および「岩倉公園」との一体性が、その骨格的な役割を果たしている。

一方、一般にキャンパスが長年にわたって利用されるほど、建設計画の積み重ねによって狭隘化が進み、緑地や空地は断片的な「残余」の空間となりやすい。大阪いばらきキャンパスでは幸いにして現段階では明確な骨格が与えられている。今後の改修計画においても、前項に示したランドスケープのゾーニングを参考として、各々のゾーンの特徴を強化、促進していくように取り組むことがのぞましい。

なお、敷地南側の春日神社周辺の緑地は地域住民の財産区であるが、都市公園として計画決定されている。キャンパス内もリザーブスペースは用途が未だ確定していない。春日神社への参道の役割を南側の歩道が果たしていることから「鎮守の森再生エリア」の設定によってこの部分と春日神社の緑地との連続性を位置付けているが、南端部の緑地は大学キャンパスとしての用途や周辺市街地との関係上の役割などは未だ明確化されずに残されている。

今後のリザーブスペースにおける整備計画や、春日神社の公園整備などの進展とあわせてこの部分にも明確な役割と景観上のアイデンティティを向上させていく必要がある。

### （2）　キャンパス生活の質を向上する緑地

大学キャンパスは学生および教職員が長時間にわたって過ごす空間なので、いかにアイデンティティ溢れる景観であっても、居心地の良い空間でなければ役割を果たさない。ランドスケープおよび緑地によって向上できる生活空間としての質の代表的なものとして、視覚的アメニティ、微気候、居場所が挙げられる。視覚的なアメニティには樹木や地被植物、花卉（かき）類などを利用した緑視率の向上や季節感の演出、水景施設などが寄与する。

また、微気候の調節に関しては高木による木陰の創出や地被植物や反射性の低い床材などによる照り返しの低減などが代表的である。

これらによって環境を整えることと、適切なベンチや腰掛けられる段差の設定などを組み合わせて、学生、教職員および来訪者にとって心地のよい居場所をつくりだすことができる。

建設時にも、この点について一定の検討が行われているが、学生や教職員、地域住民に対するヒアリングやワークショップを継続的に行い、キャンパス生活の質の向上により大きく貢献するランドスケープの整備と管理を続けていくことが望ましい。

写真4-6-1　岩倉公園側から見たキャンパス

### （3）　都市緑地の一部としての大学キャンパス

キャンパスのランドスケープは、キャンパス内の空間における機能的、経験的価値を向上させるものであると同時に、キャンパスを含む市街地においても重要な役割を果たし得る資源である。キャンパス内の緑地の計画を行う場合には、都市的な文脈を把握した上で、既存の緑地や空地のネットワークへの接続などを含め、周辺地域と協調して価値を高め合う計画が望ましい。

防災公園市街地施設整備事業という国の補助事業を活用した大阪いばらきキャンパスでは、周辺市街地との連続性を中心的な課題として検討し、塀のないキャンパス、公園と一体化したキャンパスという方針が当初から位置付けられた。そして、周辺の既成市街地の街路構造や、緑地資源との連続性なども意識した計画とデザインが、茨木市、UR、立命館および関係の専門機関との密な協議を通して進められた結果、大学のキャンパスと公園との境界が見つけにくいほどに一体化した姿が実現されている。

このように、所有と管理の主体が異なるオープンスペースを一体的に計画・デザインし、都市内の連続する緑地ネットワークを構築する先行的事例は、歴史的には数多くある。エメラルドネックレスと愛称されるアメリカ、ボストンの緑地系統にはハーバード大学の樹木園の土地が含まれている。また、神奈川県の港北ニュータウンにおける緑地系統「グリーンマトリックス」には、学校などの公共施設の管理地だけでなく、民間の住宅開発や社寺仏閣が所有管理する緑地が取り込まれている。

さらに、都市の公共空間の管理運営に民間活力が動員される事例も急激に増加している。そうした中で、今後のキャンパスにおいて、そのオープンスペースの公共的価値を十分に意識した計画と管理によって周辺地域の景観的、生活環境的な価値を向上させることは、公益性の高い組織である大学法人としての次世代に向けた責務の一つである。

また、大学キャンパスの緑化整備には、単なる大学のブランドイメージの向上にとどまらず、コモンズの一類型としての重要性がある。人が集いたくなるような優れた風景の中に、優れた人材が多く居合わせることで、その共通の風景体験を互いの信頼の基盤とする交流が生まれ、イノベーションにつながることが期待される。

特に、「都市共創」「地域・社会連携」を謳う大阪いばらきキャンパスでは、そのような風景が大学だけでなく、地域との協働によって、キャンパスの内外にわたって育まれていくのが理想の姿でもある。大阪いばらきキャンパスでは現在も、茨木市や周辺に関わる民間企業と大学との共同で、都市内のオープンスペースの管理運営やエリアマネジメントに関する定期的な勉強会（OICオープンスペース研究会）を行い、こうしてつくられた公園とキャンパスの複合的なオープンスペースに関して、より良い発展的な管理運営のあり方についての意見交換が継続されている。

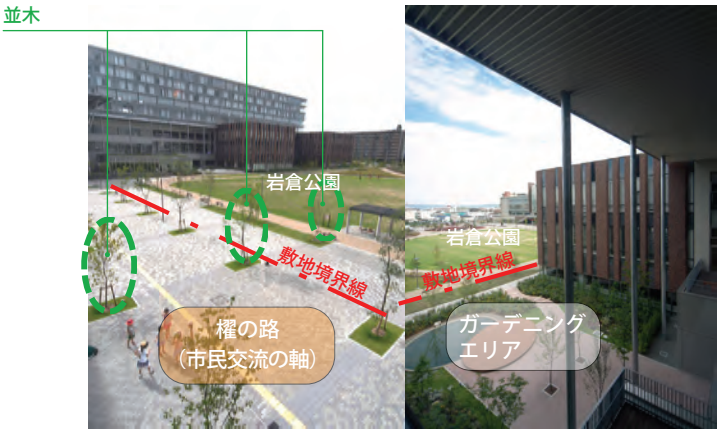



写真4-6-2 左：フューチャープラザ上階から
右：A棟３階から
ガーデニングエリア越しに岩倉公園を望む

写真4-6-3　レストランの前の水景付近で遊ぶ地域の子供達

### （4）　地域住民が参加してつくるランドスケープ

大阪いばらきキャンパスでは、開設以前の計画段階からの取り組みとして「育てる里山」「ガーデニング」の二つのプロジェクトにおいて、市民参加による緑地の創造と管理を継続している（詳細については、「6.3.2市民参加の緑地管理」を参照）。「都市共創」「地域・社会連携」を体現する風景として、今後も継続し、長期的に保っていくことが望ましい取り組みである。

写真4-6-4　育てる里山プロジェクト

写真4-6-5　ガーデニングプロジェクト

### （5）　長期的な緑地整備計画と管理

緑地整備は短期間で効果が現れるものばかりではなく、特に新しいキャンパスや、植栽基盤が貧弱な場合には、土壌や地下排水整備、適切な樹種選定などを含めた育成が必要となる。こうした緑化工事は思いの他高額になるので、実施には、明確な骨格ヴィジョンと段階的計画が必要である。びわこ・くさつキャンパスでは、BKCマスタープラン2015ver.1においてキャンパスの骨格的な空間軸の部分と、それらが交差する中心部を緑化に関して高い優先順位をもつエリアとして定めた。これ以降、びわこ・くさつキャンパスでは「BKC将来構想検討委員会」の下に「BKC緑地計画具体化ワーキンググループ」という名称の全学的会議体を設置し、学生へのヒアリングやワークショップを企画しながら、幅広い所轄部署が参加してマスタープランの実現に向けた継続的な計画の検討を行っている。

大阪いばらきキャンパスの場合、建設計画策定時に公園と一体化した大学キャンパスとして入念な設計が行われているが、それを踏まえた将来に向けた緑地の整備と管理に関する計画策定の取り組みは全学的に位置付けられてはいない。

大阪いばらきキャンパスにおけるランドスケープや緑地の重要性を考慮した場合には、長期的な緑地整備および管理の計画をマスタープランに含めることが、今後の課題である。

# 4.7　安全・安心

## 安全・安心の考え方

良好なキャンパス環境を維持できるよう、安心・安全なキャンパスづくりが求められる。大阪いばらきキャンパスは地域に開かれたキャンパスであることから、不特定多数の人が訪れる場所であり、誰もが使いやすく快適なキャンパスとして整備することが求められる。そのため、現在のキャンパスでの取り組み状況や課題、その検討状況について把握する必要がある。

## ユニバーサルデザイン、バリアフリーへの配慮

キャンパス内において、身体の不自由な人だけでなく、高齢者や子ども、海外からの留学生なども含めた全ての人が支障なく過ごすことができるよう、バリアフリーとともにユニバーサルデザインに配慮することが重要である。

## 交通への配慮

キャンパス内は歩行者の通行を最優先とした整備・運営を行う必要があり、歩きやすい路面の整備や雨の日のキャンパス内移動への配慮についても検討が求められる。そのため、キャンパス内は原則、自転車・バイクの通行は禁止している。

歩行者専用通路においても、キャンパス運営上必要なサービス車両の通行については許可されており、入構時間帯、入構許可車両、キャンパス内移動経路、キャンパス内一時駐停車スペースについての規則の周知と運用の徹底が必要となる。また、さらなるキャンパス内の快適性、安全確保のためには、サービス車両の運営面について見直し・検討を行う必要がある。

図4-7-1　大阪いばらきキャンパスのバリアフリーマップ

## 防災・防犯への配慮

施設整備においては、建物の耐震改修や非構造部材の耐震化を行い、地震に強いキャンパスづくりを行っている。また、不特定多数の人が利用するキャンパスとしての防犯対策として、見通しのよい環境整備やセキュリティー対策について十分な配慮が必要である。特にOICの大きな特徴のひとつが「屏(へい)のないキャンパス」であり、今後も地域に開かれた大学として持続するためには、オープンとクローズのバランスを図ることが肝要である。

万一、災害等が起こった際の対策として、防災訓練を実施するなど、いつ災害が起こっても迅速な対応ができるよう日頃から十分な対策を行う必要がある。また、安全管理室より、「緊急災害対応ハンドブック」と「防災カード」が発行され、大学ホームページで公開するとともに、全学の学生、教職員に配布され、防災意識の向上に努めている。

図4-7-2　緊急災害対応ハンドブック、防災カード
（立命館大学安全管理室作成）
学生用、教職員用が作成され、全学生、教職員へ配布され、
大学ホームページでも公開されている。
http://www.ritsumei.ac.jp/safetymanagement/safety/safety_handbook.html/

## 災害に強いまちづくりに貢献するキャンパス

キャンパス内だけでなく、隣接する既存の大型商業施設イオンと連携し、岩倉公園（防災公園）への非常時電力供給体制を確保している。一部施設（体育館、食堂）の開放、耐震性受水槽、備蓄倉庫、非常用トイレ、井水供給など、周辺住民の避難受け入れにも備えている。

既存の施設と新たな施設をうまく繋げながら、まち全体の防災力を一層高めることが重要である。

## 相互連携協力による災害に強いまちづくりに関する協定

立命館、茨木市、イオンリテール株式会社による三者間の連携協定を締結した。（2014年4月18日）

本協定は、地域の防災に関する啓発・研修、発生時における応急対応及び各段階においてそれぞれの持つ資源を活用しつつ、相互連携を行うことを目的として締結された。

図4-7-3　非常時電源ルート

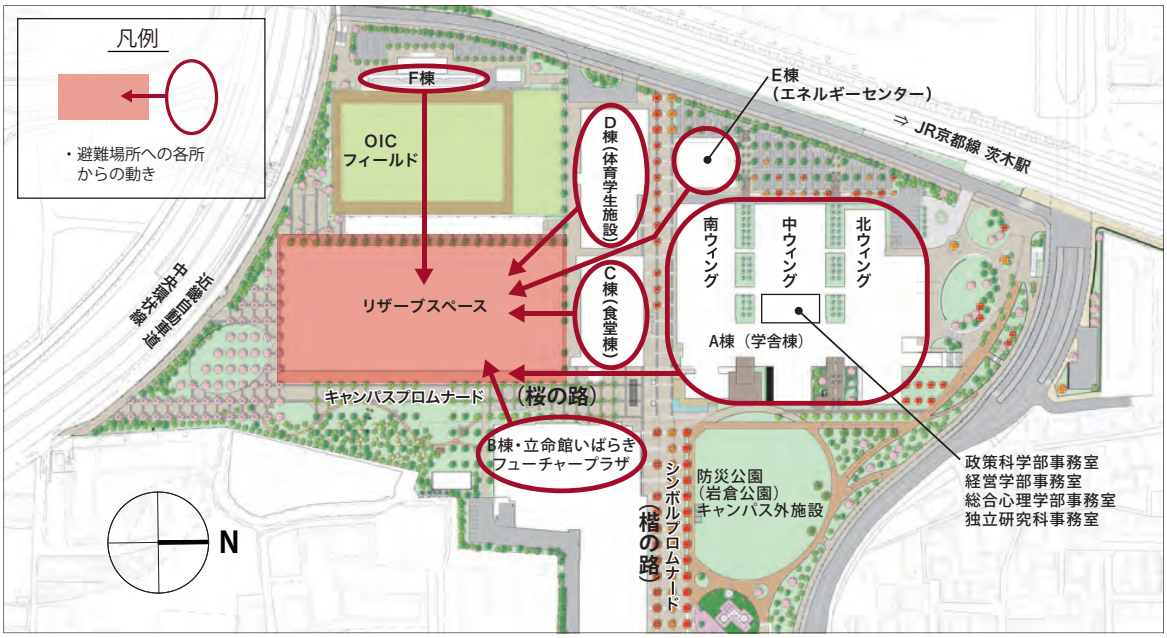



図4-7-4　大阪いばらきキャンパス内の避難場所

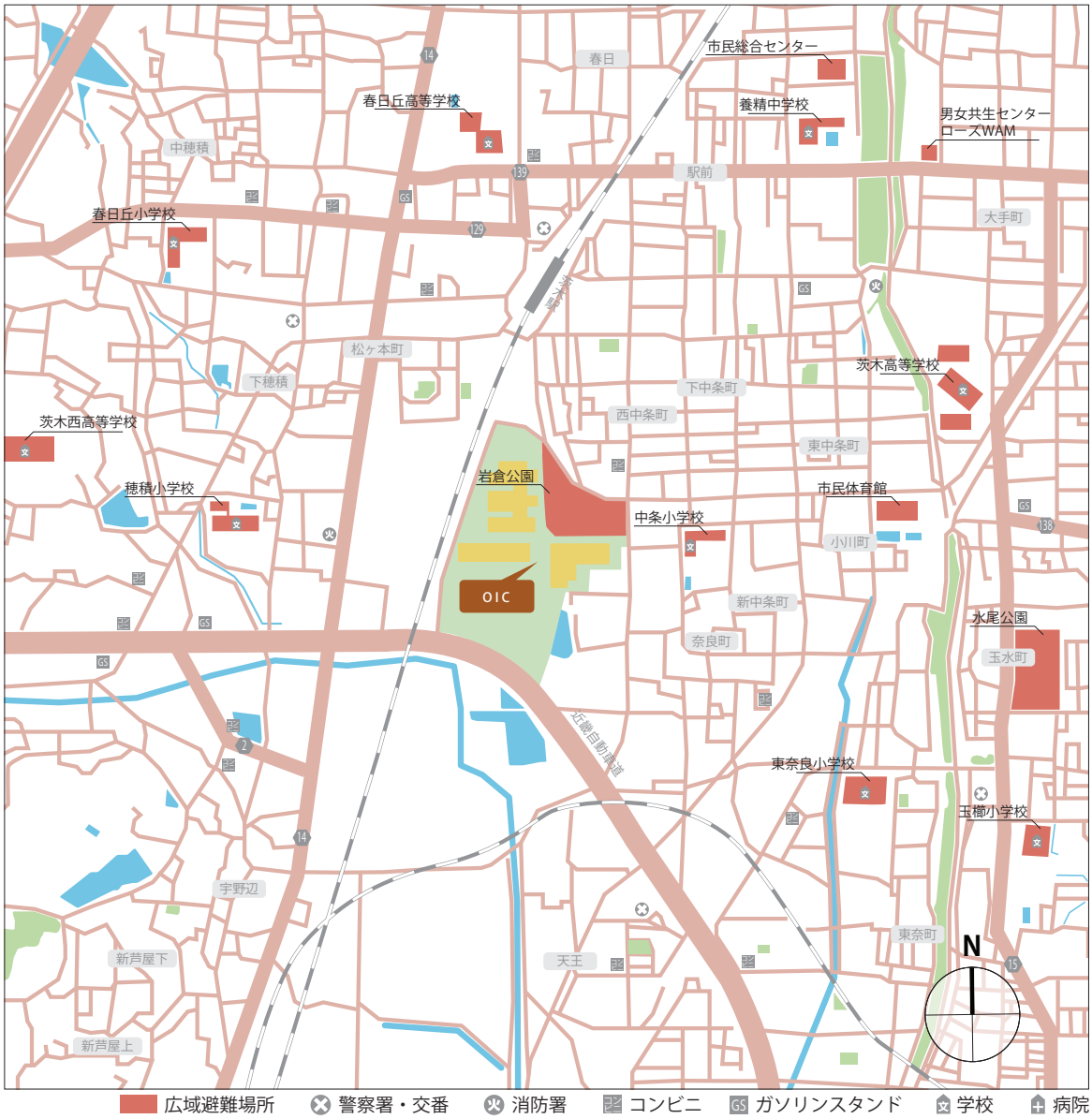



図4-7-5　大阪いばらきキャンパス近郊の広域避難場所

※GS ガソリンスタンドは耐震設計がなされ消化機材を常備しているため、安全な避難場所になります。

# 4.8　環境配慮

## 4.8.1　エコアクション・キャンパス

### ユーザーと環境の関わりを誘発する「エコアクション・キャンパス」への取り組み

OICで採用されているエコアクション促進BEMSの概要を下図に示す。
エコアクション、熱源、電力の情報を統合し、より効率の高い運転、施設運用に繋げるようコントロールすることが重要である。

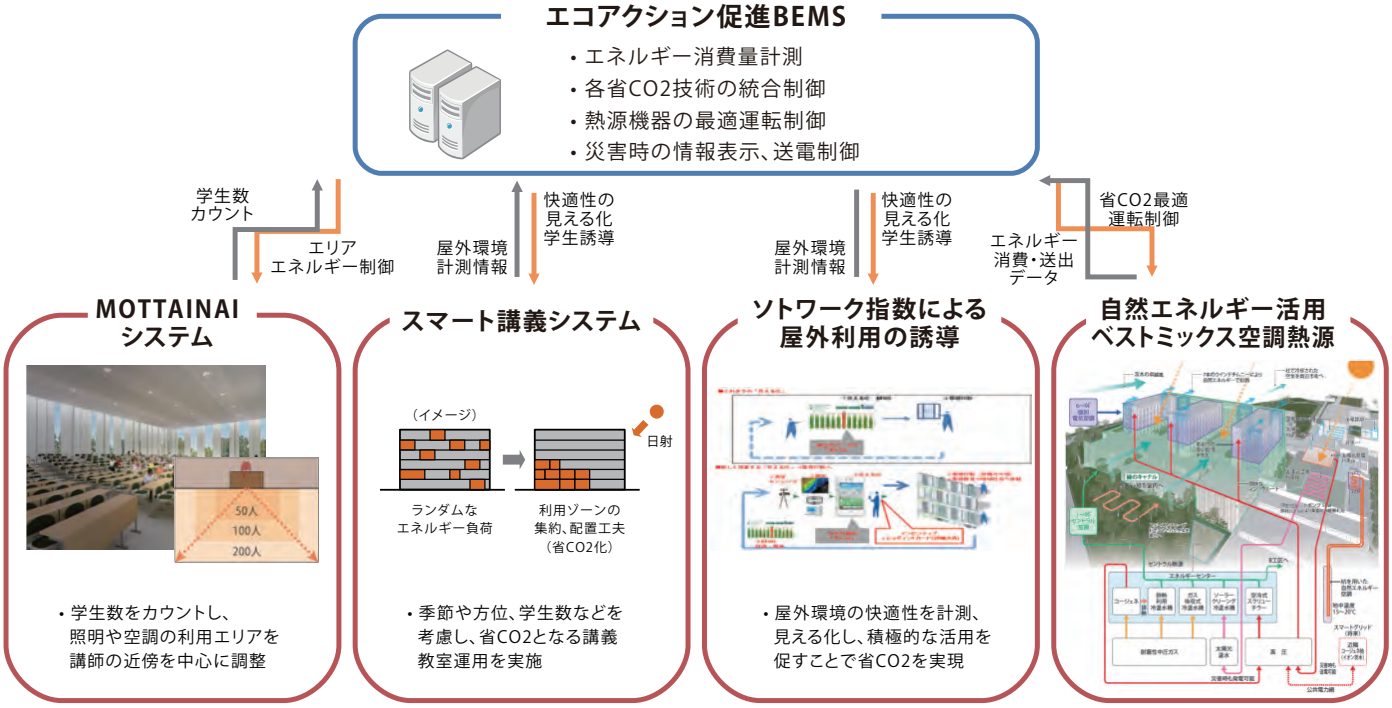



図4-8-1　エコアクション促進BEMS

### ソトワーク

屋外環境の快適性を見える化し、積極的な活用を促す屋外の快適性（天気、温度、湿度など）を数値化し、室内表示することで利用者に屋外での活動（ソトワーク）を促す。気持ちの良い空間での活動が閃きを促し、建物内の省エネ（照明、空調など）効果を高める。

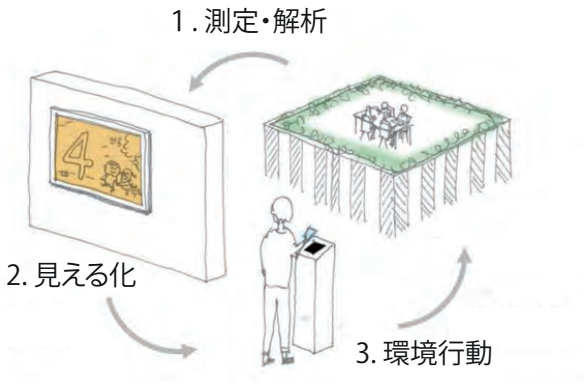



図4-8-2　ソトワークの仕組み

### MOTTAINAI システム

学生数に応じて、照明や空調の利用エリアを自動調整大教室内に設置した人感センサーで在室数をカウントしながら、照明、空量、換気を自動制御し、前方ほど快適性が高くなるように環境をコントロールする。人数が少ない時でも授業時の親近感を高めると同時に、省エネルギー効果も高める。

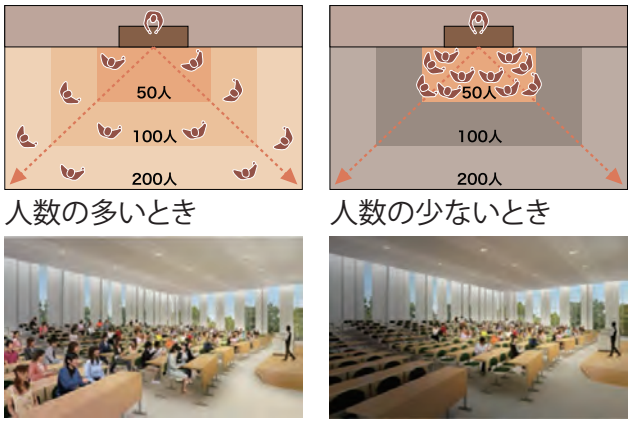



図4-8-3　MOTTAINAI システムの実施イメージ

### スマート講義システム

季節や方位、学生数に応じ、講義室運用を調整講義室運用システムとBEMSを連動させ、スマート講義システムとして運用している。季節、方位、利用人数から空調負荷のより低い部屋を優先して割り当てることで省エネにつなげる。
（例：夏期の午前中は西側の教室利用、利用する教室をなるべく隣接させ隣室非空調部を減らす、エネルギーセンター棟に近い教室利用を優先し、配管ロスを減らす等）

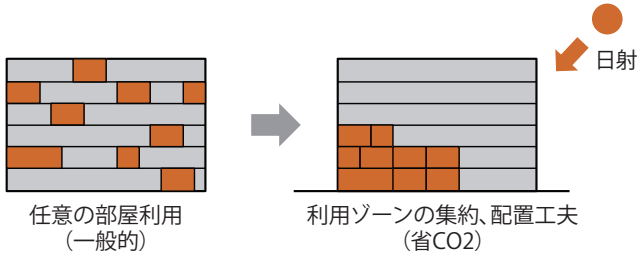



図4-8-4　スマート講義システムの概念的イメージ

## 複数建物連携によるエネルギーの最適化

再生可能エネルギー、コジェネレーション、ソーラークーリング、空冷チラーをベストミックスさせたエネルギーセンターを配置、複数建物のエネルギー需給状況を最適化すると共に「エコ・アクション」をコントロールすることで、34％の省エネ化を目指している。

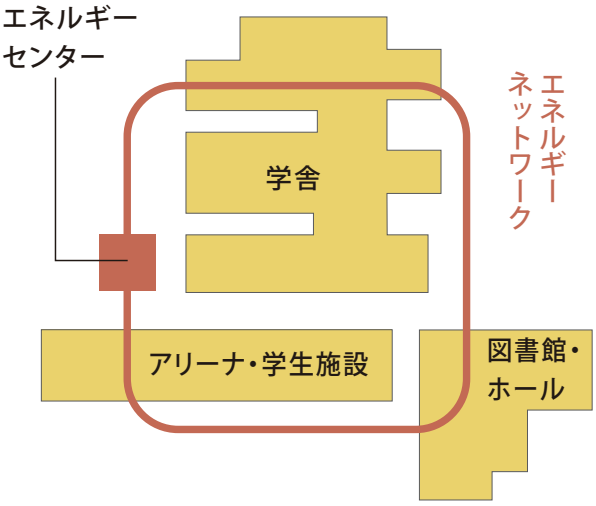



図4-8-5　エネルギーネットワーク

写真4-8-1　エネルギーセンター（右）と学舎棟（奥）

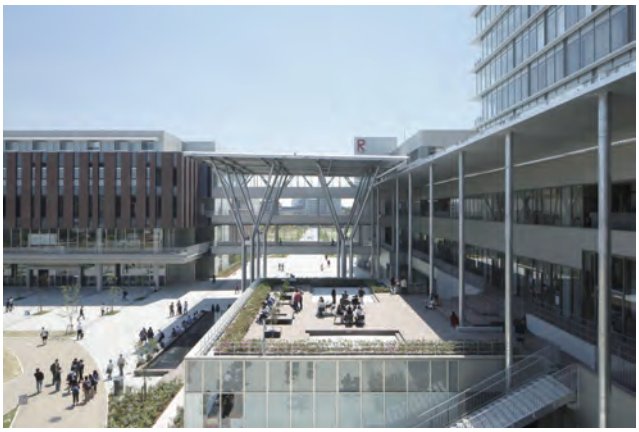


写真4-8-2　緑のキャナル

## WAONポイントによる環境運動の促進

WAONポイントを活用した環境行動を促進環境行動（エコアクション）に応じて、全国普及しているWAONカードにポイント付与している。隣接するイオンモール茨木（イオンリテール）と連携し、環境活動だけでなく社会・地域貢献活動の促進も含めた展開を実施している。

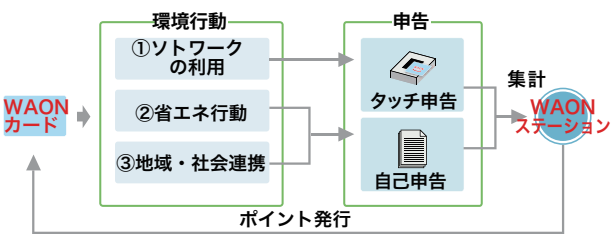



図4-8-6　WAONカードのポイント獲得フロー

写真4-8-3　ソトワークの表示画面（右）と、
センサーを配置したテラス（奥）

## 4.8.2　外装での配慮

### 知のハニカム　＜研究者の知が集積する＞

教員研究室の北面、南面の外装である。各棟が短冊状に対面配置となることから、視線の見合いを制御するため、座位時には視線が切れる腰高1100mmの横窓と、対面する窓を入れ違いで配置した縦窓を組み合わせた形式としている。

外壁はALC＋ガルバリウム鋼鈑の2重壁とし、断熱性の向上、騒音の低減を図っている。また、外壁厚280mm、内壁厚300mmと壁に厚みを持たせ、横窓と縦窓の組み合わせにより日射受照量を四角の開口＋小庇600mmと比べて約42％低減できるように計画している。また外壁仕上げは台形形状のスパンドレルを左右反転して市松状に配置することで、見る角度や光のあたり方によって刻々と表情を変えるゆらぎのある外装としている。

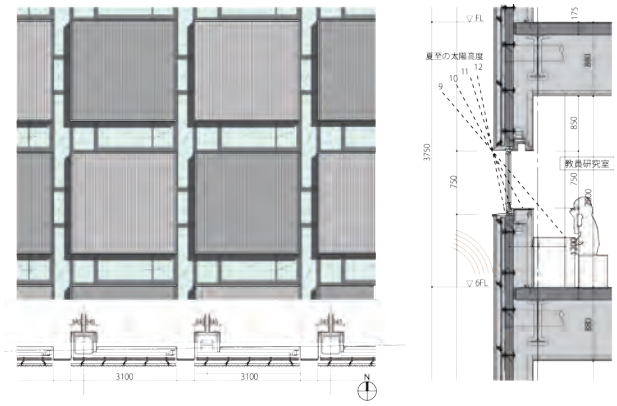



図4-8-7　知のハニカムの平・立・断面図

写真4-8-4　知のハニカム外観

写真4-8-5　知のハニカム内観

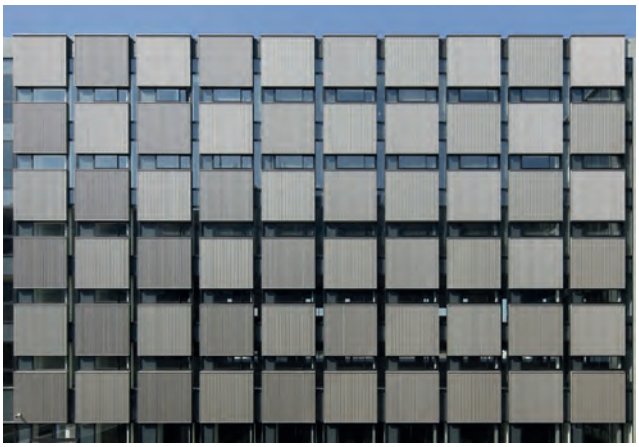


写真4-8-6　教員研究室の北面、南面の外装

### 杜のユラギ　＜木漏れ日に抱かれた学びの場＞

公園側に配置した大講義室の北面、東面、南面の外装である。3種類の幅の異なる縦長PC板と縦連窓により「杜」の木立をイメージしている。PC板は方位に呼応した菱形の形状とし、直達日射を最小化し、教壇に向かう学生の視線は、木漏れ日のように柔らかな自然の間接光によって、授業への集中と安らぎをもたせた。四角形状のPC板と比べて菱形形状とすることで日射受照量は約15％低減できるようにしている。大講義室の学びの場における開放と集中を杜のゆらぎによる表現として試みている。

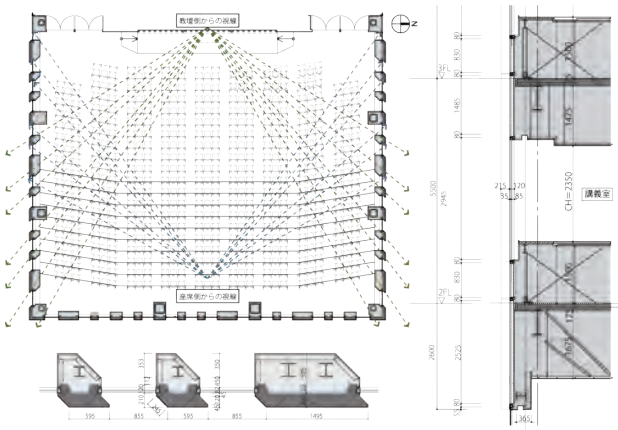


図4-8-8　杜のユラギの平・立・断面図

写真4-8-7　杜のユラギの外壁

平均日射受照量（窓＋床）　単位：kWh/ ㎡

| | |
|---|---|
| 4.6kWh/ ㎡ | 2.6kWh/ ㎡ |
| | … 約42%低減 |

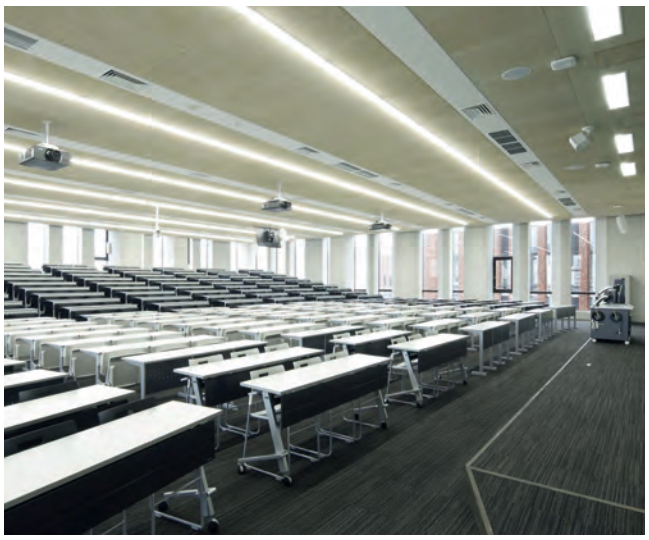
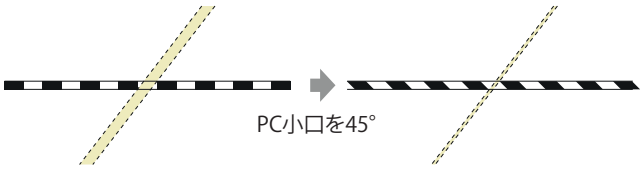


写真4-8-8　杜のユラギ内観

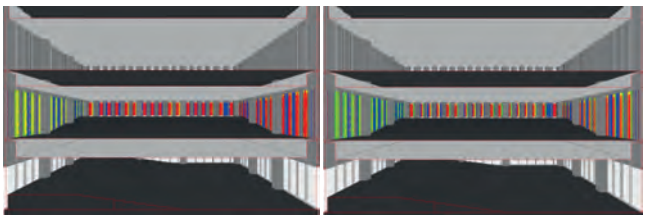
菱形PCによる日射遮蔽




開口率を変えることなく、PC板の小口を斜めとすることで、明るさ感を確保しながら、北面、東面、南面において直接日射を15％低減。

日射受照量の比較検討

**平型PC（45°）**　**菱形PC（45°）**



平均日射受照量（窓＋床）　単位：kWh/㎡

| | |
|---|---|
| 5.4kWh/ ㎡ | 4.5kWh/ ㎡ |
| | … 約15%低減 |

図4-8-9　杜のユラギの仕組と効果

## 4.8.3　その他の配慮

OICでは、その他にも、建物の設備であるエレベーターシャフト（写真4-8-10）や、雨水を直接利用する池など、環境配慮のための多様な工夫を行っている。

写真4-8-9　配水利用の池と屋外活動が可能な楕円のベンチ

写真4-8-10　緑のキャナルに配置したEVシャフト

# 4.9　リザーブスペースについて

キャンパス南半分に配置されている「リザーブスペース」は、将来活用予定地であり、一定のまとまった規模の新築計画を必要とする明確なアカデミックプランが新たに位置付けられる時点まで、空地として保存されることを当面の目的とする土地である。

リザーブスペースの規模はA棟と同様のシステムで増築していくことを想定した場合、学びの軸沿いのコンコース（3層）と3枚の東西スラブ（9階）、サブコンコースを配置すると考えて、約35,000～45,000㎡の延べ床面積を新規に設けることが可能である。

短期的な計画に基づいてリザーブスペースの一部に低層建築物を建てることは、限られた展開余地を安易に消費することになるため、好ましくない。低層建築物であっても、高層建築物であっても、リザーブスペースにおける恒久的な建物の建設にあっては、中長期的なキャンパス計画を同時に策定し、その中に位置付けることが必要である。

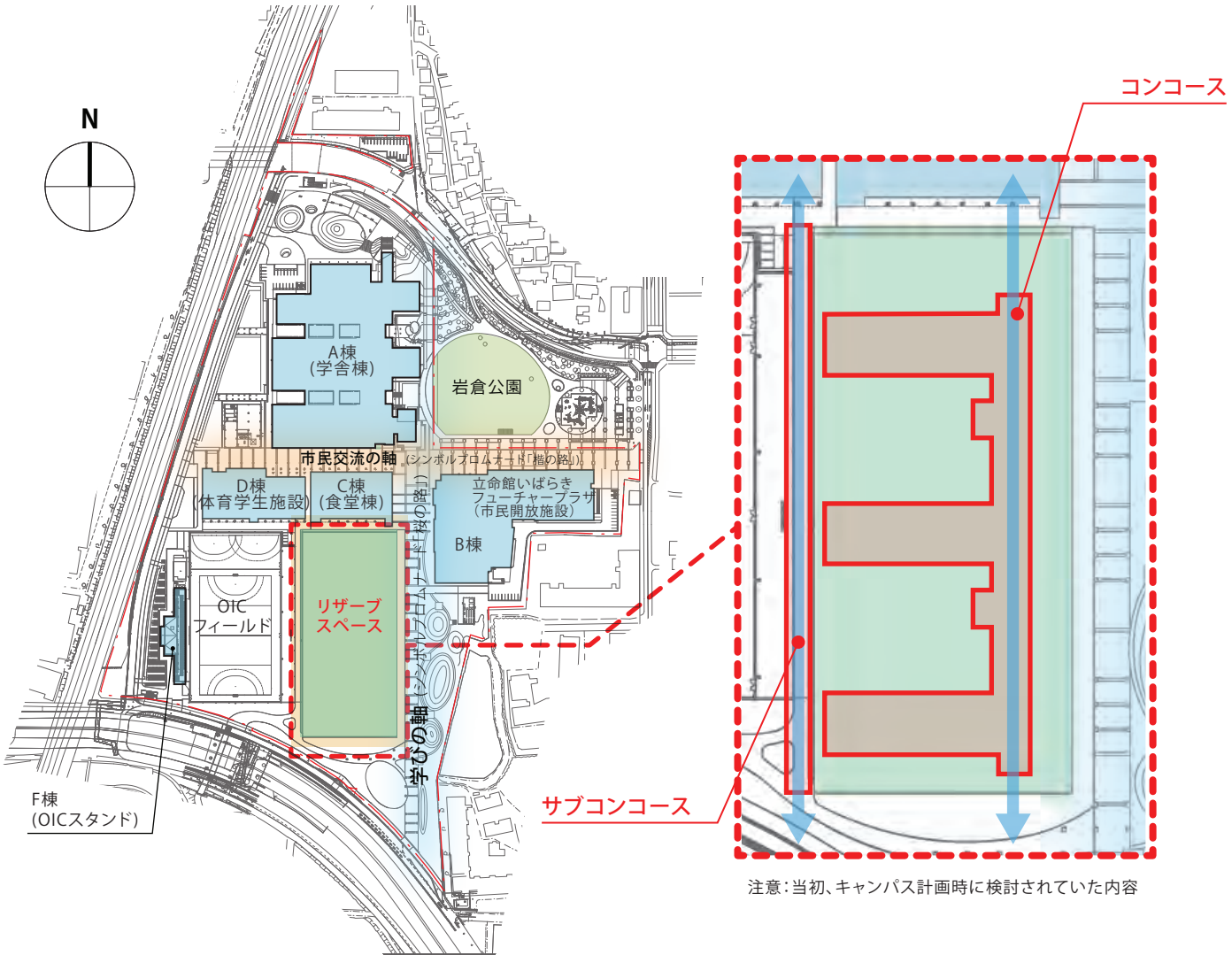



図4-9-1　リザーブスペースの位置と建物配置例（2013年1月17日）

Chapter 5

# 大阪いばらきキャンパスの課題と方策

5.1　OIC開設後の整備状況
5.2　現状と課題
　　5.2.1　施設整備の検討課題
　　5.2.2　アメニティ課題
　　5.2.3　セキュリティについて
5.3　リーディングプロジェクト（重要検討課題）
　　5.3.1　OICにおけるリーディング
　　プロジェクトの役割と設定方針
　　5.3.2　当面のリーディングプロジェクト
5.4　アクションプランの今後の進め方と配慮事項
　　5.4.1　当面のアクションプラン

Chapter5では、2015年度の開設から3年が経過した現在、キャンパスがどのように使われているのか、計画時からの使用状況などを掲載し、これからのキャンパス整備に生かしていくことを目的としている。

# 5.1　OIC開設後の整備状況

## 新たな教学、研究展開などに伴う施設整備

### (1) 総合心理学部開設に伴う施設整備

2016年4月総合心理学部の開設に伴い、開設時にスケルトンの状態であったA棟6階の内装工事を行い、基本施設となる各種実験実習室などを整備した。(写真5-1-1)

### (2) 心理教育相談センター開設に伴う施設整備

C棟南側のリザーブスペース内に期間限定のプレハブ造の建物を建設予定(2018年9月完成予定)である。
(2016年度第2回OIC将来構想検討委員会で了承)

### (3) グローバル教養学部設置ならびにOIC全体の教学条件改善のための施設整備

2019年開設予定のグローバル教養学部(GLA)設置ならびにOIC全体の教学条件改善のために、スケルトンの状態である、A棟5階の内装工事を行い、基本施設となるセミナールーム、ラーニングスタジオなどを整備する予定である。加えて、A棟3階の小教室を100名規模の中教室2室へ改修整備する予定である(2019年3月完了予定)。

### (4) 分林保弘記念国際交流館(仮称)

分林保弘氏(株式会社日本M＆Aセンター代表取締役会長)より受領した寄付を原資として、国際寮機能と国際交流機能を備えた国際交流館を学内に建設することが確認された。3つのキャンパスコンセプト、とりわけ「アジアのゲートウェイ」を体感できる施設として1.2階を国際交流機能、3階以上を寮機能として寄付者の意向を尊重しつつ検討が進められる。なお、建設場所はリザーブスペースとOICフィールドの中間地を想定し、サブコンコースの延長線上に計画する。
(2018年1月17日常任理事会にて議決)

### (5) 保育所

立命館における男女共同参画やダイバーシティ推進の象徴的な取組みとして、ニーズの高い学内保育所の設置についての検討が2017年より開始された。OICにおいては、学内保育所具体化WGでの議論、OIC地域連携室拡大会議、OIC子育て世代へのブレストミーティングなどを通じ、教職員の働きやすい環境整備、安心・安全・快適な保育環境の提供などを追求している。

写真5-1-1　A棟6階実験実習室

## 管理運用面の改善・整備

### (1) コンビニエンスストアの整備（OICカフェテリア）

C棟1階のOICカフェテリアの一画（東側）に食堂の混雑暖和の一環として、生協の食料品専門のコンビニコーナー（OIC Mealshop）を設置した。

写真5-1-2　コンビニエンスストア

### (2) バリアフリー化整備（セミナーハウス宿泊室）

C棟5階の1室（5045号室）におけるシャワー・トイレ・洗面設備などについて車椅子利用者にも配慮したバリアフリー化を実施した。

写真5-1-3　C棟5階 5045号室

### (3) 温熱環境改善（OICアリーナ屋内）

D棟OICアリーナにおける夏場の室内温度上昇の抑制と、熱中症対策のため室内への空調機器の整備および屋根の遮熱塗装と窓の遮熱対策を実施した。

### (4) ガラス面のフィルム施工（コンコース）

夏場の屋内温度上昇を抑えるために、ガラス面にフィルム施工を実施した。

### (5) 鳥衝突防止フィルムの施工（B棟-C棟渡り廊下）

B棟-C棟をつなぐ2階渡り廊下のガラス面に、鳥が衝突しないよう、鳥衝突防止シールを貼付した。

写真5-1-4　OICアリーナ

### (6) 植栽の土壌改良、水はけ改善工事（里山エリア他）

「育てる里山プロジェクト」で移植作業を実施した里山エリアの水はけを改善するため、土壌の改良工事を実施した。キャンパス北の植栽エリアも樹木の成長が芳しくないため、土壌改良を実施予定である。

### (7) 出入口扉のスライドドア化（キャンピングキッチン東側出入口）

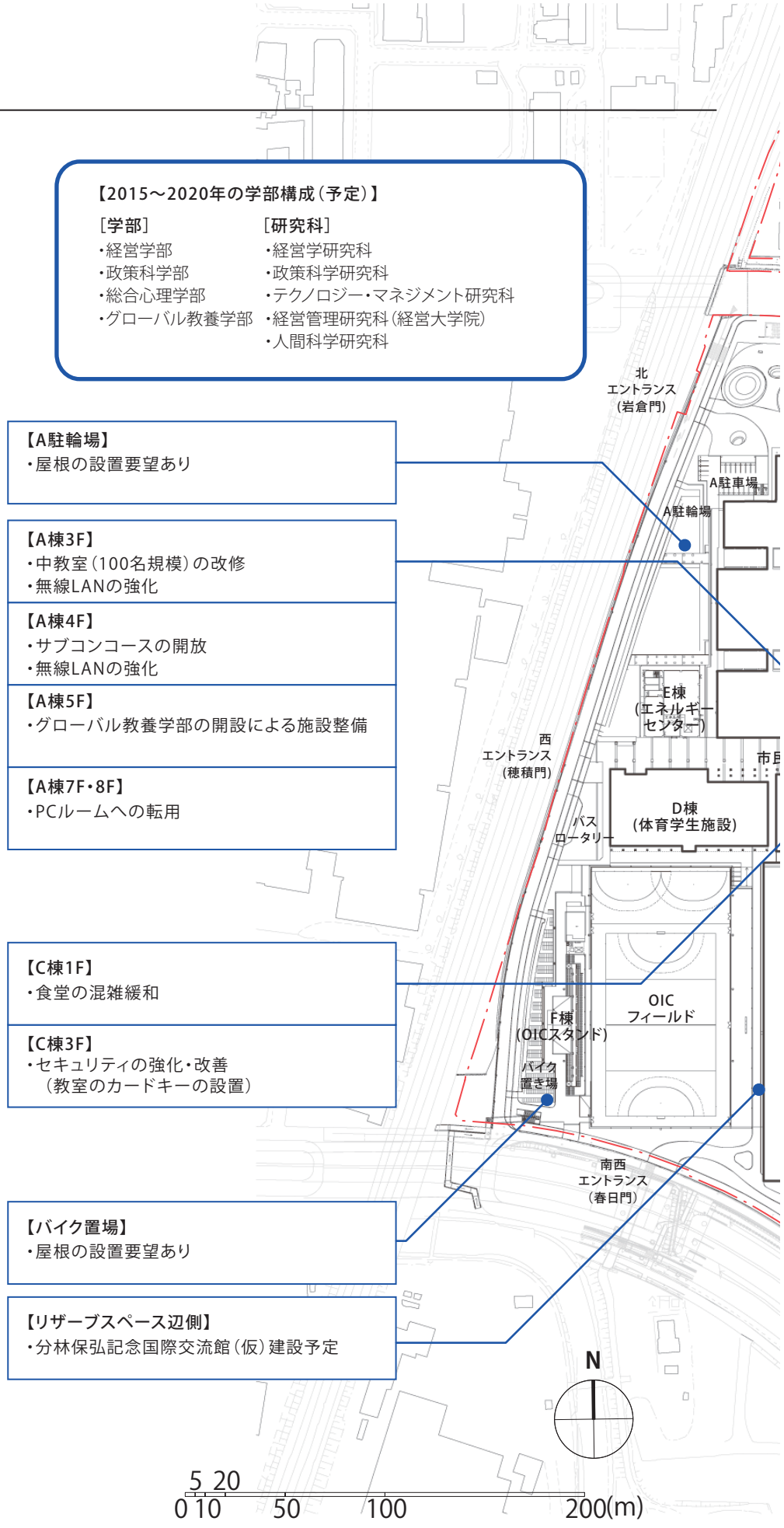
半自動の片開きガラス扉が強風の影響で閉まり切らず、危険であったため、スライドドアへ変更した。

# 5.2　現状と課題

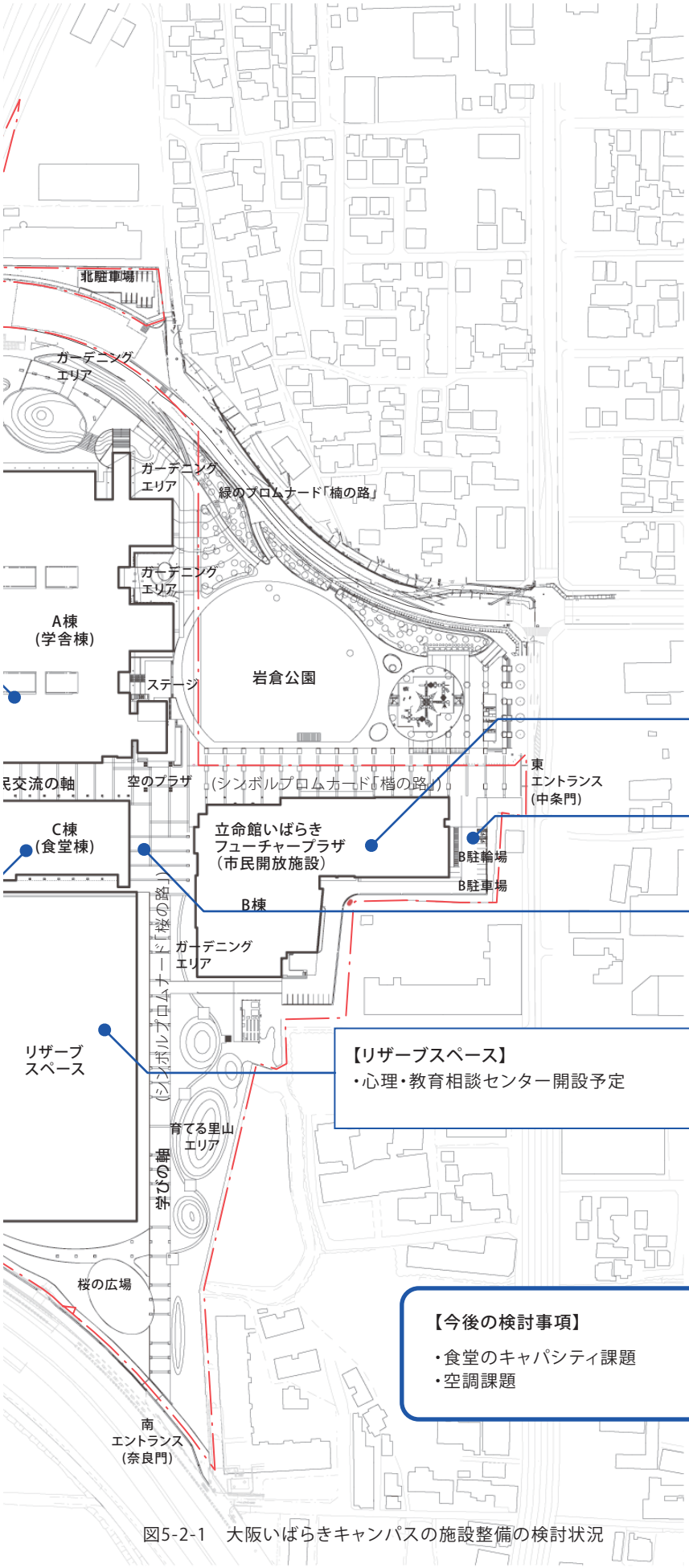
## 5.2.1　施設整備の検討課題

教学・研究の質向上にむけ、全学的な検討が進められているアカデミックプランや各学部・研究科の教学展開、さらには学生の様々な自主活動のサポートなど、大阪いばらきキャンパスの教育・研究・学生生活環境の改善に向けた取り組みを進める。

なお、今後検討すべき課題についてOIC各部局、教職員、学生にヒアリング（2017年11月～2018年1月）を行い、指摘された箇所について右図に一覧として示す。




※方位、縮尺は全キャンパス共通




**【B棟3F】**
・セキュリティの強化・改善
（教室のカードキーの設置）

**【B駐輪場】**
・狭隘化

**【B-C棟　渡り廊下】**
・鳥が窓ガラスに衝突する
（現在シートを施工して効果検証中）

**【リザーブスペース】**
・心理・教育相談センター開設予定

**【今後の検討事項】**
・食堂のキャパシティ課題
・空調課題

図5-2-1　大阪いばらきキャンパスの施設整備の検討状況

## 5.2.2　アメニティ課題

### （1）　キャンパス内の食環境課題

当初、食事用座席数については、生協食堂（OIC Cafeteria）に824席（2015年度在学生数5500人、一席当たり学生数6.6）を配置しスタートした。他キャンパスと比べても遜色のない環境であるが、一斉に昼休みをとる実態から、一時的に長い列ができたり、食事後も退席しない学生が多く、混雑は避けられない状況となった。この問題に対して以下の方策を講じた。

**① 提供者側の出食作業効率化**
**② 屋外ベンチ、テーブルセットの増設**
**③ Cafeteriaのテーブル・椅子セット の増設**
**④ OIC Meal Shop(生協ミニコンビニ)の開店**
**⑤ 野外ランチストリート（4〜6店舗）の開設**
**⑥ 生協職員による席取り防止と食事後の退席の声かけ実施**

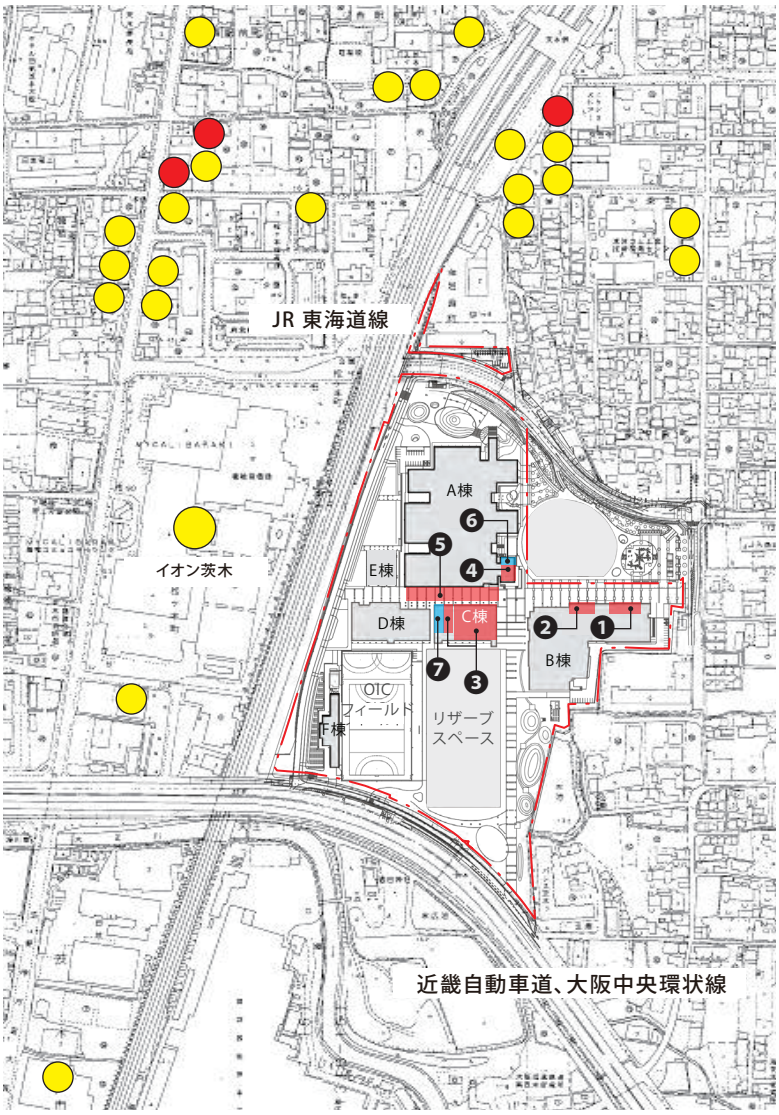
①〜⑥により一定の効果は現れたが、食環境アンケートでは依然として、混雑解消を望む声が根強い（第1回学友会・自治会との懇談会、2015/7/13）。新研究科、新学部の設置に伴う在学生の増加も見込まれるため、引き続き、混雑緩和の対策を検討する必要がある。また同時にキャンピングキッチン等のテナントに対しても、学生の利用しやすいメニューへの改善を要請していく必要がある。

### （2）　キャンパス周辺の食環境について

茨木松ケ本線のJRアンダーパス(OIC北側~イオン北側)が2018年3月に開通した。これによって、イオン茨木が展開する食サービスを享受することが見込まれる。

また、今後は、JR茨木駅東側の再整備や、キャンパス南の近畿道高架下(NEXCO西日本)の整備など、未定ではあるが可能性が残されているプロジェクトもある。

食環境の課題解決に際しては、単にキャンパス内の充実化に限らず、周辺の食環境の状況を見極めながら対応していくことも重要である。




凡例

- ：食機能
  - ❶ GARDEN TERRACE LION（レストラン）
  - ❷ スターバックスコーヒー（カフェテリア）
  - ❸ OIC Cafeteria（生協食堂）
  - ❹ Camping Kitchen（喫茶・軽食）
  - ❺ ランチストリート（キッチンカー等）
- ：ショップ
  - ❻ セブンイレブン（コンビニエンスストア）
  - ❼ OIC Shop（生協総合サービス）
- カフェテリア
- 大衆食堂

図5-2-2　キャンパス内とその周辺の食環境分布

## (3)　その他のアメニティ課題

### ・トイレ環境

ペーパータオルや空気乾燥機など、公共施設にも一般的に整備されているものに対しての要望があり、今後の課題である。

また、セミナーハウスのシングルルーム、ツインルームのトイレについては、温水洗浄便座に交換予定である。

### ・情報環境

ノートPCや、デスクトップPCの設置台数を増やすことの要望が多い。学生が個人のデバイスを持参する傾向もあることから、情報環境整備は、今後を見据えての検討・調整が必要になると考えられる。

### ・空調環境

各部局や教職員へのヒアリングの結果、空調環境（夏の暑さ、冬の寒さ）に関する要望が極めて多い。OICは環境負荷を低減するエコキャンパスを目指しており、パッシブデザインを積極的に施しているが、快適な熱環境を維持する必要がある。

遮熱フィルムの施工や機器能力の改善といったハード面だけではなく、期間外の柔軟な運用を含めて、適切な授業環境・学習環境の保持のため引き続き調整を要する。

## 5.2.3　セキュリティについて

### 施設内部へのアクセス

OICは、キャンパスの敷地境界部分に既存キャンパスのような塀や門を設置せず、学生・教職員だけでなく一般市民までもが校内を自由に行き来することができる開かれたキャンパスとして開設された。

キャンパスのメイン棟であるA棟には、いわゆる学舎棟として1階には教学部、学生部を中心とした行政機能、2～4階には講義室やセミナールームなどの教室機能、7～9階には教員研究室や院生共同研究室等を配置しており、様々な用途が1棟に盛り込まれた複合施設となっている。またC棟も、1階が生協施設、2・3階は教室機能、4階は院生ラウンジ、5階はセミナーハウスが配置され、さらに、茨木市の支援により設立されたB棟には、全国でも初となるオンキャンパスの茨木商工会議所、大中小3つのホールとライブラリー、レストラン、コーヒーショップなど、市民に開かれた地域社会連携のシンボルとなる機能が配置されている。

このように、他キャンパスにはない環境特性をもつOICにおいて、セキュリティをどのように維持するかは、開設準備段階から管理運営面での焦点となっていた。大阪いばらきキャンパス開設準備委員会のもとに置かれたOIC管理運営部会では、セキュリティを確保するラインは敷地境界線ではなく各建物の扉であるとし、扉ごとの施錠・解錠時間の設定、電子錠の扉については教職員証・学生証の認証識別による開閉権限の設定により建物内への進入を制限することとした。
（2016年7月26日OIC将来構想検討委員会
「大阪いばらきキャンパス（OIC）開設1年目の総括」より抜粋）

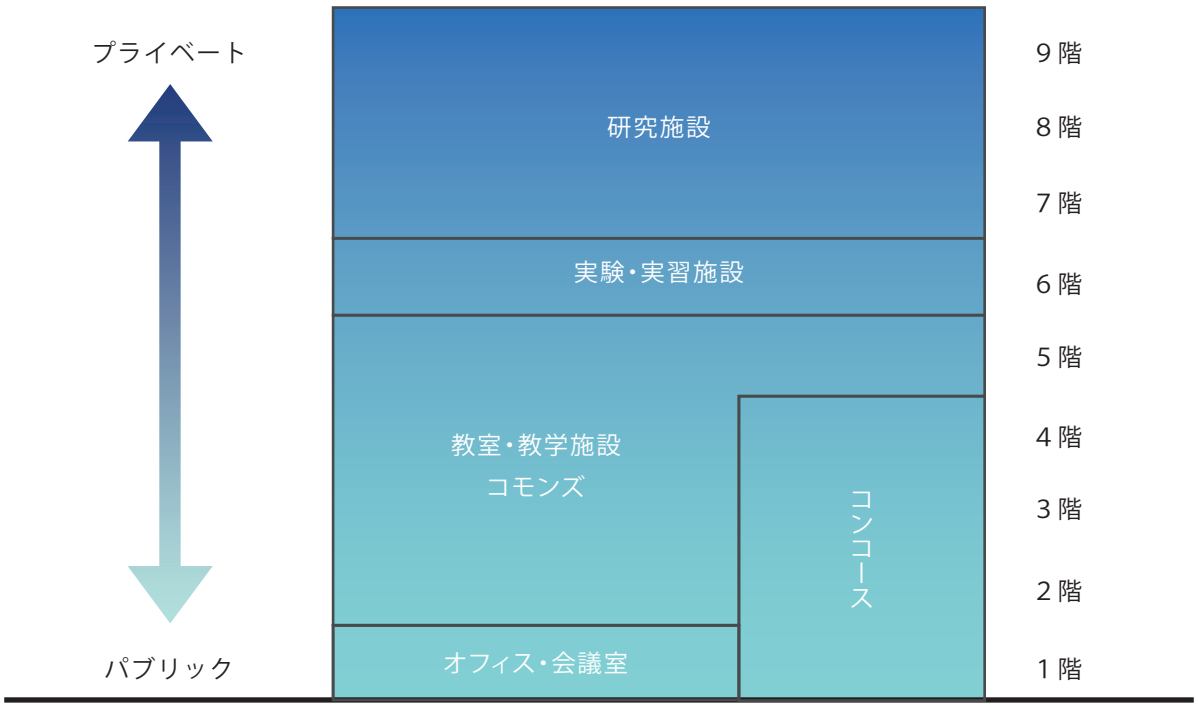



図5-2-5　A棟のセキュリティの立体的な分割

## 現状と今後について

開設以前は、特殊なキャンパス環境からセキュリティ維持の困難さが想像され、他キャンパスとは性質を異にするOIC特有のトラブルが危惧されていた。しかしながら、開設後キャンパス環境に起因するような特殊なあるいは重大なトラブルは幸いにも発生していない。

その要因の一つとして考えられるのは、茨木市が整備した岩倉公園の存在である。岩倉公園には常に学生や地域住民とくに子供達の往来があり、無意識のうちに人目を意識しながら行動をする環境となっており、結果としてマナーの向上やトラブルの回避に繋がっているのではないかと推察される。

ただし、一方で、重大事件・事故にはつながっていないものの、キャンパス周辺で路上駐車を繰り返す不審車輌や、再三の警告を無視し構内および周辺路上で禁止されているスケートボードをやり続ける少年など、警察に通報せざるを得ないケースも見られるため、茨木市や茨木署との連携をとりながらの対応が求められている。

キャンパスセキュリティについては、今後も試行錯誤を続けながら問題解決を図らなければならないが、セキュリティラインをすべて物理的境界に委ねるのではなく、人間の意識・環視も含めたクローズとオープンの中間、いわゆる「クロオープン」のような関係を維持することも重要と考えられる。

（2016年7月26日OIC将来構想検討委員会
「大阪いばらきキャンパス（OIC）開設1年目の総括」より一部抜粋）

5.3　リーディングプロジェクト（重要検討課題）
5.3.1　OICにおけるリーディングプロジェクトの役割と設定方針
5.3.2　当面のリーディングプロジェクト

# 5.3　リーディングプロジェクト（重要検討課題）

## 5.3.1　OICにおけるリーディングプロジェクトの役割と設定方針

OICは建設当初から「学びの軸」と「市民交流の軸」という二つの軸を中心とする明快な骨格を持って計画されている。そのため、OICのマスタープランの役割は、将来にわたってこの基本骨格を活かし、キャンパスのコンセプトを実現していけるような、建物や緑地の管理運営と更新の指針を与えることにある。この点が、既存のキャンパスを中長期的視点で整序化することを目的とする、他の2キャンパス（京都キャンパス、びわこ・くさつキャンパス）とは大きく異なっている 。

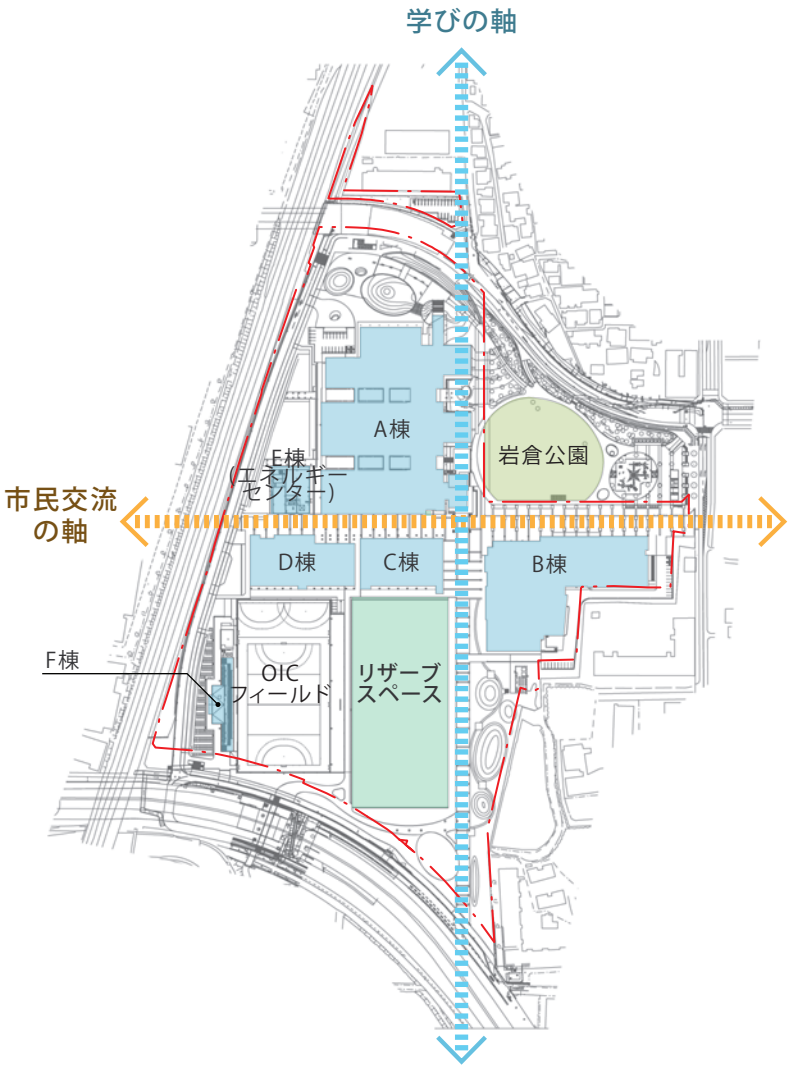



図5-3-1　大阪いばらきキャンパスの二つの軸

## 5.3.2　当面のリーディングプロジェクト

### （1）　分林保弘記念国際交流館（仮称）とサブコンコースの延長

現在、OICでは以下の施設の整備が検討、あるいは予定されている。

**・保育所**
**・Beyond Borders Plaza**
**・心理・教育相談センター**
**・分林保弘記念国際交流館（仮称）**

これらの施設については、「アジアのゲートウェイ」「地域・社会連携」というキャンパスコンセプトとも関連が深く、既存の諸施設や周辺環境との関係、あるいは将来的なキャンパス整備の展開可能性を考慮して、相互に関連づけながら俯瞰的な視点で計画を行う必要がある。このため、「国際交流ゾーンとサブコンコースの延長」をOICにおけるリーディングプロジェクトとして位置付ける。

# 5.4　アクションプランの今後の進め方と配慮事項

## 5.4.1　当面のアクションプラン

### (1)　A棟5階の施設整備

グローバル教養学部(以下、GLA)の基本構想(2017年1月25日常任理事会)においてOIC5階スペースに展開することが確認されている諸施設についてGLA設置委員会のもとに置かれた施設設備検討WGにおいて3度にわたり議論がなされ、その方向性が示された。

基本的な考え方としては、既存施設を活用しつつGLA教学展開も見据えた機能を5階に整備することであるが、これまでの施設設備検討の考え方を踏襲して5階をGLAが専有するのではなく、「アジアのゲートウェイ」等のOICの教学コンセプトの実現や国際化の一層の推進、OIC教学全体の向上に資する施設として整備することとした。なお、5階整備においてはOICのゾーニングの基本的な考えを変更せずにGLA教学の実現に適用することが将来構想検討員会で確認された。

①学生の主動線である南北コリドーに、「コモンズ」エリアを配置し、コモンズを中心とした環境づくりとする。

②「教室」エリアは、南北ウイングを中心に配置する。ゼミ教室を100名教室に転用するため、ゼミ教室が不足することになるので、5階に新たに設置する。また、アクティブ・ラーニングに対応したラーニング・スタジオの需要は年々増加しているので、この点を踏まえ、アクティブ・ラーニング系教室を配置する。GLAの教育手法や学びのスタイル、OIC全体の将来的な学びの変化、アクティブ・ラーニングへの対応なども踏まえて具体化する。

③「教員研究室・学習支援」エリアは、AC事務室とCo-Lab.との接続の利便性を勘案し、中ウイングに配置する。併せて、GLAの教学上必要な学習支援機能も近接して配置する。

なお、先述したとおり、研究室は7階以上の研究エリアでのゾーニングが基本であるが、GLA教学上の特徴に鑑みて、ANU・RUの教員同士の教学・研究におけるより密な協働を行う「空間的まとまり」を追求するため、5階のスペースを活用することとした。

(2017年10月4日常任理事会「グローバル教養学部設置ならびにOIC全体の教学条件改善のための施設整備について」より抜粋)

Chapter 6

# キャンパス整備における ファシリティマネジメント

6.1　ファシリティマネジメントの必要性
6.1.1　ファシリティマネジメントとは
6.1.2　運用の効率化を図る推進体制

6.2　既存施設の考え方
6.2.1　既存施設の改修・増改築の対策
6.2.2　施設データの管理・更新
6.2.3　空間の質の向上に向けたライフサイクルコストの検討

6.3　緑地管理
6.3.1　都市景観のストックとしての緑地管理
6.3.2　市民参加の緑地管理

6.4　キャンパス整備の推進体制
6.4.1　施設整備の推進体制
6.4.2　施設や環境を最大限に活かすための管理・運営体制

良好なキャンパス環境の創造に向け、継続的にキャンパス整備を進めていくには、経営戦略や管理・運営面との調整が不可欠であり、また、学園全体のトータルファシリティマネジメントの検討も必須である。関連各部局との協力のもと、フレームワークプランを踏まえながら検討を進めることが重要であり、具体的なアクションプランに繋げていくための必要予算の算出や評価基準の設定とのすりあわせなども必要となってくる。

6.1　ファシリティマネジメントの必要性
6.1.1　ファシリティマネジメントとは
6.1.2　運用の効率化を図る推進体制

# 6.1　ファシリティマネジメントの必要性

立命館大学が目指す良質なキャンパス環境の創造に向け、持続的なキャンパス整備を進めていくためには、そのための財源確保や実行のための経営戦略、施設整備後のファシリティマネジメントが重要である。学園全体のファシリティマネジメント（FM）の方針・体制について検討を重ね、継続的な整備・保全を図ることが求められる。

財務・品質・供給の目標を設定し、PDCAサイクルをまわすことで全学的な体制のもと、目標の達成と更なる改善を目指すことが可能となる。

## 6.1.1　ファシリティマネジメントとは

ファシリティマネジメントとして整理すべき一般的な項目を右記する。これらの各項目について、既存の考え方を整理し、各方針を関連づけた計画が必要となる。ファシリティマネジメントを運用するためには、企画・管理・運営の主管が異なる既存部局の横断的な連携強化により、運用の効率化を図り、さらなる質の向上を目指すことが重要である。

## 6.1.2　運用の効率化を図る推進体制

キャンパス整備・施設保全、キャンパス管理、キャンパス計画においては、各専門家を交えたフィジビリティスタディが必要となる。そのため、次のことを行っていく推進体制が必要となる。

・FMの計画立案
・各部局担当からの情報収集と現状評価・施設管理のFM推進体制・情報の共有化
・適切な運営管理：本学においては、キャンパス整備は財務部管財課、キャンパス管理・施設保全は総務部総務課・キャンパス事務課・地域連携課が担っている。

また、キャンパス整備事業を計画的に推進（キャンパス計画）するための専門的検討機関として、キャンパス計画室が設置され、事務局は総合企画部と財務部が担っている。
（2015年4月現在）

### ファシリティマネジメントの一般的な配慮項目

**■財務管理**
（資金調達、運用）
・各段階における施設整備関係経費の確保（企画検討、施設整備、屋外環境整備、運営（光熱水費）、保守点検、維持管理（清掃・備品管理）、修繕・改修、人件費など）
・財政構造の把握と目的に応じた財源の活用（補助金、自己収入、外部資金）
・限られた財源の適切な分配と優先度
・執行状況の把握

**■品質管理**
（企画、維持・管理・修繕計画）
・企画から運営、維持管理までの検討組織体制の確立
・修繕依頼の流れと維持管理主体の明確化
・修繕計画作成（短期・中期・長期）
・保守点検、維持管理
・進捗の共有
・品質管理の均一化のための規定設定

**■供給管理**
（施設整備計画、面積の分配）
・施設概要の管理（構造、用途、築年数、面積等）
・利用状況の把握（利用目的、管理者、利用者）・施設整備の優先度の明確化
・必要な面積を適切に分配し、施設の有効活用につなげる

6.2　既存施設の考え方
6.2.1　既存施設の改修・増改築の対策
6.2.2　施設データの管理・更新
6.2.3　空間の質の向上に向けたライフサイクルコストの検討

# 6.2　既存施設の考え方

## 6.2.1　既存施設の改修・増改築の対策

「立命館大学キャンパス創造の基本構想」（2011.10.12常任理事会）の到達点を踏まえながら、アカデミックプラン・経営戦略・建築計画の専門的検討などに基づいて、キャンパス整備方針・内容の検討を進めながら最適なフレームワークプランとしてのキャンパスマスタープランを策定する。

フレームワークプランを軸としたキャンパスマスタープランに沿って、短期的なアクションプランを検討し、立命館大学における良好なキャンパス環境整備を実現していくものとする。

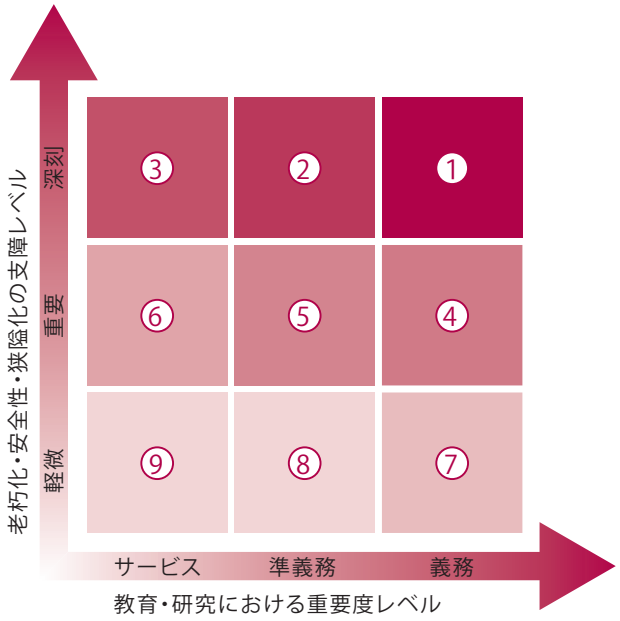



図 6-2-1　施設整備における優先順位の設定イメージ

## 6.2.2　施設データの管理・更新

施設の維持・管理・運営においては、既存データの管理や活用策の強化が求められる。OICではCAD化された図面や各種建築関連データがストックとして残されており、今後、建て替え計画や改修などを検討するために、既存資料の再整理や共有情報の活用が求められる。

## 6.2.3　空間の質の向上に向けたライフサイクルコストの検討

建物は竣工後から解体廃棄されるまでの期間に建設費よりも多額の費用がかかるため、完成してからの維持・保全が重要である。建物やオープンスペースを含めた施設全体の運営や修繕・更新を、計画性をもって行うことによって、発生するライフサイクルコスト（LCC）や建物の寿命は大きく異なる。

建物をより長く活用するためには、適切なファシリティマネジメントが重要となる。

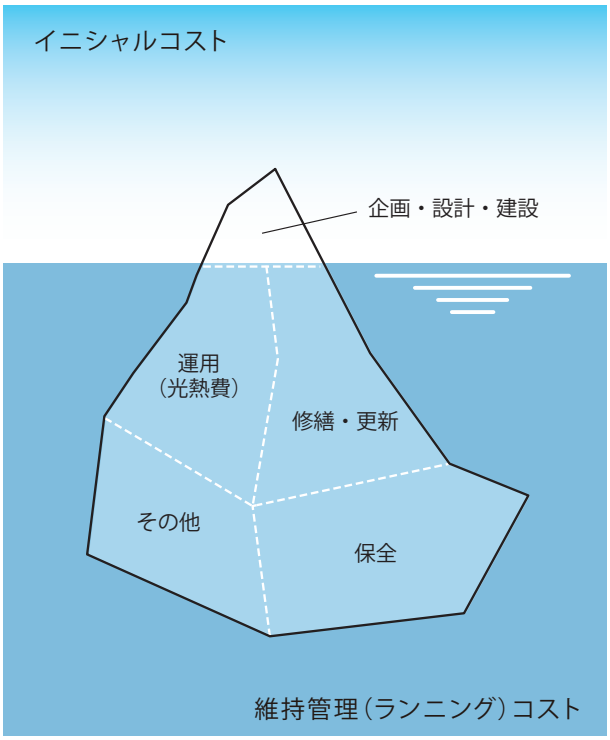



図 6-2-2　氷山に例えたライフサイクルコストのイメージ

6.3　緑地管理
6.3.1　都市景観のストックとしての緑地管理
6.3.2　市民参加の緑地管理

# 6.3　緑地管理

## 6.3.1 都市景観のストックとしての緑地管理

OICの緑地は、単に大学キャンパスのアメニティとしてだけでなく、岩倉公園や周辺市街地と連続した都市景観の一部を担う緑地ストックとしての価値を持っている。また、OICの緑地の質向上によって都市景観の価値が向上することは、大学キャンパスのイメージ向上に直接的に寄与するものである。

したがってOICの緑地管理においては、可能な限り質の高い管理を目指さなくてはならない。4.6.2の「（５）長期的な緑地整備計画と管理」にも述べているように、OICにおいても、樹木の生育状況の評価や、キャンパス内の微気候を含む生活空間の質の評価を継続的に行う必要がある。その結果を踏まえて20～30年後のキャンパス緑地のヴィジョンを改めて確認した上で、それを実現するための整備と管理の計画を立てることが望ましい。

写真6-3-1　育てる里山プロジェクト

写真6-3-2　ガーデニングプロジェクト

## 6.3.2　市民参加の緑地管理

OICでは、開設以前の計画段階からの取り組みとして「育てる里山」「ガーデニング」の二つのプロジェクトを展開し、市民参加による緑地の創造と管理を継続している。

これらはOICの特徴としても重要な活動であり、今後とも継続していくことが望まれる。また、大学キャンパス管理の一環として、これらに支援を行っていく必要がある。

なお、これらのプロジェクトはキャンパス開設前の助走期間中から開始している。大学関係者だけでなく市民や行政による参画や協力を得て、各プロジェクトの礎が固められてきた。これらを通して、キャンパスに対する市民の期待も早い段階から高まり、キャンパス開設を心待ちにしていたメンバーが、OICオープンとともに、活発な活動を展開してきたことも、記憶すべきことである。

### 育てる里山プロジェクト

茨木市千提寺の高速道路整備対象地であった山地から実生（種から芽生えた若木）を採取し、キャンパス内に移植することで、数十年後に里山を再現することを目指した取り組みである。月2回の活動で既に2000本を越える実生の移植を完了した。同様の目的をもつ既存の里山保全活動市民団体の複数からの参加を得て、2018年3月現在の会員数は80名に達している。

### ガーデニングプロジェクト

キャンパス開設に先立ち、立命館大学関係者を指導者として市民と学生によるガーデニングクラブを立ち上げ、月2回の活動を継続している。キャンパス内に設けた5つのガーデニングエリアにそれぞれテーマを設定し、テーマに応じた四季おりおりの草花を植え育てている。植栽作業だけでなく、鑑賞会も実施し、会員募集も兼ねた一般向けガーデニング講座や、学外のガーデニング施設への見学ツアーによる勉強会も行っている。草花の手入れや多様な活動を通して会員相互の親睦を深めている。2018年3月現在の会員数は250名である。

6.4　キャンパス整備の推進体制
6.4.1　施設整備の推進体制
6.4.2　施設や環境を最大限に活かすための管理・運営体制

# 6.4　キャンパス整備の推進体制

## 6.4.1　施設整備の推進体制

フレームワークプランで示した整備方針をプロジェクト毎にあてはめ実現していくためには、
①管理運営面との調整
②既存施設との調整
③全学課題との調整
などの調整事項において関連する複数の部局を横断した推進体制が必要である。

## 6.4.2　施設や環境を最大限に活かすための管理・運営体制

継続・更新・発展する大学経営を支え、整備されたキャンパスを最大限に活用するためのファシリティマネジメントが必要である。長期的なキャンパスコンセプト実現に向けたキャンパス整備の手順や管理・運営体制、計画・管理・運営の一体的な評価体制の確立が必要である。

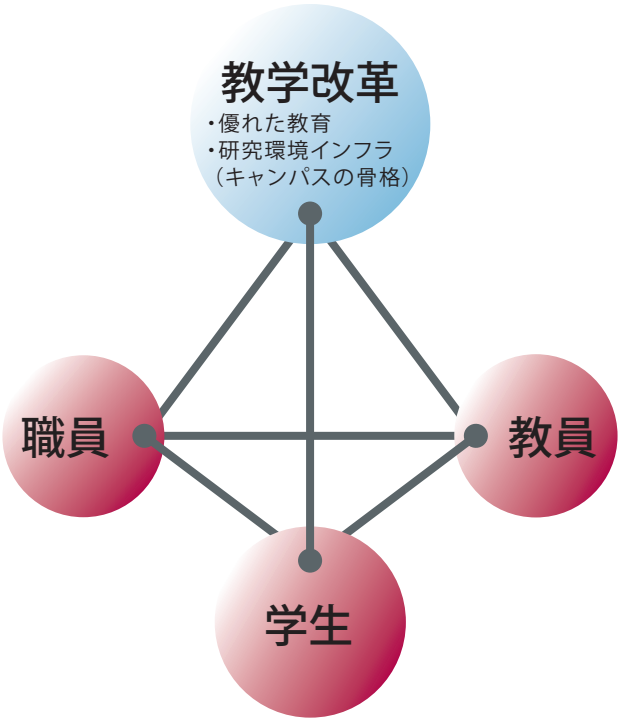



図 6-4　みんなでつくっている推進体制イメージ

# 付録

付.1　立命館憲章
付.2　建学の精神「自由と清新」
付.3　教学理念「平和と民主主義」
付.4　立命館 学園ビジョンR2020
付.5　立命館環境行動指針
付.6　立命館スポーツ宣言
付.7　OICの開設以後の受賞歴
付.8　会議記録
付.9　検討組織名簿

## 付.1　立命館憲章

# 立命館憲章
## THE RITSUMEIKAN CHARTER

立命館は、西園寺公望を学祖とし、1900年、中川小十郎によって京都法政学校として創設された。「立命」の名は、『孟子』の「尽心章句」に由来し、立命館は「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」を意味する。

立命館は、建学の精神を「自由と清新」とし、第２次世界大戦後、戦争の痛苦の体験を踏まえて、教学理念を「平和と民主主義」とした。

立命館は、時代と社会に真摯に向き合い、自主性を貫き、幾多の困難を乗り越えながら、広く内外の協力と支援を得て私立総合学園への道を歩んできた。

立命館は、アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立する。

立命館は、教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。

立命館は、学園運営にあたって、私立の学園であることの特性を活かし、自主、民主、公正、公開、非暴力の原則を貫き、教職員と学生の参加、校友と父母の協力のもとに、社会連携を強め、学園の発展に努める。

立命館は、人類の未来を切り拓くために、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明に邁進する。その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める。

立命館は、この憲章の本旨を踏まえ、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。

2006年7月21日　学校法人 立命館

## 付.2　建学の精神「自由と清新」

立命館学園は、2000年に創始130年、学園創立100周年を迎えた、日本の私立総合学園のなかでも、歴史と伝統をもつ学園のひとつです。立命館学園は、現在、立命館大学、立命館アジア太平洋大学の2つの大学と、立命館小学校、立命館守山中学校・高等学校、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校および立命館慶祥中学校・高等学校の5つの附属校をもつ総合学園です。

立命館の歴史は、近代日本の代表的な政治家で、国際人であった西園寺公望が、1869（明治2）年、20歳の若き日に、京都御苑の邸内に私塾「立命館」を開設したことに始まります。その翌年、学生たちの高談放論を危険と見なした時の太政官留守官の差留命令により立命館は閉校を命じられますが、西園寺の秘書を務めたこともある中川小十郎が、その精神を受け継いで、1900年、勤労者のための夜学校「京都法政学校」を設立しました。これが学園としての立命館の始まりです。その後、1913年、京都法政学校は、西園寺の承諾を得て、「立命館」の名称を継承し、今日に至っています。

中川小十郎は、西園寺の「自由主義と国際主義」の精神を受け継ぎ、「自由にして清新」な学府、つまり自由にして進取の気風に富んだ学園の創造をめざしました。この精神は、立命館学園の建学の精神として、今日まで受け継がれ、学園に集う者の心に息づいています。

今日、立命館学園は、わが国でも最も積極的に大学改革、学園創造をすすめる学園として社会の高い評価を受けています。このような本学園の先進性、創造性は、まさに「自由と清新」という建学の精神に根ざすものにほかなりません。

## 付.3　教学理念「平和と民主主義」

戦後、立命館学園は、末川博を総長に迎え、第二次世界大戦と十五年戦争に対する深い反省に立って、憲法と教育基本法に基づく「平和と民主主義」を教学理念として掲げました。そして、建学の精神と教学理念を、実際の教育や研究に生かすために様々な取り組みを行ってきました。

1960年代には、それまでの法学部、経済学部、文学部、理工学部に加えて、1962年には経営学部を、1965年には産業社会学部をそれぞれ開設しました。

1987年、理工学部に情報工学科を増設し、1988年には西日本で最初の国際関係学部を設置しました。さらに1994年、滋賀県草津市に「びわこ・くさつキャンパス(BKC)」を開設、理工学部を拡充移転し、同時に衣笠キャンパスには、政策科学部を設置しました。1998年には経済、経営両学部がBKCに移転し、理工学部と共同した「文理融合キャンパス」を目指す、BKC 新展開が進められ、2000年4月には、立命館慶祥中学校・2003年4月には、立命館宇治中学校が開校し一貫教育のさらなる充実がはかられました。また、創立100周年を迎えた2000年に、「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念とした立命館アジア太平洋大学(APU)が開学、2004年にはBKCに情報理工学部を設置、2005年にはテクノロジー・マネジメント研究科を設置しました。2006年に開設した朱雀キャンパスには経営大学院を、2007年には公務研究科(公共政策大学院)を設置。さらに衣笠キャンパスに映像学部を、また立命館守山中学校を開校するなど、学園は「自由と清新」の建学精神、「平和と民主主義」の教学理念の上に立ち、それを具体的に活かしつつ、高等教育機関として今日の新しい社会の要請に応える努力を、先進的、創造的に積み重ねています。

## 付.4　立命館 学園ビジョンR2020

私たちは、立命館憲章の精神に則り、2020年における立命館の学園像
として「学園ビジョンR2020」を掲げます。

# Creating a Future Beyond Borders

# 自分を超える、未来をつくる。

人類と地球の、持続可能で平和な未来をつくるために。
私たちは、私たち自身の、組織の、地域や国の、制度の、さまざまな
“Border”を超え、
その力を発揮し、
未来に貢献するスピリットあふれる学園になることをめざします。

## 自分を超える

「自分」とは、一人ひとりの個であり、個が所属するさまざまな集まりでもあります。
立命館学園での学びを通して、互いの価値を認め合いながら、
それらが抱える境界や限界など既存の枠を超えて踏みだすことで
私たちの可能性をひろげていきます。

## 未来をつくる

私たちは、多様なコミュニティをつくり、つながり、新しい価値を創造しながら、
一人ひとりが自らの未来をつくりだすとともに、
一人ひとりが未来の確かな力となる学園をつくります。

# 学園ビジョンを支える３つの柱

## 多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開

立命館学園は、知識の伝達という学びのスタイルにとらわれず、学習者がより主体的に学び・成長することのできる場になるために、年齢、分野、国籍をはじめとする様々なBorder を超えて、ともに高めあうことのできる学習者中心のコミュニティづくりを進めます。立命館学園は、ここで学ぶ人たちが自らの力で課題を見い出し、その解決方法を考え、それを社会の様々な人たちとともに語らい・実行する人になることを、新しい教育の目標とし、その実現をめざします。

## 人類・自然・社会に貢献する立命館らしい研究大学への挑戦

立命館学園は、分野、組織、年齢、時間、国境といった研究を取り巻く Border を超え、学内外を問わず研究に携わる様々な人たちが学内外から集い、互いを高めあいながら、研究の実を育むことのできる学園づくりを進めます。このために、一人ひとりの教員が自らの研究に対し常に前向きに取り組むマインドを持つとともに、若手研究者が研究力を大きく伸ばすことのできる学園となることをめざします。立命館学園は、ここで得られた成果を国内外を問わず広く発信するとともに積極的に社会に役立てていきます。

## 学ぶことの喜びを実感できる学園づくり

立命館学園は、年齢、性別、国籍、分野など様々なBorder を超え、多くの人々が集い、ともに学ぶことの喜びを実感できる学園づくりを進めます。ここに集う人たちは、地域や世界とのつながりを知り、人類・自然とのかかわりを感じながら自らの成長と社会における役割を認識します。このような立命館学園をここに集う人たちがともにつくり上げていくことをめざします。

## 付.4-1　基本計画

### 1. 国際社会と地域に貢献する開かれた学園へ

「Creating a Future Beyond Borders 自分を越える、未来をつくる。」をめざし、以下の取り組みを進めます。

(1) アジア太平洋地域に位置する学園として、グローバル化する社会のなかで、世界とつながり、他者と共生し、平和な未来の創造に貢献する特色ある教育、研究、学園をめざします。
(2) 大学・学校・学部・研究科の質向上とともに、総合学園として未来の課題に応える新たな教育・研究領域の創造を進めます。
(3) 国際通用性のある教育課程を通じた学びの中で、未来社会の主人公を育てる次代創造の場に相応しい学園をめざします。
(4) 学内外を問わず研究に携わる様々な人たちが集い、互いを高めあいながら、教育・研究の実を育むことのできる学園をめざします。
(5) 一人ひとりの構成員の真摯な努力が豊かな学園づくりの大河となることをめざします。
(6) 一人ひとりが主人公となる、民主主義と平和の構築に貢献する学園をつくりだします。
(7) 国境を超えて多くの若人から選ばれる学園をめざします。
(8) 学内の諸機関との連携および立命館の海外オフィスを活用して国際産学官連携を進め、途上国およびその周辺地域の発展に貢献するとともに国際社会にその成果を発信します。

### 2. 教育 －学びのコミュニティと学習者中心の教育－

グローバル化する社会の期待に応え、社会を拓く人間の育成をめざして、以下の取り組みを進めます。

(1) グローバル化する社会で、国境・言語など様々な“Border”を超え、他者を理解しつつ、多様な個をまとめ、自ら行動し、現代社会・国際社会の状況を切り拓くことができる人間を育成します。
(2) 確かな学力をもとに、高い倫理性をもって、個性豊かに世界で活躍できる人間を育成します。
(3) 正課・課外、国内・国外といった“Border”を超え学びあう多様な学びのコミュニティを形成し、学習者中心の教育を進めます。
(4) 集団的な学びへの支援と、一人ひとりの個の視点からの支援を組み合わせた包括的な学習者支援を実現します。
(5) 多面的アセスメントなどによる総合的な実態把握に基づいた学びと成長への支援を行います。
(6) 時代の要請と社会的期待に応える大学院を創造します。
(7) 立命館のコア人材を育成する小中高大一貫教育の一層の充実と発展をめざします。

### 3. 研究 －特色あふれる「グローバル研究大学」をめざして－

特色あふれる「グローバル研究大学」をめざして、以下の取り組みを進めます。

(1) 立命館らしい特色あふれる研究を推進します。
(2) 研究の国際化を重視したグローバルな展開を推進します。
(3) 知識基盤社会を支える学術研究を通じた人間育成、大学院博士課程の強化を含めた、研究者ライフコースの視点による若手研究者等の育成に努めます。
(4) 自然科学系、人文・社会科学系および融合した領域の研究を推進し、研究成果を広く社会に発信し ます。
(5) 研究者が活き活きと研究に取り組める環境を醸成します。

## 4. 総合学園づくり －教育・研究の質向上を支える学園創造－

教育・研究の質向上を支える学園創造をめざして、以下の取り組みを進めます。

(1) 参加・参画による民主主義的な学園づくりをめざします。
(2) 活き活きと働くことができる学園づくりをめざします。
(3) 社会に貢献し、社会から支持される学園づくりをめざします。
(4) 国内外の社会的連携・ネットワークのさらなる強化をはかります。
(5) 総合学園として立命館大学と立命館アジア太平洋大学、各附属校との連携を一層強化します。
(6) 大学教員・附属校教員・職員の質の向上と体制の充実をめざします。
(7) 全ての大学・学校において学園全体としてのマスタープランに基づくキャンパス創造に取り組みます。

## 5. 教育・研究機関としての立命館の役割 －東日本大震災を受けて－

2011年3月11日に発生した東日本大震災とその後の福島原子力発電所事故は、教育・研究機関としての大学・学校の役割に新たな課題を突きつけています。復興へ向けた社会の要請を受けて、立命館は以下の取り組みを進めます。

(1) 教育・研究機関として人類社会の未来を切りひらく役割と使命を果たすことをあらためて胸に刻みます。そして立命館として、被災地の復興、日本社会の再建に貢献する取り組みを長期にわたって全学をあげて進めます。
(2) 日本社会の復興を担う人間の育成に取り組み、若者が存分に勉学を深める場としての学園づくりを進めます。
(3) 教育・研究機関として、人と人やこころのつながり、人と社会のつながり、人と自然の共存、省エネルギー・親環境社会、災害に強い社会といった震災後の新しい社会の構築に寄与すべく可能な限りの努力を行います。
(4) 災害時における学生・生徒や教職員さらには校友・父母をはじめ学園に関る者の安全・安心の向上に取り組みます。
(5) 地域の一員として、地域社会との連携を強め、災害時の地域社会の安全・安心を向上する役割を担う学園創造を進めます。

## 付.4-2　立命館大学の基本目標

### (1)　学習者が中心となる教育および包括的学習者支援を通じて総合的人間力をもった学生を育成します。

「総合的人間力」を持った学生を育成します。具体的には、1) 他者とともに学び、相互の信頼と共感のなかで、一人ひとりが自己を確立していく、2)社会とのかかわりのなかで活動し、国際社会における多文化共生と社会的な視野をもって判断し行動していくことのできる学生を育成します。全ての学生がこのような人材養成像を踏まえ、一人ひとりの自己実現を達成するため、以下の主要な基本目標を設定します。

①正課・課外の枠を超えた多様な「学びのコミュニティ」を形成します。
②一人ひとりの成長と集団の中での成長を重視した教学展開と支援を進めます。
③“Border”を超えて国内・国外の学生がともに学びあう国際教育の仕組みを構築します。
④多面的なアセスメントなどによる総合的な実態把握を基礎にした支援を進めます。
⑤キャリア形成の視点からの自己形成・成長支援を進めます。
⑥正課・課外の枠を超えた学びを実現するための環境・条件づくりと支援を構築します。

### (2) 特色あふれる「グローバル研究大学」をめざします。

大学における研究の社会的責務を果たすため、国際的な視点で研究に取り組み、その成果を社会に発信するとともに、教育に還元するグローバル研究大学をめざします。このために、以下の基本目標を設定します。

①立命館大学が、国内トップクラスの研究力量を有する大学としての地位を確立するとともに、国際的に高い水準の特色ある研究拠点や研究分野を有する大学として認知されることをめざします。
②常に一段高い研究水準をめざし、研究に意欲的に取り組むような風土づくりや研究活動を支える研究環境の整備を進めます。
③産学官連携活動を通じて、国・地方公共団体や産業界との受託研究・共同研究等を推進し、これらの研究成果を広く社会に還元し、社会に貢献します。

### (3) 教育、研究、学生生活を支えるキャンパスづくりを進めます。

2020年に向けて全ての学部・研究科の教学展開を実現させ、その質向上をはかるとともに、学生生活・アメニティの改善、学生諸活動の施設等の充実、交通アクセス･通学条件の改善につながるものとして大阪茨木キャンパスの開設および既存キャンパスの整備を進めます。

①教育・研究の質向上を支えるキャンパスづくりを進めます。
②学生・院生の課外自主活動を支えるキャンパスづくりと各キャンパスの特色ある施設等の整備を進めます。
③コミュニティスペースの配置を進めます。
④飲食・スポーツ等を含む学生・院生・教職員のアメニティの改善を進めます。
⑤地域との調和・地域への貢献をめざしたキャンパスづくりを進めます。
⑥安全・安心、親環境、地域防災拠点のキャンパスづくりを進めます。

# 付.5　立命館環境行動指針

## 立命館環境行動指針

立命館学園は、立命館憲章において、「人類の未来を切り拓くため、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明」に向けて邁進することを宣言している。

人間を取り巻く環境の維持、新たな循環システムの構築は、まさに私たちが志す「人類の未来を切り拓く」取り組みに他ならない。自然科学のみならず、社会制度・システムの再構築や人間の行動原理の理解と解明など、様々な分野における人材育成と学術研究は、本学園が果たすべき大きな役割の一つであると認識する。

立命館は、学園のビジョン「Creating a Future Beyond Borders 自分を超える、未来をつくる。」に 基づき、学園構成員が、既存の枠を超え学園全体が一丸となり、教育・研究を通じて持続・循環可能な地球環境の「未来をつくる」決意をここに表明する。

### 行動指針

立命館は、「京都議定書」の実行等の社会的責任を果たすとともに、持続可能な社会実現に積極的に貢献するため、温室効果ガス排出量削減を含む環境負荷低減の実現に向け、自主的な削減目標を設定し、学園構成員一人ひとりが主体的に行動する。

1. キャンパスのエネルギー、紙、水の使用量及び廃棄物の排出量を正確に把握し、分析、評価することで、環境負荷の低減ならびにエネルギーコスト削減につなげる。キャンパス整備計画においてはエコキャンパス化を追求する。
2. 小学、中学、高校、大学、大学院それぞれの世代に合わせた環境教育を推進するとともに、児童・生徒・学生・大学院生による取り組みの支援を通じて、様々な分野で地球環境保全、環境負荷低減活動のリーダーとなる人材を育成する。
3. キャンパスを産学連携の技術開発の実験フィールドとして研究活動に活用し、また自らの環境負荷低減に繋げる。
4. 環境教育分野での、自治体・地域社会・NGO・NPO・他大学等との連携を推進する。
5. 情報公開を通じて、学園の環境への取り組みを『見える化』することにより、学園構成員の一人ひとりがその到達点と課題を認識し、継続的に改善に取り組むサイクルを創り上げ、持続的な環境負荷低減の実現を目指す。

2014年11月26日
学校法人立命館

## 立命館学園の環境マネジメントシステム

### 立命館地球環境委員会

委員会 ― 幹事会 ― 事務局

- 環境教育・研究部会
- 環境施設部会
- 環境広報部会
- APU 部会
- 学生部会
- 生徒・児童部会

**委員会の役割**

学園全体の地球環境貢献への取り組みを検討・立案し、その実施を主導する組織。対外的な窓口機能も担う。

**達成期限を設けた各種削減目標値の設定**

エネルギー使用量、温室効果ガス排出量、水使用量、廃棄物等

**その他の取り組み検討・立案**

例：学生ボランティアサポート等

### 目標達成に向けた施策立案・実施

- 合理的かつコスト効果の高い約10年間の計画策定
- 取り組み体制の充実(職員だけでなく、学生・教員と連携し学園一丸となって取り組んでいく)

- ハード・ソフト対策の実績把握（計量による状況逐次把握）
- 委員会、各部会におけるデータ等分析
- 外部モニタリング機能の検討
- 他事例との比較検討、アンケート実施など

## 環境負荷削減の中長期目標

| 年度（段階） | 2016年（進捗状況） | 2020年（中期目標） | 2050年（長期目標） |
|---|---|---|---|
| エネルギー【1㎡あたりの使用量】 | 約17.0% 削減 | 25% 削減 | 65% 削減 |
| 水【1人あたりの使用量】 | 約9.1% 削減 | 25% 削減 | 50% 削減 |
| 一般廃棄物【総量】 | 約11.9% 削減 | 25% 削減 | 50% 削減 |

| | |
|---|---|
| 教育・研究 | 環境意識の高い、様々な分野での地球環境保全、環境負荷低減活動のリーダー的人材輩出。<br>キャンパスを実験フィールドとした産学連携の技術開発へ繋げる事で社会に貢献し、併せて自らの環境負荷低減に繋がる好循環のサイクルを生み出す。 |
| 地域社会への展開 | 学生が中心となった地域貢献活動の充実、各キャンパス毎に行政と連携強化 |
| 提携大学との連携 | 提携大学の環境負荷削減に対して協力することで世界的レベルでの温室効果ガス排出削減等に貢献する。 |
| 環境報告書情報公開 | 『見える化』により、学園構成員の一人一人が問題点を正しく認識し、その改善に積極的に取り組んでいくことで環境負荷低減に繋げる。 |

**備考**

中長期目標とは、2010年に地球環境委員会発足時に設定した環境負荷削減目標です。
1㎡当りの年間エネルギー使用量（原単位・原油換算）を、2008年度比で2020年までに▲25%、2050年までに▲65%の水準まで削減することを掲げています。

## 付.6　立命館スポーツ宣言

立命館は、スポーツを人類共通の文化としてその意義と価値を享受することが、個人の幸福と、社会の平和と繁栄にとって不可欠なものであると考え、「立命館憲章」に基づきスポーツを学園づくりのための重要な要素として位置付ける。

立命館は、多様な学びの機会の創造という観点から、スポーツを児童・生徒・学生の「学びと成長の場」と見なし、スポーツの振興と発展に努めてきた。時代の変化に対応し、これまで以上に社会の要請に応えることができる人材を育成するとともに、スポーツの持つ力と役割を改めて学内外に示すことを目的とし、ここに立命館スポーツ宣言を定める。

立命館は、建学の精神と教学理念に基づき、高い水準で、スポーツの振興と発展を担い「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもった人間の育成に努める。

立命館は、学祖西園寺公望の「自由主義と国際主義」の精神を受け継ぎ、スポーツの持つ力が言葉や文化、さらには民族、国境を越えた相互理解の手段となると考え、スポーツを通じて、自由にして進取の気風に富んだ国際平和と国際交流に寄与することのできる地球市民の育成に努める。

立命館は、私立の総合学園として、その教育課程においてスポーツをとおした全人教育を実践するとともに、クラブ・サークルをはじめとした課外自主活動の振興・発展と環境整備に努める。

立命館は、障がいの有無に関わらず、すべての学園構成員に、スポーツに参加する基本的権利を尊重すると共に、スポーツを日常生活に根付かせ、心身ともに健康な暮らしのために生涯にわたってスポーツに親しむことを奨励する。

立命館は、スポーツの文化価値とその教育における意義を深く認識し、スポーツに関する諸分野での教育・研究を高い水準で推進し、わが国のスポーツの振興・発展をリードする存在となるよう努める。

立命館は、スポーツが学園の理念を具現化する力を持ち、校友・父母を含む学園関係者が一体となることに貢献し、学園の発展を促す重要な原動力となると考え、この振興と発展に努める。

立命館は、スポーツを通じて、老若男女を越えた地域コミュニティの形成と発展に携わり、地域社会の健康で豊かなコミュニティづくりに貢献することを社会的役割の一つとする。

２０１４年４月９日
学校法人立命館

# 付.8　会議記録

## 常任理事会

2011年10月12日
「キャンパス創造の基本構想について」
2012年３月28日
「立命館大学キャンパス創造とキャンパス整備に係る基本的確認」
2012年５月30日
「大阪茨木新キャンパスの全体配置・施設構成（基本設計）の基本的考え方について」
2012年９月26日
「大阪茨木新キャンパスの基本構想　－大阪茨木新キャンパス開設準備委員会第一次答申－」
2013年５月８日
「大阪茨木新キャンパスの整備について」
2013年６月19日
「大阪茨木新キャンパスの整備について」
2017年１月25日
「人間科学研究科の設置に関わる施設・設備等の整備について」
2017年10月４日
「グローバル教養学部を含む新たな教学展開に伴う OIC 施設の整備と今後の進め方について」
2018年４月４日
「OIC マスタープラン2018 Ver.1作成についての報告」

## キャンパス計画委員会

| | | |
|---|---|---|
| 2010年度 | 第１回 | 2011年１月19日 |
| | 第２回 | 2011年１月26日 |
| | 第３回 | 2011年２月10日 |
| | 第４回 | 2011年２月23日 |
| | 第５回 | 2011年３月３日 |
| | 第６回 | 2011年３月23日 |
| 2011年度 | 第１回 | 2011年４月６日 |
| | 第２回 | 2011年５月11日 |
| | 第３回 | 2011年５月18日 |
| | 第４回 | 2011年６月22日 |
| | 第５回 | 2011年９月21日 |
| | 第６回 | 2011年10月12日 |

## 立命館大学キャンパス創造委員会

| | | |
|---|---|---|
| 2010年度 | 第１回 | 2011年１月12日 |
| | 第２回 | 2011年２月16日 |
| | 第３回 | 2011年２月25日 |
| | 第４回 | 2011年３月16日 |
| 2011年度（前期） | | |
| | 第１回 | 2011年４月20日 |
| | 第２回 | 2011年４月27日 |
| | 第３回 | 2011年５月11日 |
| | 第４回 | 2011年５月18日 |
| | 第５回 | 2011年９月21日 |
| 2011年度（後期） | | |
| | 第１回 | 2011年11月16日 |
| | 第２回 | 2011年12月９日 |
| | 第３回 | 2011年12月21日 |
| | 第４回 | 2012年１月18日 |

## 立命館大学キャンパス創造・キャンパス計画委員会合同委員会

| | | |
|---|---|---|
| 2011年度（後期） | | |
| | 第１回 | 2011年11月16日 |
| | 第２回 | 2012年２月15日 |
| | 第３回 | 2012年２月29日 |
| | 第４回 | 2012年３月14日 |
| | 第５回 | 2012年３月19日 |
| 2012年度 | | |
| | 第１回 | 2012年４月18日 |
| | 第２回 | 2012年５月30日 |
| | 第３回 | 2012年６月20日 |
| | 第４回 | 2012年７月４日 |
| | 第５回 | 2012年７月25日 |
| | 第６回 | 2012年９月５日 |
| | 第７回 | 2012年９月20日　※集中開催 |

## 大阪茨木新キャンパス開設準備委員会

| | | | |
|---|---|---|---|
| 2011年度 | 第１回 | 2011年11月25日 | |
| | 第２回 | 2012年１月27日 | |
| 2012年度 | 第１回 | 2012年４月18日 | ※拡大会議 |
| | 第２回 | 2012年５月16日 | ※拡大会議 |
| | 第３回 | 2012年５月23日 | |
| | 第４回 | 2012年６月20日 | |
| | 第５回 | 2012年９月12日 | |
| | 第６回 | 2012年11月21日 | |
| | 第７回 | 2013年１月30日 | |
| | 第８回 | 2013年３月27日 | |
| 2013年度 | 第１回 | 2013年５月１日 | |
| | 第２回 | 2013年６月12日 | |
| | 第３回 | 2013年７月31日 | |
| | 第４回 | 2013年９月27日 | |
| | 第５回 | 2013年12月18日 | |
| | 第６回 | 2014年３月27日 | |
| 2014年度 | 第１回 | 2014年６月25日 | |
| | 第２回 | 2014年11月26日 | |
| | 第３回 | 2014年12月24日 | |

## キャンパス整備部会

| | | |
|---|---|---|
| 第１回 | 2012年２月28日 | |
| 第２回 | 2012年３月21日 | |
| 第３回 | 2012年７月13日 | |
| 第４回 | 2012年９月７日 | |
| 第５回 | 2012年10月５日 | |
| 第６回 | 2012年10月25日 | |
| 第７回 | 2013年３月１日 | |
| 第８回 | 2013年10月２日 | |

## OIC将来構想検討委員会

| | | | |
|---|---|---|---|
| 2016年度 | 第１回 | 2016年７月26日 | |
| | 第２回 | 2016年12月16日 | |
| 2017年度 | 第１回 | 2017年７月31日 | |
| | 第２回 | 2017年９月21日 | |
| | 第３回 | 2017年10月25日 | |
| | 第４回 | 2018年１月24日 | |

## OICマスタープラン作業グループ

| | | |
|---|---|---|
| 第１回 | 2017年１月26日 | |
| 第２回 | 2017年３月10日 | |
| 第３回 | 2017年３月23日 | |
| 第４回 | 2017年10月24日 | |
| 第５回 | 2018年３月１日 | |

## マスタープラン策定にかかわるヒアリング

2017年度

キャンパスマスタープラン2017Ver.1に対する学部・研究科等を対象としたヒアリングを実施

【実施期間】2017年10月～2018年１月

【対　　象】OIC学部・研究科

OICに所属する学部・研究科の事務長および執行部または学部長を訪問し、CMPを説明の上、意見交換を行った。

# 付.9　検討組織名簿

## キャンパス計画委員会

2010年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 飯田　健夫 | 副総長 |
| 委員長代理 | 仲上　健一 | 常務理事（財務担当） |
| 副委員長 | 上田　　寛 | 副総長 |
| | 森島　朋三 | 常務理事（総務担当） |
| 委　員 | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 二宮　周平 | 法学部長 |
| | 桂島　宣弘 | 文学部長 |
| | 本田　　豊 | 政策科学部長 |
| | 坂根　政男 | 理工学部長 |
| | 谷口　吉弘 | 生命科学部長 |
| | 田畑　　泉 | スポーツ健康科学部長 |
| | 吉田美喜夫 | 図書館長 |
| | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 中西　一正 | 次期経営学部長 |
| | 有賀　郁敏 | 次期産業社会学部長 |
| | 三並　高志 | 財務部長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | 理工学部教授 |
| | 武田　史朗 | 理工学部准教授 |
| | 高村　学人 | 政策科学部准教授 |
| 事務局長 | 建山　和由 | 総合企画室長 |
| 事務局次長 | 志方　弘樹 | 財務部付部長 |
| 事務局 | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| | 太田　　猛 | 総合企画課長 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長 |
| | 植松　幹雄 | 管財課長補佐 |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 大藪　康成 | 総合企画課長補佐 |
| | 前田万理子 | 総合企画課 |

2011年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 飯田　健夫 | 副総長 |
| 委員長代理 | 仲上　健一 | 常務理事（財務担当） |
| 副委員長 | 見上　崇洋 | 副総長 |
| | 服部　健二 | 副理事長 |
| | 森島　朋三 | 常務理事（総務担当） |
| 委　員 | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 二宮　周平 | 法学部長 |
| | 有賀　郁敏 | 産業社会学部長 |
| | 桂島　宣弘 | 文学部長 |
| | 大森　康宏 | 映像学部長 |
| | 坂根　政男 | 理工学部長 |
| | 今中　忠行 | 生命科学部長 |
| | 田畑　　泉 | スポーツ健康科学部長 |
| | 和田　晴吾 | 図書館長 |
| | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 三並　高志 | 財務部長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | 理工学部教授 |
| | 武田　史朗 | 理工学部准教授 |
| | 高村　学人 | 政策科学部准教授 |
| 事務局長 | 建山　和由 | 総合企画室長 |
| 事務局次長 | 志方　弘樹 | 財務部付部長 |
| 事務局 | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| | 大谷　晃弘 | 総合企画次長 |
| | 石井　　洋 | 事業計画課長 |
| | 太田　　猛 | 総合企画課長 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長補佐 |
| | 大藪　康成 | 総合企画課長補佐 |
| | 河合孝一郎 | 総合企画課長補佐 |
| | 植松　幹雄 | 管財課長補佐 |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 前田万理子 | 総合企画課 |

## 立命館大学キャンパス創造委員会

2010年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 川口　清史 | 総長 |
| 副委員長 | 上田　　寛 | 副総長 |
| 委　員 | 本郷　真紹 | 副総長 |
| | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 松原　豊彦 | 経済学部長 |
| | 齋藤　雅通 | 経営学部長 |
| | 桂島　宣弘 | 文学部長 |
| | 板木　雅彦 | 国際関係学部長 |
| | 大久保英嗣 | 情報理工学部長 |
| | 佐藤　　満 | 政策科学研究科長 |
| | 水口　憲人 | 公務研究科長 |
| | 春日井敏之 | 教学部長 |
| | 渡辺　公三 | 研究部長 |
| | 前田　信彦 | キャリアセンター部長 |
| | 石原　直紀 | 総合企画室副室長 |
| | 大島　英穂 | 教学部事務部長 |
| | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| オブザーバー | 是永　　駿 | APU 学長 |
| 事務局長 | 赤井　正二 | 総合企画副室長 |
| 事務局 | 志方　弘樹 | 財務部付部長 |
| | 大谷　晃弘 | 総合企画部次長 |
| | 太田　　猛 | 総合企画課長 |
| | 石井　　洋 | 事業計画課長 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長補佐 |
| | 河合孝一郎 | 総合企画課長補佐 |

2011年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 川口　清史 | 総長 |
| 副委員長 | 見上　崇洋 | 副総長 |
| 委　員 | 本郷　真紹 | 副総長 |
| | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 松原　豊彦 | 経済学部長 |
| | 中西　一正 | 経営学部長 |
| | 板木　雅彦 | 国際関係学部長 |
| | 上子　秋生 | 政策科学部長／研究科長兼務 |
| | 大久保英嗣 | 情報理工学部長 |
| | 今村　信孝 | 薬学部長 |
| | 春日井敏之 | 教学部長 |
| | 渡辺　公三 | 研究部長 |
| | 石原　直紀 | 国際部長 |
| | 前田　信彦 | キャリアセンター部長 |
| | 建山　和由 | 総合企画室長 |
| | 田尻　　実 | 総務部長 |
| | 西川　幸穂 | 総務部付部長 |
| | 大島　英穂 | 教学部事務部長 |
| | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| | 大谷　晃弘 | 総合企画部次長 |
| オブザーバー | 是永　　駿 | ＡＰＵ学長 |
| 事務局長 | 赤井　正二 | 総合企画室副室長 |
| | 井澤　裕司 | 総合企画室副室長 |
| 事務局 | 太田　　猛 | 総合企画課長 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長 |
| | 河合孝一郎 | 総合企画課長補佐 |
| | 瀬田みゆき | 総合企画課 |
| | 中島万右美 | 総合企画課 |

## 立命館大学キャンパス創造・キャンパス計画委員会合同委員会

2011年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 服部　健二 | 副理事長 |
| 委員長代理 | 仲上　健一 | 常務理事（財務担当） |
| 副委員長 | 見上　崇洋 | 副総長 |
| | 飯田　健夫 | 副総長 |
| | 森島　朋三 | 常務理事（総務担当） |
| 委員 | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 二宮　周平 | 法学部長 |
| | 有賀　郁敏 | 産業社会学部長 |
| | 板木　雅彦 | 国際関係学部長 |
| | 上子　秋夫 | 政策科学部長 |
| | 大森　康広 | 映像学部長 |
| | 桂島　宣弘 | 文学部長 |
| | 松原　豊彦 | 経済学部長 |
| | 中西　一正 | 経営学部長 |
| | 坂根　政男 | 理工学部長 |
| | 大久保英嗣 | 情報理工学部長 |
| | 今中　忠行 | 生命科学部長 |
| | 今村　信孝 | 薬学部長 |
| | 田畑　　泉 | スポーツ健康科学部長 |
| | 和田　晴吾 | 図書館長 |
| | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 三並　高志 | 財務部長 |
| 専門委員 | 高村　学人 | 政策科学部教授 |
| | 及川　清昭 | 理工学部教授 |
| | 武田　史朗 | 理工学部准教授 |
| 事務局長 | 建山　和由 | 総合企画室長 |
| 事務局次長 | 志方　弘樹 | 総合企画部付部長 |
| 事務局 | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| | 大谷　晃弘 | 総合企画部次長 |
| | 川口　　潔 | 財務部次長 |
| | 太田　　猛 | 総合企画課長 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長 |
| | 大藪　康成 | 総合企画課長補佐 |
| | 河合孝一郎 | 総合企画課長補佐 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長 |
| | 植松　幹雄 | 管財課長 |
| | 増田　幸治 | 管財課 |

2012年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 服部　健二 | 副理事長 |
| 委員長代理 | 髙橋　英幸 | 常務理事（財務担当） |
| 副委員長 | 見上　崇洋 | 副総長 |
| | 渡辺　公三 | 副総長 |
| | 建山　和由 | 総長特別補佐 |
| | 森島　朋三 | 常務理事（総務担当） |
| 委員 | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 竹濵　　修 | 法学部長 |
| | 松原　豊彦 | 経済学部長 |
| | 中西　一正 | 経営学部長 |
| | 有賀　郁敏 | 産業社会学部長 |
| | 板木　雅彦 | 国際関係学部長 |
| | 上子　秋夫 | 政策科学部長 |
| | 桂島　宣弘 | 文学部長 |
| | 大森　康広 | 映像学部長 |
| | 田畑　　泉 | スポーツ健康科学部長 |
| | 坂根　政男 | 理工学部長 |
| | 八村広三郎 | 情報理工学部長 |
| | 今中　忠行 | 生命科学部長 |
| | 今村　信孝 | 薬学部長 |
| | 北尾　宏之 | 図書館長 |
| | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 志方　弘樹 | 財務部長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | キャンパス計画委員会専門委員 |
| | 武田　史朗 | キャンパス計画委員会専門委員 |
| 事務局長 | 赤井　正二 | 総合企画室長 |
| 事務局次 | 川口　　潔 | 財務部次長 |
| 事務局 | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| | 大谷　晃弘 | 総合企画部次長 |
| | 木田　成也 | 総合企画部次長 |
| | 長田　　勝 | 総合企画課長 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長 |
| | 大藪　康成 | 総合企画課長補佐 |
| | 河合孝一郎 | 総合企画課長補佐 |
| | 米倉　　潤 | 総合企画課 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長 |
| | 植松　幹雄 | 管財課長 |
| | 増田　幸治 | 管財課 |

## 大阪茨木新キャンパス開設準備委員会

2011年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 見上　崇洋 | 副総長 |
| 副委員長 | 中西　一正 | 経営学部長 |
| | 上子　秋生 | 政策科学部長 |
| 委　員 | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 仲上　健一 | 常務理事（財務担当） |
| | 森島　朋三 | 常務理事（総務担当） |
| | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 渡辺　公三 | 研究部長 |
| | 石原　直紀 | 国際部長 |
| | 前田　信彦 | キャリアセンター部長 |
| | 建山　和由 | 総合企画室長 |
| | 守　　政毅 | 経営学部准教授 |
| | 吉田　友彦 | 政策科学部副学部長 |
| | 小杉　隆信 | 政策科学部准教授 |
| | 三並　高志 | 財務部長 |
| | 大島　英穂 | 教学部事務部長 |
| | 志方　弘樹 | 財務部付部長 |
| | 野口　義文 | 研究部事務部長 |
| | 相根　　誠 | 国際部事務部長 |
| | 縄本　　敏 | 社会連携部長 |
| | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | 理工学部教授 |
| 事務局長 | 齋藤　雅通 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室長 |
| 副事務局長 | 服部　利幸 | 大阪茨木新キャンパス開設準備副室長 |
| 事務局 | 植木　泰江 | 総合企画部次長 |
| | 廣井　　徹 | 社会連携部次長 |
| | 金澤　正人 | 経営学部事務室事務長補佐 |
| | 山下　正克 | 政策科学部事務室事務長補佐 |
| | 谷口　正城 | BKC 大学院課 |
| | 山菅　善樹 | 衣笠大学院課長補佐 |
| | 武藤　千也 | 教務課長 |
| | 市原　岳洋 | 研究企画課長補佐 |
| | 星野　　泉 | 学生オフィス |
| | 土屋　　睦 | 図書館サービス課長補佐 |
| | 大前　美郎 | 社会連携課長補佐 |
| | 十河　　誠 | 社会連携課 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長（OIC 開設準備課長兼務） |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 古澤　秀晃 | 管財課 |
| | 大場　茂生 | 広報課長 |
| | 松尾憲太郎 | 広報課長補佐 |
| | 川口　隆一 | 広報課 |
| | 長田　　勝 | OIC 開設準備課長 |
| | 長谷川　哲 | OIC 開設準備課長 |
| | 河合孝一郎 | OIC 開設準備課長補佐 |
| | 北出　幸裕 | OIC 開設準備課長補佐 |
| | 大滝　夏美 | OIC 開設準備課 |
| | 小栗栖裕生 | 総務課 |

2012年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 見上　崇洋 | 副総長 |
| 副委員長 | 渡辺　公三 | 副総長 |
| | 中西　一正 | 経営学部長 |
| | 上子　秋生 | 政策科学部長 |
| 委　員 | 中村　　正 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 高橋　英幸 | 常務理事（財務担当） |
| | 森島　朋三 | 常務理事（総務担当） |
| | 三藤　利雄 | テクノロジー･マネジメント研究科長 |
| | 奥村　陽一 | 経営管理研究科長 |
| | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 石原　直紀 | 国際部長 |
| | サトウタツヤ | 研究部長 |
| | 赤井　正二 | 総合企画室長 |
| | 前田　信彦 | キャリアセンター部長 |
| | 守　　政毅 | 経営学部准教授 |
| | 堀井　悟志 | 経営学部准教授 |
| | 吉田　友彦 | 政策科学部副学部長 |
| | 小杉　隆信 | 政策科学部准教授 |
| | 志方　弘樹 | 財務部長 |
| | 川口　　潔 | 財務部次長 |
| | 大島　英穂 | 教学部事務部長 |
| | 塩田　邦成 | 国際部事務部長 |
| | 野口　義文 | 研究部事務部長 |
| | 今村　正治 | 総合企画部長 |
| | 田中　康雄 | 社会連携部長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | 理工学部教授 |
| 事務局長 | 齋藤　雅通 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室長 |
| 副事務局長 | 服部　利幸 | 大阪茨木新キャンパス開設準備副室長 |
| 事務局 | 植木　泰江 | 総合企画部次長 |
| | 廣井　　徹 | 社会連携部次長 |
| | 金澤　正人 | 経営学部事務室事務長補佐 |
| | 山下　正克 | 政策科学部事務室事務長補佐 |
| | 谷口　正城 | BKC 大学院課 |
| | 山菅　善樹 | 衣笠大学院課長補佐 |
| | 武藤　千也 | 教務課長 |
| | 市原　岳洋 | 研究企画課長補佐 |
| | 星野　　泉 | 学生オフィス |
| | 土屋　　睦 | 図書館サービス課長補佐 |
| | 大前　美郎 | 社会連携課長補佐 |
| | 十河　　誠 | 社会連携課 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長（OIC 開設準備課長兼務） |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 古澤　秀晃 | 管財課 |
| | 大場　茂生 | 広報課長 |
| | 松尾憲太郎 | 広報課長補佐 |
| | 川口　隆一 | 広報課 |
| | 長田　　勝 | OIC 開設準備課長 |
| | 長谷川　哲 | OIC 開設準備課長 |
| | 河合孝一郎 | OIC 開設準備課長補佐 |
| | 北出　幸裕 | OIC 開設準備課長補佐 |
| | 大滝　夏美 | OIC 開設準備課 |
| | 小栗栖裕生 | 総務課 |

## 大阪茨木新キャンパス開設準備委員会

2013年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 見上　崇洋 | 副総長 |
| 副委員長 | 渡辺　公三 | 副総長 |
| | 小木　裕文 | 副総長 |
| | 池田　　伸 | 経営学部長 |
| | 重森　臣広 | 政策科学部長 |
| 委　員 | 森島　朋三 | 専務理事 |
| | 建山　和由 | 常務理事（教学担当） |
| | 國廣　敏文 | 常務理事（学生担当） |
| | 髙橋　英幸 | 常務理事（財務担当） |
| | 鐘ヶ江秀彦 | 政策科学研究科長 |
| | 三藤　利雄 | テクノロジー･マネジメント研究科長 |
| | 奥村　陽一 | 経営管理研究科長 |
| | 肥塚　　浩 | 経営学部副学部長 |
| | 宮脇　　昇 | 政策科学部副学部長 |
| | 守　　政毅 | 経営学部准教授 |
| | 赤井　正二 | 総合企画室長 |
| | 星野　祐司 | 心理総合系新学部開設準備委員会副事務局長 |
| | 米山　　裕 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | サトウタツヤ | 研究部長 |
| | 石原　直紀 | 国際部長 |
| | 前田　信彦 | キャリアセンター部長 |
| | 平野　仁彦 | 図書館長 |
| | 志方　弘樹 | 財務部長 |
| | 田尻　　実 | 総務部長 |
| | 西川　幸穂 | 人事部長 |
| | 相根　　誠 | 情報システム部長 |
| | 山本　修司 | 教学部事務部長 |
| | 野口　義文 | 研究部事務部長 |
| | 大島　英穂 | 国際部事務部長 |
| | 木田　成也 | 総合企画部長 |
| | 今村　正治 | 総合企画部付部長 |
| | 廣井　　徹 | 社会連携部次長 |
| | 淺野　昭人 | 学生部次長 |
| | 川口　　潔 | 財務部次長 |
| | 武山　精志 | 図書館次長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | キャンパス計画室長 |
| 事務局長 | 齋藤　雅通 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室長 |
| 副事務局長 | 服部　利幸 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室副室長 |
| 事務局 | 真田　睦浩 | 経営学部事務室事務長 |
| | 濱崎　義朗 | 経営学部事務室事務長補佐 |
| | 嶋　　健久 | 政策科学部事務室事務長 |
| | 高見澤　篤 | プロフェッショナルスクール事務室事務長 |
| | 安福裕一郎 | BKC 教学課長 |
| | 松井かおり | 教務課長 |
| | 武藤　千也 | 共通教育課長 |
| | 崔　　幸浩 | ＢＫＣ大学院課長 |
| | 太田　啓子 | 教職教育課長 |
| | 古橋由一郎 | 社会連携課長 |
| | 三ツ野直樹 | 研究企画課長 |
| | 市原　岳洋 | 研究企画課長補佐 |
| | 臼井　文子 | 図書館サービス課長 |
| | 中島　麻恵 | 図書館サービス課長補佐 |
| | 大場　茂生 | 広報課長 |
| | 松尾憲太郎 | 広報課長補佐 |
| | 辻井　英吾 | 学生オフィス課長 |
| | 曽谷　直樹 | 学生オフィス課長補佐 |
| | 片田　賢史 | スポーツ強化オフィス課長 |
| | 中嶋　友樹 | スポーツ強化オフィス課長補佐 |
| | 岡　　潤也 | 情報システム課長 |
| | 大菅　康夫 | 情報基盤課長 |
| | 平野　彰一 | 総務課長 |
| | 山下　心作 | 総務課長補佐 |
| | 豊田　耕三 | 財務経理課長 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長 |
| | 植松　幹雄 | 管財課長 |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 長田　　勝 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課長 |
| | 河合孝一郎 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課長補佐 |
| | 北出　幸裕 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課 |
| | 大滝　夏美 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課 |
| | 石井　　洋 | 総合企画課長 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長 |
| | 土山　道大 | 総合企画課 |

## 大阪いばらきキャンパス開設準備委員会

2014年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 平田　純一 | 副総長　※～2014年12月 |
| | 市川　正人 | 副総長　※2015年１月～ |
| 委員長代理 | 見上　崇洋 | 総長特別補佐 |
| 副委員長 | 渡辺　公三 | 副総長 |
| | 小木　裕文 | 副総長　※～2014年12月 |
| | 松原　豊彦 | 副総長　※2015年１月～ |
| | 池田　　伸 | 経営学部長 |
| | 重森　臣広 | 政策科学部長 |
| 委　員 | 森島　朋三 | 専務理事 |
| | 建山　和由 | 常務理事 |
| | | （教学担当）※～2014年12月 |
| | | （企画担当）※2015年１月～ |
| | 國廣　敏文 | 常務理事 |
| | | （学生担当）※～2014年12月 |
| | 髙橋　英幸 | 常務理事（財務担当） |
| | 志磨　慶子 | 常務理事（総務担当） |
| | 田尾　啓一 | テクノロジー･マネジメント研究科長 |
| | 奥村　陽一 | 経営管理研究科長 |
| | 鐘ヶ江秀彦 | 政策科学研究科長 |
| | 肥塚　　浩 | 経営学部副学部長 |
| | 赤井　正二 | 総合企画室長 |
| | 星野　祐司 | 総合心理学部設置委員会副事務局長 |
| | 米山　　裕 | 教学部長 |
| | 早川　　貴 | 教学部副部長 |
| | 山本　　忠 | 学生部長 |
| | サトウタツヤ | 研究部長 |
| | 石原　直紀 | 国際部長 |
| | 石原　一彦 | キャリアセンター部長 |
| | 平野　仁彦 | 図書館長 |
| | 志方　弘樹 | 財務部長 |
| | 田尻　　実 | 総務部長 |
| | 西川　幸穂 | 人事部長 |
| | 相根　　誠 | 情報システム部長 |
| | 山本　修司 | 教学部事務部長 |
| | 野口　義文 | 研究部事務部長 |
| | 大島　英穂 | 国際部事務部長 |
| | 木田　成也 | 総合企画部長 |
| | 廣井　　徹 | 社会連携部次長 |
| | 淺野　昭人 | 学生部次長 |
| | 川口　　潔 | 財務部次長 |
| | 近藤　茂生 | 図書館次長 |
| | 植木　泰江 | 総合企画部次長 |
| | 中上　晶代 | 総務部次長／社会連携部次長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | キャンパス計画室長 |
| オブザーバー | 佐久間春夫 | 学生部長（スポーツ振興担当） |
| 事務局長 | 齋藤　雅通 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室長 |
| 副事務局長 | 服部　利幸 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室副室長 |
| 事務局 | 真田　睦浩 | 経営学部事務室事務長 |
| | 嶋　　建久 | 政策科学部事務室事務長 |
| | 高見澤　篤 | プロフェッショナルスクール事務室事務長 |
| | 武藤　千也 | OIC 教学準備課長 |
| | 河合孝一郎 | OIC 教学準備課長補佐 |
| | 佐野　芳尚 | OIC 教学準備課 |
| | 山田　　勉 | ＢＫＣ大学院課長 |
| | 三ツ野直樹 | 研究企画課長 |
| | 市原　岳洋 | 研究企画課長補佐 |
| | 大前　美郎 | 社会連携課長補佐 |
| | 十河　　誠 | 社会連携課 |
| | 臼井　文子 | 図書館サービス課長 |
| | 土屋　　睦 | 図書館管理課長補佐 |
| | 宮下　明大 | 入学センター次長 |
| | 松原　　修 | キャリアセンター次長 |
| | 辻井　英吾 | 学生オフィス課長 |
| | 曽谷　直樹 | 学生オフィス課長補佐 |
| | 布施　亮介 | スポーツ強化オフィス課長 |
| | 中嶋　友樹 | スポーツ強化オフィス課長補佐 |
| | 森山　哲朗 | 管財課長 |
| | 植松　幹雄 | 管財課長 |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 古澤　秀晃 | 管財課 |
| | 豊田　耕三 | 財務経理課長 |
| | 片岡　達彦 | 広報課長 |
| | 松尾憲太郎 | 広報課長補佐 |
| | 長田　　勝 | 大阪いばらきキャンパス開設準備課長 |
| | 長谷川　哲 | 大阪いばらきキャンパス開設準備課長 |
| | 北出　幸裕 | 大阪いばらきキャンパス開設準備課長補佐 |
| | 宮田　亮平 | 大阪いばらきキャンパス開設準備課長補佐 |
| | 橋本　規孝 | 大阪いばらきキャンパス開設準備課長補佐 |
| | 大滝　夏美 | 大阪いばらきキャンパス開設準備課 |
| | 小栗栖裕生 | 大阪いばらきキャンパス開設準備課 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長 |
| | 石井　　洋 | 総合企画課長 |
| | 土山　道大 | 総合心理学部設置準備事務室 |

## キャンパス整備部会

2011年度

| | | |
|---|---|---|
| 部会長 | 仲上　健一 | 常務理事（財務担当） |
| 副部会長 | 齋藤　雅通 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室長 |
| メンバー | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 和田　晴吾 | 図書館長 |
| | 建山　和由 | 総合企画室長 |
| | 田中　　力 | 経営学部教授 |
| | 石原　一彦 | 政策科学部教授 |
| | 田尻　　実 | 総務部長 |
| | 三並　高志 | 財務部長 |
| | 志方　弘樹 | 財務部付部長 |
| | 相根　　誠 | 国際部事務部長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | 理工学部教授 |
| | 武田　史朗 | 理工学部准教授 |
| 事務局長 | 服部　利幸 | 大阪茨木新キャンパス開設準備副室長 |
| 事務局 | 森山　哲朗 | 管財課長（総合企画課長兼務） |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 長田　　勝 | 総合企画課長 |
| | 河合孝一郎 | 総合企画課長補佐 |
| | 菊池ゆかり | 教務課長 |
| | 松井かおり | 学生オフィス（衣笠）課長 |
| | 西田　純子 | 国際企画課長 |
| | 友常　菜穂 | 国際事業協力課 |
| | 臼井　文子 | 図書館サービス課長 |
| | 真田　睦浩 | 経営学部事務長 |
| | 嶋　　健久 | 政策科学部事務長 |

2012年度

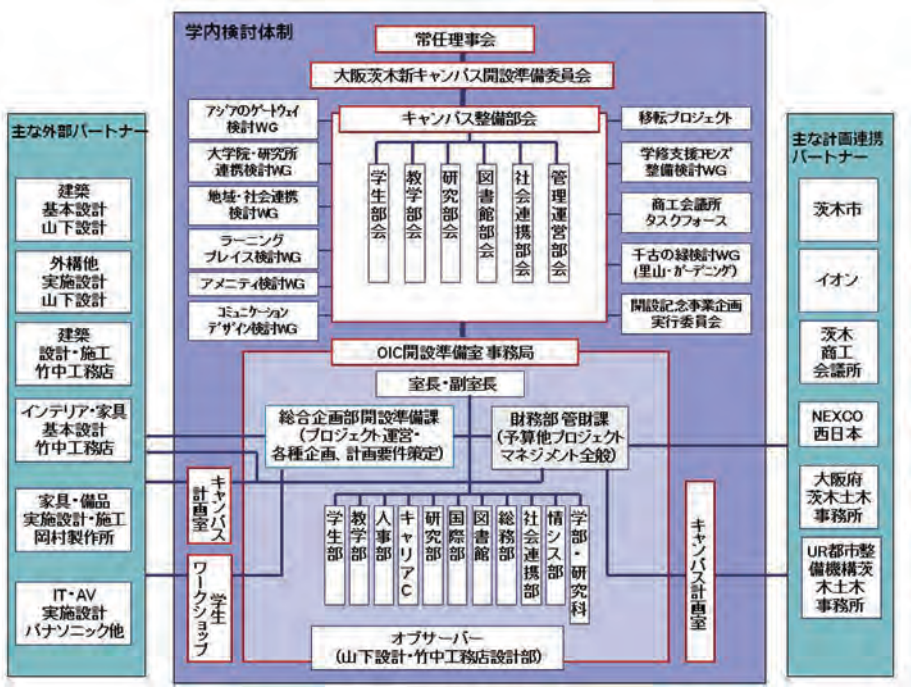
| | | |
|---|---|---|
| 部会長 | 髙橋　英幸 | 常務理事（財務担当） |
| 副部会長 | 齋藤　雅通 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室長 |
| 委　員 | 石井　秀則 | 教学部長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 |
| | 北尾　宏之 | 図書館長 |
| | 赤井　正二 | 総合企画室長 |
| | 三上　達也 | 政策科学部副学部長 |
| | 三藤　利雄 | テクノロジー･マネジメント研究科長 |
| | 奥村　陽一 | 経営管理研究科長 |
| | 八木　保樹 | 文学部教授 |
| | 田中　　力 | 経営学部教授 |
| | 八重樫　文 | 経営学部准教授 |
| | 田尻　　実 | 総務部長 |
| | 志方　弘樹 | 財務部長 |
| | 塩田　邦成 | 国際部事務部長 |
| | 相根　　誠 | 情報システム部長 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | 理工学部教授 |
| | 武田　史朗 | 理工学部准教授 |
| 事務局長 | 服部　利幸 | 大阪茨木新キャンパス開設準備副室長 |
| 副事務局長 | 川口　　潔 | 財務部次長 |
| 事務局 | 森山　哲朗 | 管財課長（総合企画課長兼務） |
| | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 木田　成也 | 総合企画部次長 |
| | 長田　　勝 | 総合企画課長 |
| | 河合孝一郎 | 総合企画課長補佐 |
| | 北出　幸裕 | 総合企画課 |
| | 菊池ゆかり | 教務課長 |
| | 松井かおり | 学生オフィス（衣笠）課長 |
| | 西田　純子 | 国際企画課長 |
| | 臼井　文子 | 図書館サービス課長 |
| | 真田　睦浩 | 経営学部事務長 |
| | 嶋　　健久 | 政策科学部事務長 |
| | 友常　菜穂 | 国際事業協力課 |
| | 大菅　康夫 | 情報基盤課長 |

## キャンパス整備部会

2013年度

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 部会長 | 髙橋　英幸 | 常務理事（財務担当） | 事務局 | 木田　成也 | 総合企画部長 |
| 副部会長 | 齋藤　雅通 | 大阪茨木新キャンパス開設準備室長 | | 真田　睦浩 | 経営学部事務長 |
| 委員 | 米山　　裕 | 教学部長 | | 嶋　　健久 | 政策科学部事務長 |
| | 佐藤　敬二 | 学生部長 | | 松井かおり | 教務課長 |
| | 平野　仁彦 | 図書館長 | | 西田　純子 | 国際企画課長 |
| | 赤井　正二 | 総合企画室長 | | 友常　菜穂 | 国際協力事業課 |
| | 三藤　利雄 | テクノロジー・マネジメント研究科長 | | 辻井　英吾 | 学生オフィス（衣笠）課長 |
| | 奥村　陽一 | 経営管理研究科長 | | 森山　哲朗 | 管財課長（OIC 開設準備課長兼務） |
| | 吉田　友彦 | 政策科学部 | | 増田　幸治 | 管財課 |
| | 田中　　力 | 経営学部 | | 丸山　浩史 | 図書館サービス課長補佐 |
| | 八木　保樹 | 文学部 | | 大菅　康夫 | 情報基盤課長 |
| | 田尻　　実 | 総務部長 | | 長田　　勝 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課長 |
| | 志方　弘樹 | 財務部長 | | 河合孝一郎 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課長補佐 |
| | 大島　英穂 | 国際部事務部長 | | 北出　幸裕 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課 |
| | 相根　　誠 | 情報システム部長 | | 大滝　夏美 | 大阪茨木新キャンパス開設準備課 |
| 専門委員 | 及川　清昭 | 理工学部教授 | | | |
| | 武田　史朗 | 理工学部准教授 | | | |
| 事務局長 | 服部　利幸 | 大阪茨木新キャンパス開設準備副室長 | | | |
| 副事務局長 | 川口　　潔 | 財務部次長 | | | |

OIC 開設推進体制



## OIC将来構想検討委員会

2016年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 渡辺　公三 | 副総長 |
| 副委員長 | 齋藤　雅通 | OIC 地域連携室長 |
| 委員 | 建山　和由 | 常務理事（企画担当） |
| | 髙橋　英幸 | 常務理事（財務担当） |
| | 池田　　伸 | 経営学部長 |
| | 重森　臣広 | 政策科学部長 |
| | 佐藤　隆夫 | 総合心理学部長 |
| | 奥村　陽一 | 経営管理研究科長 |
| | 名取　　隆 | テクノロジー･マネジメント研究科長 |
| | 及川　清昭 | キャンパス計画室長 |
| | 佐藤　典司 | 教学部副部長 |
| | 山下　範久 | 総合企画室副室長 |
| | 徳田　昭雄 | キャリアセンター副部長 |
| | 東　健太郎 | 学生部副部長 |
| | 大島　英穂 | 国際部事務部長 |
| | 志方　弘樹 | 総務部長･財務部付部長(管財担当) |
| | 野口　義文 | 研究部事務部長 |
| | 木田　成也 | 総合企画部長 |
| | 東　　美江 | 教学部次長 |
| | 植木　泰江 | OIC 事務局長 |
| | 森山　哲朗 | 財務部次長・総務部付次長 |
| 事務局長 | サトウタツヤ | 総合企画室長 |
| 副事務局長 | 服部　利幸 | OIC 地域連携室副室長 |
| | 長谷川　哲 | OIC 地域連携課長 |
| | 河合孝一郎 | OIC 教学課長補佐 |
| | 米川　義人 | 管財課長 |
| | 増田　幸治 | 管財課長補佐 |
| | 平田　りえ | 管財課 |
| | 飯田　正志 | OIC リサーチオフィス課長 |
| | 佐々木雅美 | OIC 国際課長 |
| | 植松　幹雄 | OIC キャリアオフィス課長 |
| | 村上　吉胤 | OIC 学生オフィス課長 |
| | 土井しのぶ | 総合心理学部事務室事務長 |
| | 杉山　将人 | 経営学部事務室事務長 |
| | 真田　睦浩 | 経営学部事務室事務長 |
| | 嶋　　健久 | 政策科学部事務室事務長 |
| | 山田　　勉 | OIC 独立研究科事務室事務長 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長 |
| | 大藪　康成 | 総合企画課長補佐 |
| | 谷口　優美 | 総合企画課 |
| | 村山　昭宏 | 総合企画課 |

2017年度

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 渡辺　公三 | 副総長 |
| 副委員長 | 服部　利幸 | OIC 地域連携室長 |
| 委員 | 建山　和由 | 常務理事（企画担当） |
| | 志方　弘樹 | 常務理事（財務担当） |
| | 西川　幸穂 | 常務理事(総務担当)／総務部長 |
| | 佐藤　典司 | 経営学部長 |
| | 重森　臣広 | 政策科学部長 |
| | 佐藤　隆夫 | 総合心理学部長 |
| | 奥村　陽一 | 経営管理研究科長 |
| | 名取　　隆 | テクノロジー･マネジメント研究科長 |
| | 及川　清昭 | キャンパス計画室長 |
| | 勝村　　誠 | 教学部副部長 |
| | 山下　範久 | 総合企画室副室長 |
| | 石原　一彦 | キャリアセンター部長 |
| | 植木　泰江 | 国際部次長 |
| | 吉田　満梨 | 学生部副部長 |
| | 田尻　　実 | 財務部長 |
| | 野口　義文 | 研究部事務部長 |
| | 木田　成也 | 総合企画部長 |
| | 柴田　直人 | 教学部次長（OIC 事務局次長） |
| | 廣井　　徹 | 総務部付次長（OIC 事務局長） |
| | 三ツ野直樹 | 学生部次長 |
| | 金山　　勉 | グローバル教養学部設置委員会事務局長 |
| 事務局長 | サトウタツヤ | 総合企画室長 |
| | 長谷川　哲 | OIC 地域連携課長 |
| | 河合孝一郎 | OIC 教学課長補佐 |
| | 米川　義人 | 管財課長 |
| | 増田　幸治 | 管財課長補佐 |
| | 川登　一幸 | 管財課 |
| | 飯田　正志 | OIC リサーチオフィス課長 |
| | 佐々木雅美 | OIC 国際課長 |
| | 植松　幹雄 | OIC キャリアオフィス課長 |
| | 河内　明子 | OIC 学生オフィス課長 |
| | 土井しのぶ | 総合心理学部事務室事務長 |
| | 宮田　亮平 | 政策科学部事務室事務長 |
| | 杉山　将人 | 経営学部事務室事務長 |
| | 山田　　勉 | OIC 独立研究科事務室事務長 |
| | 近藤　茂生 | 学術情報部次長 |
| | 嶋津　雅彦 | 図書館利用支援課長 |
| | 土屋　　睦 | 図書館利用支援課長補佐（OIC） |
| | 片岡　達彦 | グローバル教養学部設置準備事務室課長 |
| | 橋本　規孝 | グローバル教養学部設置準備事務室課長補佐 |
| | 市原　岳洋 | グローバル教養学部設置準備事務室 |
| | 竹村　妹子 | グローバル教養学部設置準備事務室 |
| | 稲森　裕実 | 総合企画課長 |
| | 加藤　功介 | 総合企画課長補佐 |
| | 山菅　善樹 | 総合企画課長補佐 |
| | 谷口　優美 | 総合企画課 |
| | 村山　昭宏 | 総合企画課 |

## OICマスタープラン作業グループ

2016年度

| | | |
|---|---|---|
| グループ長 | 及川　清昭 | キャンパス計画室長 |
| メンバー | 服部　利幸 | OIC 地域連携室副室長 |
| | 武田　史朗 | キャンパス計画室副室長 |
| | 植木　泰江 | 総務部 OIC 事務局長 |
| | 長谷川　哲 | OIC 地域連携課長 |
| | 宮田　亮平 | OIC 地域連携課長補佐 |
| | 河合孝一郎 | OIC 教学課長補佐 |
| | 森山　哲朗 | 総務部付次長／財務部次長 |
| | 米川　義人 | 管財課長 |
| | 増田　幸治 | 管財課長補佐 |
| | 五坪　智彰 | 総合企画課長 |
| | 大藪　康成 | 総合企画課長補佐 |
| | 村山　昭宏 | 総合企画課 |

2017年度

| | | |
|---|---|---|
| グループ長 | 及川　清昭 | キャンパス計画室長 |
| メンバー | 服部　利幸 | OIC 地域連携室副室長 |
| | 武田　史朗 | キャンパス計画室副室長 |
| | 廣井　　徹 | 総務部 OIC 事務局長 |
| | 長谷川　哲 | OIC 地域連携課長 |
| | 河合孝一郎 | OIC 教学課長補佐 |
| | 米川　義人 | 管財課長 |
| | 大藪　康成 | 管財課長補佐 |
| | 増田　幸治 | 管財課長補佐 |
| | 稲森　裕実 | 総合企画課長 |
| | 加藤　功介 | 総合企画課長補佐 |
| | 村山　昭宏 | 総合企画課 |

## キャンパス計画室会議

2017年度

| | |
|---|---|
| 建山　和由 | 常務理事（企画担当） |
| 及川　清昭 | キャンパス計画室長 |
| 武田　史朗 | キャンパス計画室副室長 |
| 米川　義人 | 管財課長 |
| 長谷川　哲 | OIC 地域連携課長 |
| 木田　成也 | 総合企画部長 |
| 稲森　裕実 | 総合企画課長 |
| 加藤　功介 | 総合企画課長補佐 |
| 山菅　善樹 | 総合企画課長補佐 |
| 村山　昭宏 | 総合企画課 |
| 植田　依子 | 総合企画課 |

## キャンパス計画及びキャンパス整備担当

■キャンパス計画室（2017.12現在）

| | |
|---|---|
| 室長 | 及川　清昭 |
| 副室長 | 武田　史朗 |
| | 稲森　裕実 |
| | 加藤　功介 |
| | 村山　昭宏 |

■総合企画部／総合企画課（2017.12現在）

| | |
|---|---|
| 部長 | 木田　成也 |
| 次長 | 出口　昌良 |
| 課長 | 稲森　裕実 |
| ［キャンパス計画室担当］ | |
| 課長補佐 | 加藤　功介 |
| | 村山　昭宏 |
| | 植田　依子 |
| ［京都キャンパス担当］ | |
| 課長補佐 | 山菅　善樹 |
| | 中元　絵理子 |
| ［びわこ・くさつキャンパス担当］ | |
| 課長補佐 | 加藤　功介 |
| | 植田　依子 |
| ［大阪いばらきキャンパス担当］ | |
| 課長補佐 | 加藤　功介 |
| | 中元　絵理子 |

■財務部／管財課（2017.12現在）

| | |
|---|---|
| 部長 | 田尻　実 |
| 次長 | 豊田　耕三 |
| 課長 | 米川　義人 |
| ［京都キャンパス担当］ | |
| 課長補佐 | 本田　和馬 |
| | 樅野　篤基 |
| | 寺本　敦大 |
| ［びわこ・くさつキャンパス担当］ | |
| 課長補佐 | 大藪　康成 |
| | 橋詰　功 |
| | 眞鍋　誠 |
| | 平田　りえ |
| ［大阪いばらきキャンパス担当］ | |
| 課長補佐 | 増田　幸治 |
| | 川登　一幸 |
| | 山口　昌吾 |

# 編集後記と謝辞

## キャンパスマスタープラン 2018 の策定を終えて

立命館大学大阪いばらきキャンパス（OIC）は、既存キャンパスの狭隘化解消や新たな教学展開を目的として、キャンパス創造委員会とキャンパス計画委員会にて 2011 年に基本構想を取りまとめました。その後、開設準備委員会や整備部会、各種検討 WG 等、さらには開設準備室を設置し、教学面と空間面の双方から様々な検討を加え、2013 年に着工し、2015 年の開設に至りました。

一方、OIC の新設計画と併行して、京都キャンパスとびわこ・くさつキャンパスにおける再整備計画も本格的に始動し、2012 年には、キャンパスマスタープランの策定や各種施設整備計画のデザイン監修などを専門的に担う組織として、「学校法人立命館キャンパス計画室」が設置されました。キャンパス計画室では、既存キャンパスにおける新棟建設や改修・再整備などの設計監修・指導と併せて、2015 年には、全学的な検討体制と議論をもとに、京都キャンパスとびわこ・くさつキャンパスの「キャンパスマスタープラン 2015 Ver.1」を策定し、関係部局と連携を図りながらキャンパス創造を推進してきました。

今次の「大阪いばらきキャンパスマスタープラン 2018 Ver.1」においては、計画時の理念・方針・手法等を再整理し、また、開設後 3 年を経て新たに浮かびあがった課題を抽出するとともに、中長期的な視野に立ったキャンパス整備の指針を示しています。元来、キャンパスマスタープランは、アカデミックプランと経営戦略の変化に柔軟に対応しながら更新していくべきものであり、今後も引き続き検討を積み重ねていく必要があります。

OIC は、プロジェクトに携わったすべての人々の熱意と希望によって形作られました。学びの軸と市民交流の軸による基本骨格やコンコース、随所に配置されたコモンズ、環境配慮型建築手法、周辺地域との連携、市民開放など、キャンパス空間には多くの新たな試みが埋め込まれています。このような特性が継承されていくためにもキャンパスマスタープランが用意されています。

OIC のキャンパスマスタープランの策定に際しては、各学部・研究科、各部署とのヒアリングをはじめ、将来構想検討委員会や作業グループなどを通じ、多くの教職員と学生の支援を得て完成することができました。ここに、ご協力を頂きましたすべての皆様方に深く感謝申し上げます。

立命館のより良いキャンパス空間・環境の創造に向けて、今後とも多くの課題について継続的に検討を重ね、現状に立ち止まることなく従来の枠組みや手法を越えて、様々な可能性について積極的に提案を重ねていきたいと考えています。そのためには、引き続きより多くの皆さんの参画・協働をお願いしたいと存じます。

2018 年 4 月

学校法人立命館
キャンパス計画室長
及川清昭

# 所在地・交通案内

## 立命館 朱雀キャンパス

〒604-8520　京都市中京区西ノ京朱雀町1
URL　http://www.ritsumei.ac.jp/

■ JR・地下鉄東西線 二条駅　徒歩約2分
■ 京都市バス・JRバス「千本三条・朱雀立命館前」　下車すぐ
■ 阪急電鉄 大宮駅　徒歩約10分

## 立命館大学 衣笠キャンパス

〒603-8577　京都市北区等持院北町56-1
TEL.075-465-8144
URL http://www.ritsumei.ac.jp/

■ JR・近鉄 京都駅　市バス・JRバス、約35分「立命館大学前」下車すぐ、「衣笠校前」下車、徒歩約10分
■ JR 円町駅　市バス、約10分「立命館大学前」下車すぐ、「衣笠校前」下車、徒歩約10分
■ 阪急電鉄 西院駅　市バス、約20分「立命館大学前」下車すぐ、「衣笠校前」下車、徒歩約10分
■ 京福電鉄 西院駅　「帷子ノ辻」乗り換え約25分、「龍安寺」から徒歩約6分

## 立命館大学 びわこ・くさつキャンパス（BKC）

〒525-8577　滋賀県草津市野路東1-1-1
TEL.077-561-2617
URL http://www.ritsumei.ac.jp/

■ JR 南草津駅　近江鉄道バス「立命館大学行き」または「立命館大学経由飛島グリーンヒル行き」にて約20分、「立命館大学」下車

## 立命館大学 大阪いばらきキャンパス（OIC）

〒567-8570　大阪府茨木市岩倉町2-150
TEL.072-665-2020
URL http://www.ritsumei.ac.jp/

■ JR 茨木駅　徒歩約5分
■ 阪急電鉄 南茨木駅・大阪モノレール 南茨木駅　徒歩約10分
■ 大阪モノレール 宇野辺駅　徒歩約7分

## 立命館アジア太平洋大学（APU）

〒874-8577　大分県別府市十文字原1-1
TEL.0977-78-1111
URL http://www.apu.ac.jp/

■ JR 亀川駅　大分交通バス、約15分「立命館アジア太平洋大学（終点）」下車
■ JR 別府駅　大分交通バス、亀の井バス、約35分「立命館アジア太平洋大学（終点）」下車
■ 大分空港　空港リムジンバス「エアライナー」、約30分、亀川（古市）にて乗り継ぎ、反対車線の大分交通バス停、亀川（古市）約15分「立命館アジア太平洋大学（終点）」下車

## 立命館中学校　立命館高等学校

〒617-8577　京都府長岡京市調子1-1-1
TEL.075-323-7111
URL http://www.ritsumei.ac.jp/fkc/

■ JR京都線 長岡京駅　徒歩約15分
■ 阪急電鉄 西山天王山駅　徒歩約6分
■ 京阪電鉄 淀駅　バス約12分

## 立命館宇治中学校　立命館宇治高等学校

〒611-0031　宇治市広野町八軒屋谷33-1
TEL.0774-41-3000
URL http://www.ujc.ritsumei.ac.jp/ujc/

■ 近鉄 大久保駅　バス約10分
■ JR奈良線 新田駅　徒歩約20分
■ JR奈良線 宇治駅　バス約15分
■ 京阪電鉄 宇治駅　バス約20分

## 立命館慶祥中学校　立命館慶祥高等学校

〒069-0832　北海道江別市西野幌640-1
TEL.011-381-8888
URL http://www.spc.ritsumei.ac.jp/

■ JR 新札幌駅・地下鉄 新さっぽろ駅　通学バス約15分

## 立命館守山中学校　立命館守山高等学校

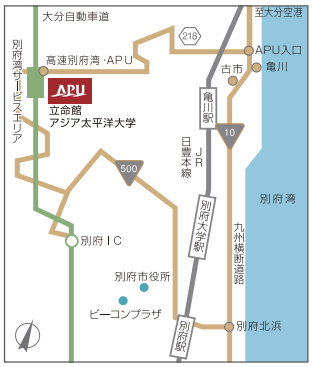
〒524-8577　滋賀県守山市三宅町250番地
TEL.077-582-8000
URL http://www.ritsumei.ac.jp/mrc/

■ JR 守山駅　近江鉄道バス約8分

## 立命館小学校

〒603-8141　京都市北区小山西上総町22
TEL.075-496-7777
URL http://www.ritsumei.ac.jp/primary/

■ 地下鉄烏丸線 北大路駅　徒歩約3分
■ 京阪電鉄 出町柳駅　市バス、約13分「北大路バスターミナル」下車、徒歩約3分



## 付.7　OICの開設以後の受賞歴

**2015年度**　グッドデザイン賞(公益財団法人　日本デザイン振興会)

コージェネ大賞民生部門特別賞（一般財団法人コージェネレーション・エネルギー高度利用センター）

日経ニューオフィス賞：近畿ニューオフィス推進賞（一般社団法人ニューオフィス推進協会）

おおさか環境賞（里山活動）：協働賞（大阪府）

日本空間デザイン賞：入選（日本空間デザイン協会）

大阪ランドスケープ賞：大阪府知事賞（大阪府）

第15回読者と選ぶ「建築と社会」賞：入賞（日本建築協会）

サステイナブルキャンパス賞2015建築・設備部門（サステイナブルキャンパス推進協議会）

第49回SDA賞：入選（A-2類公共サイン部門）（日本サインデザイン協会）

**2016年度**　平成27年度ﾘﾃﾞｭｰｽﾘｭｰｽﾘｻｲｸﾙ推進功労者等表彰：協議会会長賞（産業環境管理協会）

大阪都市景観建築賞：審査員特別賞（大阪都市景観建築賞運営委員会）

環境設備デザイン賞：2016優秀賞（都市・ランドスケープデザイン部門）（環境設備綜合協会）

第4回インテリアプランニングアワード2016：入選（日本インテリアプランナー協会）

**2017年度**　電気設備学会賞：施設奨励賞（電気設備学会）

作品選集（日本建築学会）

日本建築家協会優秀建築選（日本建築家協会）

**大阪いばらきキャンパスマスタープラン 2018 Ver.1**

**発行日**

２０１８年4月

**企画・編集**

OIC将来構想検討委員会
OICマスタープラン作業グループ
学校法人立命館　キャンパス計画室
学校法人立命館　総合企画課、管財課

**発行**

学校法人立命館
〒 604-8520　　京都市中京区西ノ京朱雀町 1

立命館大学　大阪いばらきキャンパスマスタープラン2018 Ver.1
RITSUMEIKAN UNIVERSITY　OSAKA IBARAKI Campus Master Plan 2018 Ver.1

発行：学校法人立命館
企画・編集：OIC将来構想検討委員会、OICマスタープラン作業グループ、学校法人立命館キャンパス計画室、総合企画課、管財課

+R 未来を生みだす人になる。
立命館大学
RITSUMEIKAN